主日の福音 13/01/01(No.628)

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）

見聞きしたことは天使の話したとおりだった

新年明けましておめでとうございます。今年はいつもよりも寒さの厳しい新年となりました。何年か前にどさっと雪が降った年をのぞけば、わりと五島のこの時期は以前よりも暖かくなったかもしれないなぁと思います。今年は信仰年、信仰を見つめ直し、信仰を深める取り組みをみなさんと一緒に進めたいと思います。
小さな取り組みをここ１年数ヶ月続けてきました。日曜日のミサの前に録音 CD を使って聖書の朗読を行い、新約聖書まるまる１冊を読み終えようという試みを行っていましたが、とうとう来週ですべて読み終えることになりました。
20 分収録した CD の枚数が 78 枚でしたので、足かけ１年半かかかってしまいました。辛抱強く取り組みに参加してくださった方、ご協力に感謝します。もちろん、多くの人の参加を求めるには、いちばん良い方法だったとは言えないかもしれません。人数は少なくなりましたが、78 回の朗読聖書に耳を傾けて新約聖書を読み終えた皆さん、おめでとうございます。次は信仰年に関わる取り組みを考えてみたいと思います。
新年を迎えての福音朗読は、羊飼いたちが、生まれたばかりの幼子、救い主を探し当てた場面から始まります。今日の朗読から２つ、取り上げたいと思います。１つは、「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだった」と羊飼いが確認し、神をあがめ、賛美しながら帰って行ったということ、もう１つは、「羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた」ということです。
「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだった」天使が羊飼いに話した言葉を確かめましょう。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」（2・10-12）
たしかに、自分がその目で見、確かめた出来事は、すべて天使の話したとおりだったでしょう。話したとおりですが、なぜ羊飼いたちは、「布にくるまって飼い葉桶の仲に寝ている乳飲み子」を見るだけで、神をあがめ、賛美することができたのでしょうか。
実はわたしたちは、大事なことを見落としていると思います。救い主が生まれる。そんなに偉大なお方がおられる場所に、ふつうに考えると一般庶民が近づけるはずはないのです。仮に国王の下で王子が生まれて、その上もしも王子が布にくるまれて飼い葉桶の中に寝ていたとしても、そこまで一般人が近づくのは到底無理です。
ところが、羊飼いという、言ってみれば一般人よりも一段低く見られていたかもしれない人たちが、救い主を目の当たりにすることができました。とてもお目にかかることはできないだろう。そんなことさえ考えて

しまう相手に、自分たちがお会いできたのです。
すると、「すべて天使の話したとおりだった」とは、羊飼いのために、救い主をお遣わしになっただけでなく、近寄ってその目で見て、感謝と賛美をささげることができた。そこまでを含んでいるということです。もしお目にかかれなくても、救い主がお生まれになったことは信じることができたでしょう。喜ぶこともできたでしょう。けれども、近寄って、その目で確かめて喜ぶことができた。羊飼いには、畏れ多くて期待できないことまで叶えてもらったので、天使の話したことは全部本当だったと確信できたのです。
もう１つの点にも目を向けましょう。「羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた」とあります。どんな思いで、人々に知らせたのでしょう。
わたしは、羊飼いが、知らせることを自分たちの使命だと感じて知らせたのだと考えます。興味を持ったから、話のついでに、人々に知らせたのではありません。これは、知らせなければならない。そう感じて行動したのではないでしょうか。
天使の語ったことが、出来事になったとは言え、それを他人事としてしまっては何にもなりません。自分たちのために、神のことばが出来事になったのだと納得しなければ、意味を失ってしまうのです。
もちろん、すべての人が同じような反応をするとは限りません。羊飼いたちが出来事を知らせた人々は皆、羊飼いたちの話を不思議に思ったとあります。救い主が生まれたことを知って、ある人は自分のことのように喜ぶでしょう。ある人は興味を示さないかもしれません。ある人は、敵意さえ持つかも知れません。知らせた人にも敵意を感じ、危害を加えようとするかもしれません。それでも、羊飼いは「知らせなければならない尊い出来事を見た」そう思って行動に出ました。
わたしたちも、信仰年の中で迎えた神の母聖マリアの祭日、正月元日を、「大切な、知らせるべき出来事を目にして信仰の門をくぐった」そう考えることにしましょう。信仰の門を神の母聖マリアを祝いながらくぐったわたしたちは、この一年行く先行く先で「大きな喜び」を知らせたいと思います。
「あなたには、大きな喜びがありますか。わたしには、大きな喜びがあります。」そう話しかける勇気を神の母に願いましょう。神のもとで執り成しをしておられる母マリアが、告げ知らせようとするわたしたちをこの一年見守ってくださるよう、このミサの中で願いましょう。

主の公現(マタイ 2:1-12)

主日の福音 13/01/06(No.629)

主の公現（マタイ 2:1-12）

幼子イエスを近くに感じて生きていく

正月休みで実家に帰っていました。三男と、末っ子の妹夫婦も帰ってきていました。久しぶりに賑やかな正月でした。
帰省中も、変わらず走り込みをしました。蛤地区にある有川総合運動公園に、野球場をぐるっと囲むようにジョギングコースがありまして、1周 700 メートルのジョギングコースをひたむきに 1 時間走り続けました。この日は帽子を忘れまして、何もかぶらずに走り出しました。
走っている間、何人か人と会いましたが、三輪車に乗っている 2 人の女の子と途中ですれ違いました。この女の子たちが、奇妙なことを言い出したのです。「見て見て。カッパがいるよ。」そこにわたししかいなかたので、わたしは「失礼な子供だなぁ」と思いつつも、認めたくなかったので無視して周回を続けました。
この三輪車の女の子の前をもう一度通りましたら、あっけらかんとして「こんにちは（笑）」と声をかけてくるのです。「このやろう」と思っていたので、不機嫌そうに「こんにちは」と返して通過しました。その、通過した直後です。「ほら、やっぱりカッパだ。」だれがカッパですか。もう蛤の運動公園周辺は絶対に走りたくないです。
カッパの話は少々言ったくらいでは気が晴れませんが、大人げないのでもうやめます。今週は主の公現の祝日、占星術の学者たちがひれ伏して幼子イエスを拝む場面です。あらためて、この占星術の学者たちの言葉「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」（2・2）から、今週の学びを得たいと思います。
「ユダヤ人の王」という呼び名は、素直に受け取ると「ユダヤの国の王」「ユダヤの人々の王」という意味かなと考えます。「イギリス女王」とか、「ブータン国王」と言う時は、上記の意味になるからです。
ところが、「ユダヤ人の王」という表現が、新約聖書のどこに現れるかを考えると、地域や国民を限定する王という意味ではないようだということが分かります。「ユダヤ人の王」は、「イギリス人の王」「ブータン国の王」とははっきり区別されるのです。
具体的な数字で見てみましょう。「ユダヤ人の王」という表現は新約聖書の中に 17 箇所現れますが、そのうち 16 箇所はイエスの受難の場面で使われています。唯一の例外は、今週の朗読箇所です。残る 16 箇所、イエスの受難の場面で「ユダヤ人の王」とよばれるのは「人類のために十字架上でいのちをささげる王」という意味です。
すると、マタイは、特別な意味を持たせて占星術の学者に「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」と言わせているのではないでしょうか。この推理が当たっているのであれば、今週の朗読箇所で出てきた「ユダヤ人の王」も、もはや例外とは言えなくなります。
朗読に戻りましょう。占星術の学者たちがヘロデ王に「ユダヤ人の王と

してお生まれになった方は、どこにおられますか」とあいさつした時、「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった」（2・3）とあります。
ヘロデが不安を抱いたのは、生まれたというその幼子が、「十字架の上で命をささげる王である」から、不安をかき立てたのでしょうか。そうではないと思います。ヘロデは人のために命をささげる王など、まったく興味がないのではないでしょうか。ヘロデが警戒し、神経をとがらせるのは、「自分の王位を脅かす存在であるかどうか」のはずです。王位を脅かすと感じたので、ヘロデは不安を抱いたのです。
そうなると、ヘロデは占星術の学者たちの言葉を理解しなかったことになります。後に十字架の上で命をささげる王として生まれた幼子を、ヘロデは自分の王位を脅かす存在と取り違えたのです。
ヘロデは、ユダヤの国で権力を握っていましたから、どんな人にも近づくことができる人物でした。ヘロデが幼子イエスに近づきたいと心から望めば、イエスに近づくことはできたでしょう。けれどもヘロデは、幼子イエスの命を狙い、その存在を自分から遠ざけようとしていました。
一方占星術の学者たちは、外国人でありながら、もっとも近くに寄ることができました。イエスのそばに行きたい。イエスにご挨拶したい。その真摯な気持ちが、星の導きによって形になったのです。
ヘロデと占星術の学者たちとの違いがここに明らかになります。ヘロデは、イエスを遠ざけようとする人の代表です。占星術の学者たちは、イエスに心から近づきたいと願う人々の代表です。どちらの姿を、わたしたちが受け入れるのか。それが今週問われています。
もちろん、わたしたちはイエスに近づきたいと思い、イエスの前に姿勢を低くすることが期待されています。幼子に贈り物を用意し、礼拝をささげた占星術の学者が幼子イエスにいちばん近づくことができました。わたしたちにも贈り物があって、礼拝する気持ちがあれば、必ずイエスのいちばん近くに行くことができるはずです。
もう一度、イエスとわたしたちの間の距離を確かめましょう。わたしはイエスを近くに感じたいと思っているでしょうか。イエスを嫌い、遠ざけたいと思っているでしょうか。わたしの思っていることが、そのままわたしに態度を取らせます。ぜひイエスをつねに身近に感じ、身近に感じることを喜びとすることができるように、ミサの中で恵みを願いましょう。

主の洗礼(ルカ 3:15-16,21-22)

主の洗礼（ルカ 3:15-16,21-22）

イエスが並ぶ列にわたしたちも並ぶ

司祭団のマラソン大会も目の前に迫ってきました。毎日欠かさず走っているわけではありませんが、健康ってありがたいなぁとつくづく感じます。完全な健康体というわけではありません。コレステロール値は高いし、血圧も高めです。けれども、今年のマラソン大会に向けてコツコツ練習を積み重ねていけること。それだけでも有り難いなと思うのです。
こんなことを言うのには訳があります。聞いた所では、今年目標にしていたライバルが、どうやら肉離れを起こして戦線離脱するらしい、という情報を聞いたのです。目標にしていると言っても、去年のタイムで１分の差がありましたので、相当高い目標だったのですが、目標としていた相手が早々といなくなってしまいました。
また、同級生とか、少し上の先輩方を見渡すと、ある同級生は膝を壊していて参加もままならないと聞いていますし、タイム的にもっともライバルになりそうな少し上の先輩も、ここ最近は病気をおしてレースに参加しているそうです。他にも血圧の薬を飲んでいる先輩とか、ましてや脳出血でマラソンどころではない後輩もいます。そうした身近な司祭たちと比べれば、わたしは練習ができて、レースに参加できるのですから、健康に感謝です。本当にそう思います。
「記録は狙えないけど、今年も健康で走れたね。」そういうレベルのマラソン大会ですが、もしよかったら、冷やかしに 1 月 29 日（火）、五島市の福江教会にお集まりください。今年は、福江教会スタート、折り返して福江教会ゴールとなるはずです。当日 10 時スタートです。
さて今週は「主の洗礼」を祝っています。イエスが洗礼を受けたという記述については、史実かどうかが疑われていました。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたということは２つのことを連想させます。
１つは、洗礼を授ける者は洗礼を受ける者よりも上の立場にあると考えられますが、それだと洗礼者ヨハネはイエスよりも上の立場にあることになります。もう１つは、洗礼者ヨハネが授けていたのは「悔い改めの洗礼」でした。イエスがこの洗礼を受けたとなれば、イエスには悔い改めるべき事が何かしらあったのかという問題が生じます。
ルカは、この２つの疑問に正面から立ち向かって、イエスはそれでも洗礼者ヨハネから洗礼を受けたのだと、言いたいのだと思います。触れないでおけば、議論にならなかった部分をあえて取り上げているのですから、ルカにはそれなりの覚悟があったと考えるべきでしょう。
２つの疑問に、説明はつくでしょうか。まず１つめは、洗礼を授ける者が、洗礼を受ける者よりも上の立場なのではないかという点です。わたしは経験上、恵みを授ける者が、恵みを受ける者よりも低い立場なのに、奉仕の務めを果たしているのを見ています。叙階式、新司祭が誕生する喜びの日に、新司祭は多くの人から「わたしの上に祝福をお願いします」と願われます。わたしも新司祭の時にそうやって頼まれました。

わたしの目の前にひざまずく人々の中に、わたしが福岡の大神学院時代に８年間教え、指導してくださった教授がいました。うやうやしく、新司祭の前にひざまずく大先輩の司祭、教え導いてくださった司祭がひざまずくのを見た時に、胸が熱くなるのを覚えました。わたしが偉いからわたしの前にひざまずいているのではありません。わたしを通して働く父なる神の前に、教授であった司祭もひざまずいておられたのです。
すると、洗礼者ヨハネの前にイエスがひざまずくのは、洗礼者ヨハネを通して働くイエスの父である神に、ひざまずいているのではないでしょうか。そうであっても、もちろん洗礼者ヨハネを無視しているわけではありません。洗礼者ヨハネを通して、父なる神が働いていることを、イエスはよく理解しておられます。ですから、イエスが洗礼者ヨハネの前にひざまずいて、洗礼を願うことは十分可能です。
もう１つ、イエスは悔い改めの必要があったのか、という点です。結論から言うと、イエスには悔い改める点は何もなかったし、その必要もありませんでした。けれども、民衆が皆洗礼を受けているその列に並ぶことは、イエスにとって十分意味があるとお考えになったのです。
わたしたちはどうしても行列に並ぶ必要があると考えれば、１時間でも２時間でも行列すると思います。わたしは大学生の時にディズニーランドでその体験をしました。乗ってみたいと思ったアトラクションの列に近づくと、係の人が「最後尾・２時間待ち」という看板を持っていたのです。「別のアトラクションに回ろう」と言う友だちもいましたが、２時間待ちの列に並び、忘れられない体験をしました。
「民衆が皆洗礼を受けていた」その場面は、まさに洗礼者ヨハネの前に立つために行列をして並んでいたということではないでしょうか。それほど、悔い改めの洗礼の列に並ぶことは意味があったのです。
洗礼者ヨハネのもとに集まった人たちは、どうすれば、神さまとの関わりを正しい姿にできるか、悩んでいた人たちでした。彼らは悔い改めの洗礼こそが、神さまとの関わりを正しいものにすると考え、望みをかけて列に並んだのです。
イエスも民衆の列に並びました。ただイエスのお考えは、民衆の考えを超えていました。イエスご自身が、前にいる民衆も後に続く民衆も、神との正しい関わりに導くために、列に並ばれたのです。たとえどんなに長い列でも、そこに並ぶすべての人を神との正しい関わりに導くために、イエスが並ぶ必要があったのです。そして、民衆に悔い改めの洗礼を授ける洗礼者ヨハネをも、イエスが授ける聖霊による洗礼に導くために、列に並んでいたのです。
わたしたちも、イエスとともに当時の民衆の列に並びましょう。イエスが並ぶ列にわたしたちがともに並ぶ時、その列は清められ、導かれていきます。わたしたちが何かの方針を立てる時、何か一致した行動を取る時、その列にイエスも並んでくださることを願い求めましょう。イエスが並ぶ列には、父なる神が「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（3・22）という声をわたしたちは聞くことができます。

主日の福音 13/01/20(No.631)

年間第２主日（ヨハネ 2:1-11）

イエスこそが、神と人とを結ぶぶどう酒

上五島地区の兄弟司祭が脳出血で倒れて約半年、昨年 10 月に見舞ってから３ヶ月ぶりに長崎のリハビリテーション病院に見舞いに行きました。この病院は機能回復のリハビリを専門に施す病院です。
まず感じたのは、３ヶ月前とは見違えるような回復を見せていたということです。わたしの記憶では、３ヶ月前には自分で車いすから立ち上がったりはできなかったと思うのですが、洗面台の鏡を前にして、車いすに座った状態から、すっと立ち上がってみせました。わたしも思わず「おお！立ち上がれるようになったか」と声が出ました。
見た目もすっかり変わりました。半年前に倒れた時は体重が 160 キロあって、ヘリコプターで運ぶのに往生したそうですが、本人の話では 120 キロを切ったと言っていました。こんなこと言ってよいか分かりませんが、「ようやく人間になったなぁ」と心の中で思いました。
前回見舞った時は明らかに言語障害が見られて、言葉が出て来なかったり、話しているつもりでも舌が回っていなかったりしていたのですが、この前会った時は、与えられた文章を声に出して読む訓練をしていまして、読み間違いはあったにせよ、格段に回復していると感じました。
全体として、希望の持てる回復ぶりだなぁと思いました。もちろん、もとの教会に復帰するのか、または違った形で司祭として生きていくのか、一司祭に過ぎないわたしには何とも言えませんが、一般的な「機能回復」という意味では、本当によく頑張っているなという印象でした。
年間の主日に入りました。主の降誕のあとの年間主日は、頭に灰をかぶる「灰の水曜日」から始まる四旬節までの短い年間主日です。今年は四旬節までに４回年間主日が回ってきます。
降誕節直後の年間第２主日に、福音朗読は「カナでの婚礼」を選びました。カナの婚礼での出来事は、ぶどう酒がなくなり、宴会が台無しになろうとしていた時に、マリアがその様子をさりげなくイエスに伝え、いったんは母マリアの願いを退けているように見えますが、水をぶどう酒に変えるという最初の、驚くべきしるしをおこなうという物語です。
今回わたしは、救い主イエスの降誕と、イエスの御受難を念頭に置いて、この物語を考えてみたいと思います。まず婚礼の席でぶどう酒がどのような役割、意味合いを持っているかを考えてみましょう。
結婚した夫婦を祝うために集まった婚礼の客は、家族や親戚のような身内は血縁関係がありますが、その他はいわば他人です。その他人が、婚礼の席に留まっているのは、ぶどう酒のおかげと言ってよいでしょう。ぶどう酒に代表される食事やお酒を振る舞ってもらい、食事をして喜び合っているから、その場にいるわけです。もし食事が出ないのなら、長居をする理由もなくなってしまいます。そうした、多くの人が婚礼の場に留まるための大切な飲み物として、ぶどう酒は必要なものでした。
ところが、そのぶどう酒がなくなってしまいます。招待した側は、思い

のほか客がたくさん入ってしまい、必要なぶどう酒の量を読み誤ったのかもしれません。このままだと、婚礼の席に、ぶどう酒があるから留まっているような人々は、その場にいる理由がなくなり、帰ってしまうことでしょう。
マリアはそのことを敏感に察知して、イエスに「ぶどう酒がなくなりました」（2・3）と言ったのだと思われます。客が帰ってしまわないためには、客を婚礼に結びつけるものがどうしても必要です。「ぶどう酒がなくなりました」イエスにはこれだけで伝わる、そう考えたのでしょう。
ところが、イエスはいったんは母マリアの願いを退けたかのような反応をします。イエスは客を婚礼に結びつけるためには力を貸してくれなかったのですが、婚礼に来たすべての人を、父なる神に結びつけるために、マリアの願いに応えてくださったのです。
イエスは婚礼の召し使いたちを使って、水をぶどう酒に変える奇跡を行いました。けれども、この奇跡を表面だけで受け取るべきではありません。この奇跡は、単に客を婚礼に結びつけるための奇跡ではないのです。そうではなく、今にも大混乱に陥ろうとしている客や招いた人々を、神は心配して救ってくださる。そのことを教えるためのしるしだったのです。婚宴の席だけではなく、人が途方に暮れそうになるあらゆる場面で、イエスは神と人々を仲介するぶどう酒となってくださり、必ず救ってくださる。そのことを教えるためのしるしだったのです。
今週の説教で前置きしたことにも話をつないでおきましょう。今の年間主日は、降誕節のあと四旬節に入るまでの４週間だと言いました。イエスは、今日のカナでの婚礼のしるしで示されているように、ぶどう酒となるためにお生まれになったお方です。
ぶどう酒が、婚礼の席で結婚する当事者と客を結ぶものであったように、お生まれになったイエスは、神と人とを結び付けるぶどう酒となるために、お生まれになったのです。
それだけではありません。この短い年間主日を過ぎると、四旬節です。イエスの受難に向かっていく季節です。受難とご死去に結び付けて考えるなら、イエスは神と人とを、ご自分の血を流して結び付けるためにお生まれになったのです。ご自分の血を流して、ご自分の血をぶどう酒とされて、神と人とを結び合わせるために、お生まれになったのです。
あらためて、イエスが水をぶどう酒に変える場面を思い起こしましょう。80 リットルから 120 リットル入る水がめ六つを、かめの縁まで満たし、すべてぶどう酒に変えたのです。それは、全世界の人を救うために流される、十字架上のイエスの血の量と言ってもよいのではないでしょうか。かめの縁まで満たした水がぶどう酒になり、婚礼の席に集まった人が窮地を救われました。あの出来事は神の救いのみわざのしるしに過ぎません。全世界の人、わたしたちも含めてすべての人が救われるために、イエスは神の国のぶどう酒となってくださったのです。ミサの中で感謝をささげましょう。そして機会を捉えて、「イエスはわたしたちと神さまを結び合わせるぶどう酒です」と、告げ知らせることにしましょう。

主日の福音 13/01/27(No.632)

年間第３主日(ルカ 1:1-4,4:14-21)

聖書の言葉はイエスによって実現する

先週の教会学校で、堅信を受けた中学生にお願い事があって、勉強を始める前に切り出したんです。「来年から中学生は１・２年生だけだと３人になるから、中学３年生になってからも聖書の朗読を続けてくれないか。」すると、堅信を受けた中学生たちから即座に「嫌です。しません」と断られました。
わたしは断られても頼むしかないので、「そう言わずに引き受けてくれ。君たちの頑張りがあると、再来年以降も中学３年生が聖書を読むすばらしい伝統が出来上がるんだよ」と言いますと、もっと激しく抵抗されまして、「絶対嫌です。福見では小学生が聖書朗読しているじゃないですか。来年から日曜日の侍者をする小学生にさせればいいじゃないですか。」とまくし立てられました。
確かに木曜日夕方のミサで、福見教会の小学生は聖書の朗読をしています。それはそうだけれども、堅信の秘跡を受けて、来年は中学の最高学年になるみんなに、わたしは聖書朗読をして欲しいと思っているわけです。目の前で「絶対嫌です」と言っているのを無理強いすることもできず、「来週また話そう」と言って、ひとまずその話は取り下げて勉強を始めました。
なぜわたしの言っていることが通じないのでしょうか。受験生になる来年、聖書朗読を通して典礼のお手伝いをすれば、必ずイエスさまからの報いがあって、受験の時に恵みが働いてくれるのです。それを知らせたくて喉まで出かかっているのですが、言わないでおこうと思います。
全部説明してあげるのは、堅信の秘跡を受けた中学２年生に対して失礼です。あそそこまで神父さまがお願いしているのはなぜだろうと、自分で考えて答えを探せると思っています。しかし絶対引き受けないというのはいかにももったいないことです。
わたしは中学３年生の時、もう一人の先輩神学生とほぼ１日交代で毎日のミサの聖書朗読をしました。高校受験には、文章の理解力、記憶力、知らない言葉を推理する力が必要ですし、面接試験の時に初めて会う先生に堂々と自分の考えを伝える力も必要です。わたしはそれらすべてをミサの聖書朗読で培いました。でも、それは言わないでおきましょう。
今週の福音朗読は、イエスが会堂でイザヤ書を手渡されて、目に留まった箇所をお読みになり、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（4・21）と話し始められたという場面になっています。
念のために断っておきますと、来週は今週の場面の続きで、これほど恵みに満ちたことをイエスが話したにもかかわらず、会堂に集まっていた人々から追い出され、山の上の崖から突き落とされそうになるという出来事が控えています。ですからここはぬか喜びできない場面です。
わたしが今週考えたいのは、「聖書の言葉は、どのようにして実現する

のか」ということです。イザヤの預言は、イエスの時代から何百年も前に語られた言葉です。何百年も前の出来事が、イエスによって語られた時に、「今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われているのです。
３つの条件が必要になります。１つは、預言の言葉を語る人が必要です。ここではイエスがイザヤの預言の言葉を語ります。２つめは、預言の言葉を聞く人が必要です。ひとまずは、会堂内にいるすべての人が、預言の言葉を聞いています。３つめは、預言の言葉を実現するイエスがそこにおられるということです。この３つが揃わないと、どれだけ時間が経過しても、どれだけ預言の言葉を語る人が増えても、預言は実現しません。
ですから預言が実現するその中心には、必ずイエスがおられることが必要です。何百年前に預言者に託された言葉も、イエスがお生まれになり、イエスを通して預言は実現することになりました。救いに関わるすべての預言は、イエスを通して実現していきます。
福音書のさまざまな箇所で、「預言者を通して言われていたことが実現するためであった」という引用があります。それはイエスの言葉、振る舞いと結びついています。イエスがこのように言われたのは、「預言者を通して言われていたことが実現するためであった」イエスがこのように振る舞ったのは「預言者を通して言われていたことが実現するためであった」というような表現です。預言の実現には、必ずイエスがそこにおられることが鍵になってきます。
そこでもう一度堅信を受けた中学生がミサの聖書朗読を引き受けてほしいなぁという話に立ち帰ると、この願いが神に受け入れられて実現するためにも、３つの条件が必要なのではないかと思うようになりました。
預言の言葉はこうです。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ 16・15）この預言の言葉を語るのは中田神父です。この言葉を聞くのは今日ミサに集まっているすべての人です。そしてここにイエスがおられます。３つの条件すべて整っています。条件はすべて揃っていますから、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」はずです。あとは信頼をもって、粘り強く堅信の秘跡を受けた中学生に考えてもらいたいと思います。
中学３年生という期間は生涯で１度しかありません。わたしも十分それは理解しています。明後日火曜日、わたしは司祭マラソン大会に行ってきますが、これまでの努力の結果を発揮できるのはこの日しかありません。たとえ何百日、この日のために努力しても、大会当日に風邪を引いて不参加となれば、いくら「練習では調子が良かった」とか「出場していれば好成績が残せたはずだ」と言っても通用しないのです。
１度しかないチャンスを、「福音を宣べ伝えなさい」という預言の実現のために力を貸してくれたらどんなに嬉しいでしょう。そうわたしは思っています。わたしだけでなく、ここにいるすべての人が、もっと言うとこの説教をブログやメルマガで読んでくれているおよそ 500 人くらいの読者が、同じ期待を持っていると思います。

年間第４主日(ルカ 4:21-30)

あなたの心の器を満たしてくださるかた

司祭団マラソン大会は疲れました。順位は７位でしたが、ほとんどの神父さまがタイムを大幅に伸ばした中で、わたしだけがまったくタイムが伸びず、順位を下げてしまう結果になりました。
去年は１キロ５分を切る人は１人しかいなかったのに、今年は上位４人が１キロ５分を切ってきました。いかにレベルが上がっていたかということが分かります。５分を切るのはかなり難しいですが、みなさんの喜ぶ顔が見たいので、努力してみたいと思います。
年が明けてから紅茶を飲むようになりました。自分で買い求めたのではなくて、東京から浜串教会のクリスマスミサに参加してくださったエッセイストの方が、東京のお土産としてくださったものです。せっかくならおいしくいただこうということで、ハリオのガラス製急須を買い求め、紅茶の色合いを目で確かめながら飲んでいます。
日本茶も紅茶もそうですが、急須にお湯を注ぐ時、分量を加減してお湯は注ぐはずです。間違っても無制限にお湯を注いでお湯をあふれさせるようなことはしないでしょう。また、すでにお湯が入っているのに、それにさらにお湯を足したりはしないはずです。お湯があふれ、紅茶もお茶も無駄になってしまうのは目に見えているからです。
わたしは今週の福音朗読を学ぶのに、急須に注ぐお湯をヒントにしてみたいなと思いました。今週の朗読箇所の中で、「満たされる」という言葉がもとになっている単語が２つあります。１つはイエスが「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（4・21）と言われた時の「実現した」という単語です。
もう１つは、意外に思われるかもしれませんが、イエスの言葉を受け止めることができなかった会堂内の人々が「皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした」（4・28-29）という場面での、「憤慨した」という単語です。
「預言が実現した」ということと、「人々が憤慨した」ということに何の関わりがあるのだろうかと不思議に思うかもしれません。この両者は満たされるものが違うために、これほどの開きになりました。一方は神の言葉が満たされ、他方はイエスの言葉を理解しない人々の不満や怒りが満たされたのです。
説教の始めに、急須のことに触れましたが、神の言葉が満たされ、預言が実現しました。それはたとえば急須にお湯が注がれ、紅茶が出来上がった状態です。紅茶はそのままにしておくと酸化して傷んでいきます。出来上がったなら、時を置かずにカップに移し、それを飲んで楽しむべきです。最初のお湯が注がれた状態に、さらにお湯を注ぐべきではない。それはだれでも分かることです。
イエスは、預言の言葉が実現したと語りました。それを会堂にいた

人々は何も足さず何も引かず、受け入れるべきでした。けれども人々はイエスの言葉をそのまま受け取りませんでした。「この人はヨセフの子ではないか。」（4・22）人々の期待は、イエスが神の言葉を語ることではなく、郷里の自分たちをひいき目に扱って、便宜をもたらしてくれることを願っていたのです。
イエスに、地元をひいきする気持ちが一切無いことが分かると、人々の心は怒りで満たされます。人々の期待と、イエスの願いとは水と油の状態です。怒りが満たされた人々という急須の中に、イエスによって満たされた神の言葉が注がれるとどうなるでしょうか。それは急須からあふれだし、人々の口に神の言葉は何も残らないでしょう。
人々はすでに怒りに満たされ、イエスの言葉をまったく受け付けない状態になっていました。自分たちの都合に合うことを言ったりしたりしてくれないなら、もはやイエスなど必要ない。そのような気持ちだったのでしょうか。人々はイエスを崖から突き落とそうとさえしたのでした。
急須をあふれ出したお湯は、高い所から低い所へこぼれていきます。高ぶっている郷里の人々から排斥されたイエスは、低い心がけの人、貧しい人、謙虚に耳を傾ける人々のもとへ向かいました。「イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。」（4・30）この場面はわたしたちにも教訓を与えているのではないでしょうか。
わたしたちの心の中は、良い香りを放つ茶葉を用意された急須のようです。もしそこに、神の言葉が注がれ、満たされるなら、わたしたちは神の言葉の良い香りを放ち、人々を喜ばせる急須となることでしょう。
ところが、良い茶葉を用意されているのにわたしたちが日常生活で怒りや不平不満や憎しみで急須を満たすならどうなるでしょうか。わたしたちが放つ香りは怒りや憎しみとなり、わたしたちが人々に注ぐものも迷惑なものとなるでしょう。怒りや不平不満に満ちた心の急須には、イエスが満たしてくださるはずの神の言葉も恵みも留まらず、氾濫して他の人々に向かうのです。
わたしたちの心の中は今どうなっているでしょうか。イエスから神の言葉を注がれるだけの場所が残されているでしょうか。独りよがりの思いで満たされていたり、ましてや悪い思いに充ち満ちているなら、いったんその急須は空にしましょう。
もう一度祈りのことばや聖書を読むことで新しい茶葉を調え、イエスに恵みを注いでもらいましょう。そうしてわたしの心を良い香りで満たし、それを周りの人と分け合って喜びましょう。イエスは今日も、自分たちに都合の良いことばかりを求めようとする高慢な人々の間をすり抜けて、恵みを注がれる時を待ち続けている謙虚な人のもとへ向かおうとしておられます。

主日の福音 13/02/10(No.634)

年間第 5 主日（ルカ 5:1-11）

あなたは人を捕らえるために捕らえられた

2 月 13 日水曜日から教会の典礼暦は四旬節に入ります。今週の年間第 5 主日は、四旬節の心構えを学ばせるかのような福音朗読が選ばれました。物語は、「漁師を弟子にする」という場面です。まず、イエスと、まだ弟子になっていないシモンとその仲間の漁師たちとのやり取りで、押さえておくべき点を指摘したいと思います。

イエスはシモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」（5・4）と言われますが、これは厳密には、シモン一人に命じたのでしょうか。日本語にはわざわざ書かれてはいませんが、網を降ろして漁をするということから考えると、シモンとその仲間に、漁をするように命じたと考えるべきです。

実際、日本聖書協会から出ている和英対照の聖書に当たると、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、『あなたとあなたの仲間は』漁をしなさい」という意味の文章になっています。このように命じるのはごく当然のことであり、英文はその点をはっきりと文字に表しています。

では、イエスの命令に対して、シモンの返事はどうでしょうか。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」（5・5）と答えています。

本来なら、文字には現れていない部分を汲み取って、「しかし、お言葉ですから、『わたしとわたしの仲間は』網を降ろしてみましょう」という意味で理解すべきだと思います。ですが、この部分に当たる英文と照らし合わせると、そうはなっていないことが分かります。

実際は「わたしたちは夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、『わたしは』網を降ろしてみましょう」と書かれているのです。イエスの命令には「あなたとあなたの仲間」と書かれているのに、ペトロの返事にはペトロだけの決断であったことをうかがわせる書き方をしているわけです。

恐らく、だれがどう考えても網を降ろすという行為は理解できなかったのでしょう。賛成してくれる人は誰もいなかったので、ペトロは単独でも網を降ろすという決断をしたわけです。ではなぜ、ペトロは自分一人だけでもイエスの命令に従い、網を降ろそうと考えたのでしょうか。

良い結果が見込めそうだったから従ったのではありません。下手をすると、ペトロは大群衆の前で大恥をかくことになります。ベテラン漁師が、漁師の経験も無いイエスの命令に従って網を降ろしたのですから。仲間たちの信用を失う可能性だってありました。それでも、イエスの言葉を信じることができたのはなぜでしょうか。

ここからはわたしが考えたことですが、ペトロはイエスの目を見て決心したのではないかと思います。イエスが、もし確信のないまま漁を命じたのであれば、大自然の恐怖と日々戦いながら漁をしているペトロは見

破ったはずです。まったく曇りのない目で見つめられたペトロは、「この方はわたしに何かを体験させようとしている」と直感したのではないでしょうか。
聖書の世界に相手の目を見て判断するという習慣があるかどうかは分かりません。けれども、海の男たちは、荒れ狂う波の中でお互いに意思疎通を図るために、手で合図を送ったり、目で合図したりするのではないでしょうか。ペトロの長年の経験が、漁を命じたイエスの目に、偽りはないと判断したのだと思うのです。
結果はどうだったでしょうか。昨晩の不漁が嘘のような大漁でした。夢中になって、魚を引き上げたために、船は沈みそうになりました。ペトロは無数の魚を捕らえただけではなく、実はイエスによって捕らえられたのです。
これが、イエスのもくろみだったと言うべきでしょう。不思議な漁を経験させて、自分がイエスに捕らえられ、イエスが自分を生かしてくださる方だと信じた。この体験をペトロに積ませることが、この不思議な漁の目的だったのではないでしょうか。
イエスの言葉は実に印象的です。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」（5・10）イエスが言う「人間をとる」とは、単にペトロが漁師だから、漁師に理解できる言葉を選んだのではありません。「あなたがわたしに捕らえられ、わたしに生かされたように、あなたもだれかを捕らえ、わたしによってその人を生かす。そのための漁師になるのだ。」これがペトロに与えられた新しい使命だったのです。
シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様でした。彼らもイエスに捕らえられ、イエスが自分たちを生かしてくださる方だとはっきり理解したのです。「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」（5・11）舟を陸に引き上げたのですから、もはや彼らは一介の漁師ではなくなりました。捕らえられ、生かされる体験を多くの人に伝える新しい生き方に移し替えられたのです。
今週の漁師を弟子にする物語は、わたしたちの教会にも問いかけていると思います。イエスは人を捕らえ、捕らえた人を生まれ変わった人として生かしてくださる方ですが、わたしたちの中に、わたしたちの教会に、長崎教区に、信徒・修道者・司祭の中に、イエスに捕らえられ、イエスに変えられて生きている人がどれだけいるでしょうか。
集合の笛が鳴ったので集まりました。右向け右の合図があったので右を向きました。これでは、イエスに捕らえられた人とは言えないと思います。そして、イエスに捕らえられ、変えられたことを新しい人に伝えることもできないと思うのです。
「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」イエスの言葉は、わたしたちにも必要な言葉です。本来わたしたちは、イエスさまに捕らえられた者です。その姿をもう一度呼び覚まし、新たな福音宣教へと繋げていきましょう。わたしたちが伝える材料は、イエスに捕らえられ、今を生きているという体験です。

主日の福音 13/02/17(No.635)

四旬節第１主日(ルカ 4:1-13)

あなたの人生は神の霊と共にある

お休みをいただいて、多方面の人と会ってきました。今年の黙想会の指導司祭である福岡教区の神父さま、わたしが７年間記事を書いてきた子供向けのカトリックの冊子「こじか」の編集部の方、去年浜串のクリスマスミサに参加して下さったエッセイストの方、マリア文庫が長くお世話になっているカトリック点字図書館の館長、福見教会 100 周年でお世話になっている写真家の方、ほかにもあと２人面会しました。精力的に動いたおかげで、いろいろ話が進みました。

さて四旬節に入りました。灰の水曜日、頭に灰を受ける式の中で、「この灰は、わたしたちに使われるために燃やされて灰にされたものです。わたしたちが 枝として使っていなければ､灰にならずに済んだかも知れません。わたしたちのために、灰になる状態まで使われました。

これは、十字架の上でいのちをささげるイエスの姿に通じるのではないでしょうか。イエスは、わたしたちのためにご自分の命を使ってくださいまし た。身を粉にして、灰になるまでわたしたちのためにご自分を使ってくださったと言ってもよいでしょう。」と話しました。

灰の水曜日に話したとおり、すべてを使われるために差し出された灰をわたしたちは頭に受けました。それは、わたしたちがイエスの模範を受け入れるためです。わたしも、だれかのために使われて灰になる。だれかのために自分の身を粉にする。そうして、イエスの模範を受け入れ、キリスト信者として成長するのだと思います。「回心して福音を信じなさい。」この心がけで、四旬節を開始したのでした。

四旬節第１主日に選ばれた福音朗読は､イエスが荒れ野で 40 日間の試練を受けた場面です。40 という数字は旧約聖書を思い起こさせるための数字かも知れません。イスラエルの民は、砂漠で 40 年の間さまよい、試練を受けました。その間に、パンが無い、肉が食べたいと不平を言い、 モーセが山に登って十戒を授かっている間にもモーセを待ちきれずに金の子牛の像を造り、その偶像を拝み、いけにえを献げましたし、さらに約束の地に歩みを進める中で喉が渇いたと言って主を試したりしました。

今日の悪魔の誘惑の場面も、かつてのイスラエルの民の過ちを思い起こさせます。イエスは悪魔の誘惑に対して、申命記を引用して答えています。申命記はイスラエルの民が砂漠で飢えと渇きのために唯一の神を信じなくなった過ちを、これから入る約束の地では二度と繰り返してはいけないと諭す書物ですが、イエスもまたこれから入る宣教生活に同じ過ちを繰り返さないという決意の表れを示しているのです。

イエスは誘惑する悪魔に対して、ご自身の決意を表しているだけではありません。人間は洗礼によって神の子とされてからも、さまざまな誘惑に取り囲まれ、弱さのために過ちに陥ってしまいます。そんな時、神に信頼を置いて生きることをいつも忘れないように、どんな巧妙な罠、たとえそれが神の言葉を引用したものであっても、罠に陥らないように、

ご自分の模範を示してわたしたちにも注意を促しているのです。
具体的にお一人お一人の生活に置き換えてみましょう。まずイエスが 40 日間、悪魔から誘惑を受けられたことについてです。40 という数字は、長い期間を表す象徴的な数字です。人間にとっての長い期間とは何でしょうか。
わたしはこの期間を人生のことだと考えます。イエスが誘惑を受けた 40 日間は、人間の長い一生を象徴しているかも知れません。人間の長い一生は、悪魔から狙われていて、いつも誘惑にさらされています。ただ、イエスの 40 日間が聖霊に満ちて、「霊」によって引き回されていたように、誘惑にさらされている人間の一生も、一方で聖霊に満ちて、霊と共にある一生なのです。人間の一生は、パンだけで生きている一生ではありません。神の霊と共に生きているのですから、さまざまな誘惑の際にも、神が共にいることを思い出すことが大事です。
次に悪魔がイエスを高く引き上げて、自分を拝むように強要する場面があります。高く引き上げるとは、何かの幸運を得てとんとん拍子に出世の階段を上り詰めるとか、思いがけない形で資産を手にし、何不自由ない生活を手に入れるなどの姿を考えるとよいでしょう。
こんな時、つい人間は上り詰めた地位を過信し、または手に入れた財産を当てにしてしまします。そんな場面が一生涯のうちに一度は巡ってくるかも知れません。そんな時にイエスは「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と注意するのです。
どんなに高い地位に上り詰めても、どんな財産を手に入れても、人はすべてを自分で手にしたのではないのです。霊が共にいて実現した人生であることを忘れず、どんなに高い場所に連れて行かれても、神の前にへりくだることを忘れてはいけないということです。
最後に悪魔は、イエスをエルサレム神殿の屋根の端に立たせ、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。」と挑みます。人間の一生が、霊と共にあるのなら、その命を投げても神が守り抜いてくれるに違いない。これに対してイエスは、「あなたの神である主を試してはならない」と言われました。霊と共にある人間の一生において、神の霊が人間に試練を与える場合は人間を鍛え育てることにつながりますが、同じことを人間が試すなら、それは不信仰につながります。わたしたちと共にいてくださる神の霊は、必要なら試練を与えて人間を鍛え育てます。人間が自分の一生を危険にさらして鍛えるのではありません。
イエスは、ご自分の 40 日間にわたる悪魔の誘惑を通して、人間の一生に起こりうる誘惑との戦い方を身をもって示されました。悪魔はあらゆる方法で、人間の一生に誘惑を仕掛けてきます。それでもわたしたちは、自分の人生のすべてが霊と共にあるということに信頼を置いて生きていきましょう。
わたし一人で受ける悪魔の誘惑は耐えられない誘惑ですが、霊と共にあって受ける誘惑は人間を鍛え、育てます。わたしの一生が、霊に満たされ、霊と共にある一生であることを繰り返し思い出せるように、このミサの中で照らしを願いましょう。

四旬節第 2 主日(ルカ 9:28b-36)

四旬節第２主日(ルカ 9:28b-36)

迷いながらも、「選ばれた者」の声に聞く

今週の福音朗読の場面を、４つの部分に区切って考えてみたいと思います。１つめは三人の弟子だけを連れて山に登る部分です。山は神さまと出会う場所と考えられていました。
２つめは、イエスが祈っておられると顔の様子が変わり、服は真っ白に輝き、モーセとエリヤが現れてイエスと語り合う場面です。イエスの服が真っ白に輝くという様子は、この世の姿をはるかに超えた姿です。
またモーセとエリヤは旧約聖書の律法と預言書を象徴していると考えられますから、旧約聖書が引き合いに出されてイエスの最期が解き明かされているわけです。
３つめは、２つめの光景を受けての弟子たちの反応です。ペトロが代表して、「仮小屋を三つ建てましょう」と言いました。ところがペトロの提案には答えが返ってこなくて、雲の中から「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」（9・35）と言う声が聞こえたのでした。
４つめは、すべての出来事が終わったあとの様子です。「その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。」（9・36）出来事はその時だけで終わらず、十分理解はできなかったものの、ずっと心に納めてイエスのあとに従う生活が続くことになります。
４つの部分に分けて取り上げました。実は今週の福音朗読、わたしたちキリスト者の日常生活をうまく言い当てているのではないでしょうか。わたしたちもイエスに連れられて、ペトロ、ヨハネ、ヤコブと同じ体験をしているということです。
こういうことです。わたしたちは日常生活の中で何度となくイエスに連れられて山に登り、日常を超える体験をし、わたしたちなりに答えを申し上げ、その答えに返事はないけれども「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声がして、また日常生活に戻り、イエスの声に聞き従う生活を続けているのです。
さらに確信を持つことができるように４つに分けた部分それぞれに説明を加えましょう。まずわたしたちはイエスに連れられて山に登ります。12 人いるうちの数人がイエスに連れられていきました。これは次のような意味合いかもしれません。イエスに声をかけられ、イエスに喜んでついて行こうと思っている人だけが、呼びかけを理解できて山に登ることになるということです。
みんながみんな、呼びかけに気付くわけではないのです。呼びかけを面倒だと感じる人もいるし、呼びかけを適当に流してしまう人も出てきます。それぞれの能力に応じて、イエスは「一緒に山に登ろう」という声をかけるのですが、それぞれの能力に応じて答える人々が、次の段階に進みます。
２つめは、イエスがこの世を超越した姿に変わる場面です。そこで

は旧約聖書の代表者が現れ、イエスの最期について語り合っています。これは、わたしたちの生活のどの部分に当てはまるのでしょうか。わたしは、ミサの場面がもっともよく当てはまると思います。ミサの中では、旧約聖書が朗読され、イエスの最期も含めてイエスの生涯が語られます。パンとぶどう酒の形のもとにイエスが現存するという、この世を超越した出来事にも遭遇します。みことばの食卓とご聖体の食卓から成るミサが、日常を超える体験をする場所、イエスに連れられて登る山なのです。
もちろん、健康がすぐれず、ミサに来ることのできない人もいるでしょう。その人にもイエスは山に登ろうと呼びかけるのでしょうか。わたしはそうだと思います。病床にあって、また教会から遠い地域に住んで送り迎えを頼めない中で、イエスはその場ででもよいから、わたしと一緒に山に登ろうと呼びかけるのだと思います。
そして聖書を開き、その日の典礼の箇所を朗読するなら、日常を超えた時間を共にすることができるでしょう。ミサの聖書朗読で神が語り掛け、ご聖体が授けられることが日常を超えているように、ミサに来ることができなくても、自分のいる場所でみことばを響かせるなら、日常を超える体験が可能です。
３つめは、日常を超える体験に、わたしたちが言葉で答える場面です。わたしたちは、みことばの招きとご聖体の招きに、自分なりに答えようとします。間近にいた弟子たちさえ、正しく答えているかも分からず、「ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかった」とあります。
わたしたちが自分で作り出す答えは、ほとんどが見当外れかもしれません。けれどもわたしたちが日常を超える体験をしてそれに答え続けることは、呼びかけに何とか答えようとする大切な部分だと思います。幸いにペトロはとんちんかんなことを言っても叱られませんでした。
最後の４つめは、すべての出来事が終わったあと、「そこにはイエスだけがおられた」ということです。わたしたちの的外れの多い生活の中にあっても、唯一間違いのない生き方「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」この声に常に耳を傾けて生きていく。それが、わたしたちの日常生活のすべてではないでしょうか。
今週の福音朗読は、わたしたちに確実な信仰生活の歩き方を示しています。主任司祭、評議会、それぞれの部会、精一杯教会をもり立てようと努力していますが、なかなかめざましい成果には繋がりません。ピントがずれていることもしばしばです。
そんな中でも、どこかでイエスの声が響きます。その声を、耳を澄まして拾いながら、イエスが導く復活の栄光へとついて行きましょう。イエスの声に聞き従う人だけが、イエスの最期、イエスの栄光の姿を仰ぎ見ることができるのです。

主日の福音 13/03/03(No.637)

四旬節第３主日(ルカ 13:1-9)

まことの神は忍耐強く、いつくしみ深い

浜串教会のミニバレーをしている女性陣を引き連れて、伊王島の婦人会のみなさんと試合をして交流を深めてきました。馬込教会のチームは長崎南地区のミニバレー大会で優勝をしたと聞いていましたので、やや身構えて試合に臨んだのですが、結果は浜串チームの圧勝でした。
第１セットこそエンジンがかからずにひやりとした場面もありましたが、あとは地力の差が出る一方の試合でした。それでも最後の試合では馬込教会チームからは 84 歳の選手がサーブに出て、浜串チームが動揺したのか、その選手で３点取ったりして大いに盛り上がりました。
今回の訪問を快く受け入れてくださった馬込教会の岡神父さま始め、婦人会のみなさん、役員のみなさん、そして何よりも応援してくれた伊王島のみなさんに、心から感謝したいと思います。
では福音の学びに入りましょう。「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」（13・3,5）今週の朗読の前半部分で、2 度も繰り返されています。「似たような表現」というのではなく、「まったく同じ表現」なのですから、これは内容を強調していると考えるべきでしょう。
みなさんは、「悔い改めなければ滅びる」という呼びかけを使う人々と言ったらどんな人を思い浮かべるでしょうか。わたしは、世の終わりをことさら強調して信者を獲得しようとする新興宗教の人々を思い出します。ふだん平和に暮らしている人々の心を不安にさせ、自分たちを信じなさいと勧誘する人々です。この人たちはまことの神を知らないのに知っているかのような態度を取り、うっかり信じて来た人々を二度と正常な判断ができないようにしてしまいます。
しかし、イエスが「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と述べるのは、新興宗教の人々と同じように人々を不安にさせ、恐れで縛り付けるためでしょうか？決してそうではありません。イエスがこのように呼びかける目的はあくまで一つ、「悔い改めを促すため」です。たしかに悔い改めなければ滅びるでしょうが、神はどこまでも、人が悔い改めて立ち返ることを願っておられるのです。
イエスが「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と述べるのと、新興宗教の人々が述べるのとは、言葉は同じでもその意味はまったく違います。新興宗教の人々が滅びを強調するのに対し、イエスは悔い改めを強調します。新興宗教の人々が滅びを強調するのにはわけがあります。それは、自分たちの主張でだれかが悔い改めたとしても、その人々を本当の救いに導くことができないからです。
イエスが悔い改めを強調するのにも当然わけがあります。イエスは悔い改める人々を忍耐し、いつくしみで包み、迎えてくださるからです。イエスは人を本当に救うことができるので、恐れで人を縛ることはありません。

イエスの悔い改めへの招きに関して、わたしたちはすばらしい讃美歌を知っています。「主に立ち返れ、主に立ち返れ。主は恵みに満ち、あわれみ深い。主は忍耐強く、いつくしみに富んでおられる。主に立ち返れ、主に立ち返れ。主は恵みに満ち、あわれみ深い。あわれみ深い。」
今週の朗読の後半では、「実のならないいちじくの木」のたとえが語られています。朗読の前半で悔い改めを強調するイエスの思いはここでも受け継がれています。主人は、実がつくのを当然期待できる時期が来てからさらに三年待ち続けています。
ここには、神の忍耐が見えます。また農夫は、いちじくの木にいつくしみを示し、木の周りを掘って肥料をやってみますと答えます。まことの神は、滅びを強調せず、どこまでも人間の悔い改めを待っておられるのです。
大きな声では言えないのですが、伊王島での交流の翌朝、６時半からみんなで一緒にミサをすることになっていました。ところがわたしは久しぶりに伊王島の青年やお父さんたちとワイワイ騒いでお酒を飲み、そのあとひとりで信徒会館に寝たところ、ミサに寝坊してしまいました。
穴があったら入りたい気分でした。６時半に伊王島の議長さんが起こしに来てくれて、みなさんも忍耐して待ってくれました。わたしはあらゆる罰を受けてもしかたがない状態でしたが、ミサのために集まってくれた伊王島と浜串のみなさんを通して、滅びを強調せず、どこまでも人間の悔い改めを待ってくれる神さまの姿を見た思いです。
いちじくの木はわたしたちです。神はどんなに実のならない木であっても滅ぶことを望まず、忍耐しいつくしみを示すことで受け入れようと努力してくださいます。神の深い愛に、無条件に感謝しましょう。滅んでも仕方のない命さえも忍耐といつくしみで包んでくださる方に、この四旬節、何か１つでもお返しができるよう、目標を持ちましょう。

四旬節第４主日(ルカ 15:1-3,11-32)

主日の福音 13/03/10(No.638)

四旬節第４主日(ルカ 15:1-3,11-32)

唯一の選択肢が、神の国の祝宴を広げていく

これまで10日間、「ベネディクト16世」の名前を唱えないでミサをささげてきています。そう努めてきましたが、10日間のうち半分は、「ベネディクト16世」と唱えたあとに「しまった」と気づきました。
言い間違えたのは唱え直すことができますが、省くことになっているのを唱えてから、唱え直すというのも変な話です。ちなみに、「3月12日」から教皇選挙（コンクラーヴェ）が始まるそうです。時代にもっともふさわしい牧者が与えられるように、心を合わせて祈りましょう。
四旬節第４主日Ｃ年は、福音朗読に「放蕩息子のたとえ」が選ばれています。英語聖書の同じ朗読箇所の見出しは「見失った息子のたとえ」となっています。これは物語のとらえ方の違いと関係しています。
下の息子を中心に物語をとらえると、上の息子が見事に言い当てたように、「娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来た」（15・30）という物語なのですが、父親を中心に物語をとらえると、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」（15・24）息子の物語となります。父親を中心に物語をとらえてこそ、この物語に学ぶところがあるわけですから、「見失った息子のたとえ」としたほうが適切な気がします。
先週、伊王島の馬込教会を訪問して、土曜日の朝ミサにわたし一人が寝坊したという話しをしました。その土曜日の福音朗読は、何と第４主日と同じ「放蕩息子のたとえ」の箇所でした。まだ頭の中は眠った状態で絞り出した説教は、「司祭生活21年、たとえ話の中の下の息子の立場が、今日ほどよく分かった日はありません」というものでした。
わたしは寝坊したことでみんなを待たせ、主任司祭にも迷惑をかけたし、一緒に訪問していた浜串の婦人部のみなさんのメンツも丸つぶれになってしまいました。たとえ話の中で下の息子は放蕩の限りを尽くして完全に立場を失って帰って来ました。そのように、わたしも完全に立場を失って、皆さんの前に現れたわけです。
もうどんな裁きを受けてもしかたのない状態でした。通常の生活ではなかなかそのような場面は起こらないわけですが、けれども決して起こり得ない話でもないと思います。１年ほど前に、NHKが「はつ恋」というタイトルの８回連続のドラマを放送していまして、木村佳乃さん演じる主人公が家庭を崩壊させてしまうような過ちを犯し、それがどのようにしてゆるされて本来の家庭の姿に戻っていくかというテーマが取り上げられていました。最近はNHKでもこういうドラマを取り上げるんだなぁと思いましたが、主演の女優さんは見事にその役を演じきりました。
今のは１つの例ですが、家庭の中で、立場をなくしてしまうような過ちを犯したり、会社の中で立場を失うようなことをしでかしたりというようなことは、ないとは言い切れません。そんな時、どのようにその過ちを犯した人をゆるし、受け入れるか。どのようにして過ちから生じた深

い傷を修復し、立ち上がって新たな一歩を踏み出すか。そういう問題をまさに今週の福音朗読は考えさせてくれると思います。
そこで父親として登場している人物の姿を学ぶ必要があるわけです。父親は、放蕩の限りを尽くしてあわれな姿をさらしている下の息子を、遠くにいるうちから見つけ、走り寄って首を抱き、接吻したとあります。
ただここでも問題があります。わたしが父親だったらどうだろうか。同じように振る舞うだろうか。そう考えたとき、もしかしたらわたしが父親だったら、「本当はわたしはお前に期待していたのだ。その期待をこんな形で裏切ってくれるとは。お前の望み通り、雇い人と同じ生活をしなさい」と言うのではないだろうかと思ったのです。
しかし、イエスがわたしたちに求めているのは、物語に登場する父親の態度に見倣うこと、それだけが唯一の答えだと教えていると思います。もし父親の立場に立って、同じ態度を取れないとしたら、それは唯一の取るべき態度にたどり着いていないことになります。わたしたちが求められている態度はたった一つ、「死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」選択肢は他には与えられていないのです。
この、唯一の取るべき態度にたどり着くためには、何が必要なのでしょうか。おそらく、「死んでいた」「いなくなっていた」という姿から立ち帰ることがいかに大事であるかを心底理解することだと思います。人が、死んだような状態にあることがどんなにもったいないことで神が悲しみ、深い憐れみを感じる状態かということをよくよく理解しなければなりません。
立場を失うようなことがあっても、もう一度神に立ち帰るなら、その時から人は死んでいたのに生き返るわけです。その時、周りの人は原因となった過ちを強調するのではなく、神に立ち帰ろうと決めたこと、ここにこそ目を留める必要があるのです。この態度が、父である神に倣う唯一の取るべき態度だのだと思います。
もちろん、そう簡単ではないでしょう。先にちょっと触れた NHK のドラマでも、家庭に亀裂を生じさせた妻を受け入れるのに 6 年の歳月が必要でした。それでも、ただ一つの選択肢を選んだことで、家庭はもう一度あるべき姿に進むことができたのです。
イエスは、十字架の道をたどることで、唯一の取るべき態度を選ぼうとなさいます。人類が、死んでいたのに生き返るためには、神との和解からはるか遠くにいるうちからイエスが見つけ、走り寄って首を抱き、接吻する以外に方法はなかったのです。
イエスが歩まれた道が、ただ一つの道です。イエスが選んだ選択肢が、ただ一つの選択肢です。わたしたちも、立場を失った人が立ち帰ろうとするときにもう一度受け入れましょう。父なる神の態度を唯一の選択肢として神の民それぞれが選ぶとき、祝宴を開いて楽しみ喜ぶ神の国が広がっていくのだと思います。

四旬節第 5 主日（ヨハネ 8:1-11）

わたしたちが人に投げかけるものとは

すばらしい喜びの知らせです。アルゼンチン出身の枢機卿さまが新しい教皇「フランシスコ」として選ばれました。教皇選挙のジンクスとして、「候補者として話題に上った人は選ばれない」という言い伝えがあるそうですが、今回選ばれた教皇さまも、噂されていた人ではなく、まさに神さまがお選びになった人だったようです。
聖ペトロ大聖堂のバルコニーから広場に集まった人々にあいさつしたとき、ちょっとしたジョークで笑いを誘ったのが印象的でした。「ここにいる兄弟の枢機卿たちは、地の果てまで行って教皇を見つけてきたようです。」そこには、ご自身選ばれるとは思っていなかったという驚きが込められているのだと思います。
今年は、3 月 17 日がちょうど日曜日になりました。3 月 17 日は、わたしにとって叙階記念日です。1992 年（平成 4 年）3 月 17 日、亡くなった島本要大司教さまから司祭叙階の恵みを受けてまるまる 21 年、今日から 22 年目を歩き出すところです。
もう 1 つ、今年は 3 月 17 日が叙階式に選ばれました。最近は何月何日が叙階式と言えなくなってきたので、今年は 3 月 17 日だったと言っております。かつて里脇枢機卿さまが教区長だったときは、3 月 19 日聖ヨセフの祭日が叙階式の日と決まっていました。今はいろんな変遷があって、日曜日の午後 3 時から叙階式が行われています。日曜日の午後 3 時に叙階された神父さまと言えば、最近はみな当てはまるかもしれません。
今年の叙階式には、滑石教会の川端神学生が助祭に、本原教会の中野助祭が司祭に叙階されます。2 人とも、ちょっとした縁があります。2 人の叙階式のために、11 時鯛ノ浦発の船で長崎に渡り、浦上教会でその姿を見届けてきます。皆さんは、各自で受階者のためにお祈りください。
中野師については、こちら浜串とも縁がある方ですから、近いうちに浜串教会で初ミサがささげられるだろうと思います。本人と連絡を取って、日取りが決まり次第お知らせします。初ミサは、特別なお恵みをいただけるミサとされていますから、ぜひ参加されることをお勧めします。
さて、四旬節第 5 主日を迎えました。福音朗読にはイエスが「わたしもあなたを罪に定めない」と仰って、姦通の現場で捕らえられた女性をゆるす物語が選ばれています。先週の「放蕩息子のたとえ」と同じように、すっかり立場を失った人を、神が憐れみ深く接してくださるという、四旬節の大切な心構えを考えさせる箇所です。
律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女性を連れて来ました。宗教指導者たちは、彼女が犯した罪は死に値すると騒いでいます。当時は石投げの刑というのがあったようで、どうやらモーセの律法を盾に取れば、その罰を免れそうにありません。
しかしイエスは、事件がご自分を訴える口実に使われていることをすぐに見抜きました。イエスの返事次第では、イエスは窮地に立たされるわ

けです。イエスがこの女性に石殺しを命ずるなら、ユダヤ人から取り上げられている石殺しの権限を行使したかどでイエスをローマに訴えることができるし、もしこの女性を大目に見て釈放するなら、律法を無視する不届き者だと騒ぐでしょう。指導者たちの罠を打ち破る必要がありました。
イエスは「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」（8・7）と答えます。確かに、石投げの刑に値するのだろう。しかし、もし投げるのならあなたにその資格があるかと問われたのです。
人を罪に定めることができるのは、紙に書かれた律法でもなく、罪から逃れられない人間でもありません。罪とは無縁な神、また神の子イエス・キリストだけが人を罪に定めることができるのです。「石を投げなさい」というイエスの言葉に宗教指導者たちは我に返り、人を罪に定めることなどできないと気づき、一人また一人とその場を去って行きました。
「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」「主よ、だれも」「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」（8・10，11）
婦人とイエスとのやり取りに、イエスの憐れみ深い思いが溢れています。イエスだけは、彼女に石を投げることができたはずです。そのイエスさえも、彼女に投げかけたのは愛とゆるしだったのです。イエスが示した優しさは、そのままわたしたちに示されたお手本だと思います。わたしたちが人に投げかけることができるのは、人を傷つける石ではなく、人を守り、包む愛と、憐れみなのです。
イエスと婦人とのやり取りは、婦人の罪を見逃すという意味ではありません。「だれもあなたを罪に定めなかったのか」というイエスの問いは、罪があったことを見逃してはいません。彼女が「主よ、だれも」と答えることも、神の憐れみが注がれたことを思い出させています。
イエスと彼女とのやり取りは、どれ一つ取っても不必要なものは含まれていません。イエスが「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と送り出すことで、これからの人生で神の憐れみを受けた人として、神の憐れみを忘れない人として生まれ変わったのです。彼女もまた、「死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった」（ルカ 15・32）人物と言えるのではないでしょうか。
わたしたちが人に投げかけるものは何でしょうか。また投げかけることのできるものは何でしょうか。イエスがその答えを示してくださいました。わたしたちに投げかけることがゆるされているのは、愛といつくしみ、ゆるしです。
なぜなら、わたしたちもイエスと同じように、「死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった」その喜びのために召し出されているからです。今年もまた長崎教区に司祭が与えられますが、四旬節に示された神の愛をこの地上に行き渡らせる司祭となってくれるように、共に祈りたいと思います。

主の公現(マタイ 2:1-12)

受難の主日（ルカ 23:1-49）

わたしたちは園の中央にいのちの木をもっている

長い朗読でした。簡単な説教でこの受難の週を過ごす道案内としたいと思います。イエスは息を引き取る直前、犯罪人の一人に「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（23・43）と言われました。この点を取り上げたいと思います。
「楽園」は旧約聖書ではどのように描かれているでしょうか。２つのことが思い出されます。園の中央にはいのちの木があるということと、楽園は神によって守られている場所で、楽園を追われたアダムとエワは、神の保護を失ってしまったのでした。
すると、「楽園にいる」という約束は、十字架にはりつけにされているイエスにおいて、すでに実現しているのではないでしょうか。つまり回心した犯罪人がいるゴルゴタの丘の中央には、いのちをもたらしてくれた十字架の木が立てられています。イエスはその十字架にはりつけにされ、犯罪人にゆるしを与えて、神の見守りがそばを離れないことを約束してくださいました。
ここに、創世記がおぼろげに描いた楽園が実現しています。あとは、ゴルゴタの場面をわたしたちが「楽園」と理解できるかどうかです。これから一週間を、イエスが十字架上で成し遂げたわざが、わたしたちに必要な楽園なのだと理解するための歩みといたしましょう。
さて、楽園の中央にいのちの木があるのですから、イエスがはりつけにされた十字架はいのちの木であるはずです。では園の中央の木の実は何でしょうか。それはイエス・キリストです。創世記の物語では食べてはいけない、触れてもいけないとされていましたが、新しい楽園の中央にある木の実は、わたしたちの食べ物となってくださいました。何を食べさせてくださるのでしょうか。
２つ、示してみたいと思います。１つは、苦難をその身に背負う僕の姿です。イエスは、だれも背負うことのできない全人類の罪を背負い、その罪をゆるしてくださいました。
わたしたちはイエスに倣うことでイエスの模範を食べ物とすることができます。すなわち、毎日の苦難を精一杯受け止めることで、イエスを信じる者が放つ良い香りを、周りの人に示すのです。
イエスがくださるもう１つの実りは、復活の栄光です。この実りは、今はまだ味わうことができません。けれども、十字架を通らなければ、復活の実りはもたらされないのです。この一週間、イエスのそばを離れないでいるなら、イエスの復活によって、わたしたちは永遠のいのちをいただくのです。
イエスの２つの実りをいただくことで、神の子として良い香りを放ち、永遠のいのちの希望に喜び踊る者となれるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

イエスは裂いて与えるほどの愛を示された

選ばれた福音朗読は、「弟子の足を洗う」場面でした。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13・1）となっています。イエスの深い愛は、弟子の足を洗う場面と、このあとに続く最後の晩さんの場面を貫くテーマです。
弟子たちに注がれた「イエスの深い愛」を、何か違う言葉で言い表すとどうなるでしょうか。わたしは「御自分を裂いて与える愛」と表現したいと思います。
イエスは、「この世から父のもとへ移る御自分の時が来たこと」（13・1）を知った上で、弟子たちの足を洗っています。この世の別れを意識して取った一つひとつの行いは、本当は「胸を引き裂かれる思い」に基づいていたのではないでしょうか。
イエスはご自分の深い愛を、さまざまな形で伝えます。弟子たちの足を洗う行為も、このあとに続く最後の晩さんもそうです。マタイ福音書によれば、最後の晩さんで、「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた」（マタイ 26・26）とあります。
引き裂かれたパンは、いわばイエス御自身です。御自分の体を引き裂いて、弟子たちのいのちを養うと約束してくださったのです。愛情深い親が、子に対してどんな苦労も厭わないことをだれもが体験しています。自分を引き裂いて、子供に良いものを与える経験があれば、イエスが示そうとしておられる深い愛も、よくお分かりなのではないでしょうか。
「引き裂かれる思いの中で弟子の足を洗う」「パンを裂いて渡す」イエスには、御自分の姿を弟子たちに受け継いで欲しいという思いがあったことでしょう。これまで、イエスが群衆の求めに応じる場面は、しばしば困難を伴う場面でした。
解散する様子のない群衆に食べ物を与えたり、叫びながらついて来る女性の願いを叶えてあげたり、近くの町や村を残らず回った上に、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている群衆を見て、深く憐れまれたりといったことです。
もし決められた時間の中で活動しておられたら、「時間になったのでまた明日お世話します」という対応をしたかもしれません。イエスが語ったたとえ話の中にも、「もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません」と答えることもできるでしょう。
けれども、イエスはどんなときにも御自分を引き裂いてお与えになります。それは、とくに弟子たちに模範を示すためです。ゆだねられた羊を深く愛するとは、自分自身を引き裂いて与えることだ。そ

れが、弟子たちに託した遺言なのです。
もちろん、それが簡単なことだとは思っていません。わたし自身、仕事を中断したくないと感じているときに何かの用事に応対するのは辛いと感じることがあります。相手の立場に立ってあげられないことがあります。間違い電話が最近立て続けに掛かり、「大谷さんですか」という電話には、とうとう「ここは浜串教会だ」怒鳴ってしまいました。
そんな、欠点だらけのわたしたちに、イエスは御自分を引き裂いて与えるという模範を示してくださるのです。弟子たちの足を洗うとき、もはやこの世の別れだという引き裂かれるような思いがあり、最後の晩さんでパンとぶどう酒のもとに御自分をお与えになるときも、裂いて弟子たちに与えました。明日記念するイエスのご死去も、裂いて御自分を与えるその頂点だと思います。
裂いて与える姿は、弟子たちを極みまで愛するイエスによって示されました。イエスが、わたしたちの考え方や振る舞いの物差しです。わたしの物差しは、イエスが示す物差しと同じにできているだろうか。このミサの中で考えることにしましょう。
足を洗う式、「洗足式」がこの説教に続いて行われます。足を洗って奉仕する司祭も、洗っていただく信徒の皆さんも、イエスの深い愛、「裂いて与える愛」を学び合うことにしましょう。

聖金曜日(ヨハネ 12:1-19:42)

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

血と水が流れ、いのちを与えてくださった

聖木曜日に、イエスが弟子たちに示した愛を、「御自分を裂いて与える愛」と話しましたが、今十字架上でわたしたちのためにいのちをささげてくださったイエスこそ、「御自分を裂いて与える愛」そのものです。
十字架にはりつけにされたイエスは「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た」（19・34）とあるように、引き裂かれ、血と水とが流れ出て、全人類のために与えられたのです。
イエスは別のところでこう言っています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ 3・16）しかもその与えかたは、「御自分を裂いて与える」という痛みを伴うものでした。
人類を救うために、痛みを伴わないで御自分を与え、救いのわざを完成することは可能だったのでしょうか。わたしは、痛みを伴わない愛は考えられなかったのではないかと思います。
今日の福音朗読の中に、イエスを知らないと言うペトロが登場します。不正な裁判を起こした宗教指導者たちがいます。また兵士は平手でイエスを打ち、ピラトはイエスを死刑に引き渡す裁判に加担し、その上イエスを鞭で打たせました。槍で、イエスのわき腹を刺した兵士もいます。
この人々をゆるし、救いに導くためには、痛みを伴わない愛は考えられなかったはずです。イエスはこうして、どんな人をも救うには、御自分を引き裂いて与える愛、痛みを伴う愛が必要だったのです。
わたしたちは、イエスの愛によって救われました。御自分を裂いて与える愛によって、いのちが繋がりました。そうであるなら、わたしたちは「自分を裂いて与える愛」を学ぶ必要があると思います。痛みを伴う愛を避けては通れないと思います。
では実際の生活はどうでしょうか。痛みを伴うのはゴメンだ。自分を裂いて与えるのは勘弁して欲しい。わたしたちは自分を痛めてまでは、愛を分け合えない弱い存在ではないでしょうか。
わたしたちは、自分を裂いて与える愛にたどり着いていません。そうであるなら、せめて御自分を裂いて与えてくださったイエスに、心からの礼拝をささげましょう。ゴルゴタの中央にあるいのちの木から、イエスが御自分を裂いて与えてくださったので、わたしたちは罪がゆるされ、救われたのです。
このあと、十字架の礼拝をいたします。人間の罪をあがなうために、痛みを伴う愛をなかなか実行できないわたしたちの救いのために、イエスは十字架にはりつけにされました。心からの礼拝をささげて、イエスの前にへりくだりましょう。せめて、わたしたちの心を裂いて、イエスにすべてを委ねましょう。

主日の福音 13/03/30(No.643)

復活徹夜祭(ルカ 24:1-12)

復活したイエスに出会えるのは「捜す人」

主の復活、おめでとうございます。聖週間が始まる頃から、まったく声が出なくなり、復活徹夜祭の復活賛歌はどうなることかと思っていました（この原稿は 24 日に作成）。わたしの声も復活してハレルヤです。
さて今年の復活の喜びを、イエスを捜す人に光を当てて考えたいと思います。まず婦人たちが、週初めの日の明け方早く、墓に出かけました。けれど墓にはイエスの遺体が見あたらなかったとあります。彼女たちは復活したイエスに会いに行ったのではありませんが、イエスを捜しに行ったのはたしかです。
そこへ輝く衣を着た二人の人が現れ、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか」（24・5）と声をかけられました。イエスを捜しているのはよろしいが、生きておられる方を死者の中に捜してはいけないと言うのです。この場面も「イエスを捜す人」に大事な意味が込められていることを感じさせます。
婦人たちは墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせました。婦人たちの話を聞いた弟子たちは意見が分かれます。彼女たちの話をたわ言のように思った仲間と、ペトロのように婦人たちの話に動かされてイエスを捜しに行く人たちです。
わたしはこの「捜しに行く」という態度が、復活したイエスと出会うために大切なことだと考えます。与えられた朗読箇所の中では、婦人たちも、ペトロも、墓にイエスを捜しに行きましたが結局は見つけることができませんでした。
それでも、捜すことは大切なのだと思います。捜す人がいて、復活したイエスに出会うことができるからです。もしだれも捜さなかったら、つまり婦人たちも捜しに行かない、弟子たちもだれも捜しに行かなかったとしたら、イエスが復活したにもかかわらず、誰もイエスと出会わなかったかもしれません。
日本の教会はこの点で歴史の中で大きな体験をしました。250 年近く司祭がいない時代を信徒だけで信仰を守り抜き、プチジャン神父が大浦に派遣されたとき、イザベリナ杉本ゆりほか数名が、司祭を捜しに行ったのです。
捜しに行ったから、プチジャン神父と出会うことができました。捜しに行ったから、潜伏していたキリシタンは復活し、神の民の交わりを取り戻したのです。
一方で、司祭を捜しに行かなかった人々もいました。捜しに行かなかったのか、見つけることができなかったのかは分かりませんが、捜すことをやめたために、復活の喜びを味わうことなく、今もひそかな信仰を守り続けています。これは日本教会の歴史に刻まれた悲しい一頁です。
わたしたちの生活に踏み込んで考えてみましょう。わたしたちも、復活したイエスに出会うために、「捜す人」でなければなりません。生活と

信仰の結びつきを、自分に備わっている才能と信仰の証しとの接点を、教育や価値観と信者としての生き方を。こうした現実社会と信仰の接点で、イエスを捜し求める人でなければ、復活したイエスに出会うことはないのです。
今の生活があるのはだれのおかげだろうか。今の生活を、だれに一番感謝すべきだろうか。そういうときに、捜し求めていって復活したイエスのおかげだ、イエスにいちばん感謝すべきだとの答えにたどり着くでしょうか。
わたしの才能や特徴は、聖書の登場人物ではあの人に似ているかも知れない。聖書の中でその人はこんな働きをしたのだから、わたしも教会の中で同じようにイエスのお役に立てるのではないだろうか。才能や特徴からイエスを捜し求めることもできます。
日常生活のまっただ中で、わたしたちはイエスを捜し求める人になることができます。こうして、頭の中だけでなく、生活の中でイエスを捜し求めるなら、わたしたちは復活したイエスと出会うでしょう。復活したイエスと出会い、喜びに満たされる生活に入っていく。そのための恵みを、今日のミサの中で求めましょう。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

主日の福音 13/03/31(No.644)

復活の主日（日中）(ヨハネ 20:1-9)

イエスは必ず死者の中から復活する

あらためて、主のご復活おめでとうございます。このあいさつを、今年、上五島の 11 の小教区が、11 人の主任司祭によって交わされるのはおそらく無理だろうと思っておりました。いつかお話ししたと思いますが、１つの小教区の主任司祭は昨年夏脳出血に倒れ、リハビリ生活に入っていたからです。

ところが、この後輩司祭は、該当する小教区信徒の報告によると、聖火曜日に小教区に戻り、何と聖木曜日からの聖なる三日間の典礼をこなし、小教区復帰を果たしていると言うのです。三日間の典礼をどのように執り行ったかまでは聞いておりませんが、驚異的な意志の強さだと思いました。

聖火曜日は、長崎の浦上教会で聖香油ミサが執り行われ、今わたしが話している後輩司祭もミサに参列していました。実はそれより前の３月 17 日の叙階式にも彼は参加していたのですが、正面玄関からの入堂には加わらず、前もって自分で決めた席で司祭団の入堂を待って、一緒にミサをささげたのです。

以前にも話したと思いますが、右半身はいまだに機能が回復していません。右手はぶらりと下がったまま、右足も引きずってようやく歩いているといった状態でした。しかもどこで転んだのか、右目を覆うように握りこぶし大のあざができていました。およそ 10 日後の聖火曜日でも、状態はほとんど変わりませんでした。

つい最近まで大相撲春場所が行われていました。力士は場所中に怪我をした場合、怪我を押して土俵に立つことも、大事を取って休場することも選べると思います。わたしが若手司祭と同じ立場だったら、おそらく休場を選択することでしょう。しかしこの司祭は、あくまで土俵に立つことを――司祭ですから土俵ではなくて祭壇ですが――に立つことを、選んだのです。

わたしはこの後輩司祭を褒めるつもりもけなすつもりも、どちらの意図もありません。ただ言いたいことは、祭壇に立つのでしたら痛いのなんのと言って欲しくないと思っています。休む権利も持っていて、いろいろ言われることを承知の上で祭壇に上がってきたのですから、一人でこなすべき部分は一人でこなし、だれからも何も言われなくても当たり前だと思って欲しいのです。

「わたしは病人なんだから、周りが手助けしてくれるのが当然だ」とか、そういうことをもしどこかで漏らすのでしたら、はっきりお休みをいただいて、もっとリハビリを続けてから復帰して欲しいと思っています。もちろん、足を引きずってでも祭壇に上がってきたその気持ちは、認めたいと思います。

今回わたしは「復活の主日・日中のミサ」に選ばれたヨハネ福音書第 20 章の９節、「イエスは必ず死者の中から復活されることになってい

るという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」（20・9）という箇所を、小教区に復帰した司祭のことを思い浮かべながら考えてみました。
同じ地区で働く他の司祭たちは、本人のことを心配してあえて厳しい言葉を掛けています。わたしたちはわたしたちの立場で話しかけているわけですが、彼自身は、わたしたちには分からないような死者の国までいったん行ったのかもしれません。そして、イエスが必ず死者の中から復活されることになっているのであれば、いくらかでも「死」の体験をした彼は、今回イエスの復活の何かの部分に触れたのではないでしょうか。すると、小教区に復帰してきた同僚司祭は、自分の体験で「死者の中からの復活」を教えてくれているのかもしれないと思いました。評価はさまざまあると思いますが、自由にならない体を引きずって、ほかの司祭の何倍も時間を使って、何かをしようとしています。
そこまでの死ぬ思いをしたことのないわたしにとっては、思い通りにならない手足を引きずって、脂汗をかいて一つひとつの所作をこなすその気持ちを十分には理解できません。しかし考えてみれば、イエスが真っ先に「死」というこれ以上ない不自由な状態から復活したのです。
イエスはまったく自由のない状態にいったん置かれて、それから栄光の姿をまとったのです。この驚くべき出来事が「死者の中からの復活」のはずです。今回復帰した司祭は、ほかのどの司祭よりも不自由を味わったのですから、ある意味上五島地区でいちばん、イエスの復活について学びを得たのかもしれません。
弟子たちが空の墓を見ても驚くばかりで聖書の言葉を十分理解できなかったように、わたしたち司祭もしばしば頭でっかちで、言葉を連ねる割には真実が見えていないのかもしれません。長く十字架にはりつけにされ、今も自由を奪われたまま、その体を引きずって祭壇に這い上がってきたこの後輩司祭の体験談に、耳を傾けてもよいのかなと思いました。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)

主日の福音 13/04/07(No.645)

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)

イエスが真ん中におられることを忘れない

神のいつくしみの主日を迎えました。神がわたしたちに示してくださるいつくしみを、選ばれた朗読福音を通して学ぶことにいたしましょう。
復活したイエスが、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけている弟子たちに現れます。しかも、その現れ方を「そこへ、イエスが来て真ん中にたった」と書き残しています。
「イエスが弟子たちの真ん中にお立ちになる」この様子は、２度繰り返されています。最初は、トマスがいない場面です。２度目は、トマスもその場にいる場面です。２度とも、同じような現れ方をしたことに、わたしは何かのお考えがあるように思います。
こんなことを考えました。復活したイエスは、信じる人々の真ん中に立つようにして現れてくださるということです。恐れを抱き、人々から身を隠しているときにも、さらにその上に、最初の出現に立ち会えず、深く気落ちしているときにも、復活したイエスは人々の真ん中に、平和をもたらすためにおいでくださるということです。
この出来事は、わたしたちの信仰生活にもつながっています。わたしたちも、イエス・キリストを信じてその信仰を土台にして歩んでいる者です。けれども、実際の教会生活は、理想ばかりの生活ではありません。弱さを持った人間が、信仰生活をしているわけです。
教会のためにだれでも協力してくれてよさそうなものだけれども、わたしを当てにしないでくださいとあからさまに主張する人もいます。自分たちに有利になるように流れを誘導して、決して自分ばかり負担が増えないように動き回る人もいます。そんな嫌気のするような面を見て、何が信仰だ、何がカトリックだとガッカリする人もいるでしょう。
けれども、そんな嫌な思いをしている人の中にも、イエスは人々の真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」と声をかけてくださるのです。もしそこに、深く傷ついている人がいたとしても、イエスは何度でも現れて、「あなたがたに平和があるように」と呼びかけてくださいます。
もしわたしたちが、イエスはたしかに復活されたと信じ、希望しているなら、復活したイエスはわたしたち信じる人々の真ん中に立ってくださいます。イエスは初めから、常にそのようなお方だからです。真ん中に立ち、恐れを取り除き、平和をもたらしてくださるお方です。
もともと、なぜ弟子たちはユダヤ人を恐れていたのでしょうか。自分たちも捕まってはりつけにされるから、恐れていたのでしょうか。わたしは、それだけではないと思っています。少なくともペトロは、同じヨハネ福音書によると「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます」（13・37）とさえ言った人物です。ペトロの言葉が口から出任せであったとは思えません。
もしかしたら、自分たちでは気づかない何かがあったかも知れません。

弟子たちは心の支えを失っていました。心の支えがあるうちは、命を捨てる覚悟だったでしょうが、その支えがなくなって、恐くなったのかもしれません。
今は、復活したイエスが自分たちの真ん中に立っておられるのですから、恐れる必要が無くなりました。イエスの出現を目の当たりにし、恐れを取り除いていただき、平和を取り戻した弟子たちは、後に復活の証人となっていきます。
さて、今日わたしたちの教会は、幼子の洗礼式を行うこととなりました。今ご夫婦にとって、お兄ちゃんお姉ちゃんにとって、新しく迎えた幼子は家族の中心にいることでしょう。どうぞ、幼子の洗礼を通して、イエスが真ん中に立っているとき、家庭に平和が訪れることを学んで欲しいと思います。
そして、新しいお子さんを含め、家族が外に向かっていくとき、活動の源・土台になるのは真ん中におられる復活したイエスであることを忘れないでほしいと思います。わたしたち教会家族も、幼子の洗礼を通して、神の恵みが生活の真ん中にいつもあるなら、教会家族に平和が訪れることを学ぶひと時にしたいと思います。
それでは、引き続き洗礼式に移りましょう。

復活節第 3 主日(ヨハネ 12:1-19)

主日の福音 13/04/14(No.646)

復活節第 3 主日（ヨハネ 21:1-14）

イエスはみことばで食べ物を与える

今週の福音朗読は、イエスが死者の中から復活した後、三度目になるご出現の様子が描かれています。選ばれた朗読で、20 年も 30 年もこの朗読箇所を耳にしていて、まったく気付いてなかったなぁという点がいくつかありました。皆さんにとっても、新しい気づきかも知れませんので、そこから入りたいと思います。

まず、今回の三度目のご出現は、「シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた」（21・2）という設定になっています。数えると 7 人です。弟子たちは少なくとも 11 人いたはずですから、この人数は 7 という数字に意味をもたせているのでしょう。7 は教会の 7 つの秘跡を思い出させますから、後の教会のことを暗示していると思われます。

次に、イエスが「子たちよ、何か食べるものがあるか」（21・5）と弟子たちに尋ねます。わたしはこの問いかけは、てっきり「魚は捕れたか」という意味なのだと思っていました。「魚は捕れたか」という解釈もあるようですが、厳密には漁があったかどうかを聞いているのではないようです。実際は、漁のあるなしにかかわらず、「食べ物をもっていないようだね」と尋ねていて、「わたしが食べるものを用意してあげよう」という思いがあるのです。

そして、わたしが見落としていた点でもっとも驚いたのは、次の箇所です。「さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」（21・9）弟子たちは食べ物がなくて、漁に行ったはずです。この陸にあったパンと魚はだれの食べ物なのでしょうか。復活したイエスの食べ物だったのでしょうか。

さて、わたしにとってほとんど見えていなかったこれらの部分をつなぎ合わせると、次のように言えると思います。復活したイエスの三度目となる今回の出現は、最初から食べ物を与えるためのものであった、ということです。すでに炭火がおこしてあり、魚もパンも用意してあったというのも、弟子たちに食べさせるためにイエスが先に用意していたのかも知れません。

もう少し話を進めましょう。最初から、イエスが弟子たちに食べ物を与えるために出現されたというのは分かりました。では今週の朗読箇所ヨハネ 21 章は、ただそのことを書き記すための物語なのでしょうか。もっと、広がりのある物語だと思います。

7 人のグループにイエスは食べ物を与えてくださいました。これは、後の教会を表していますから、復活したイエスは、今を生きる教会共同体にも、食べ物を与えてくださることも含まれています。

この 7 人の弟子のグループは、漁に行くことで食べ物を手に入れようとしました。「漁に行く」ことはすなわち「外に出て行く」ことです。社

会に出て、生活の糧を得ようとするのは、現代のわたしたちも同じです。すると、復活したイエスは社会に出て行くわたしたちにも、食べ物を与えてくれると教えておられるのです。
興味深いのは、復活したイエスの、食べ物の与えかたです。かつてイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、感謝の祈りを唱え、裂いてそれを弟子たちに与えてくださいました。今日イエスは、違う形で食べ物を与えてくださいます。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」（21・6）「さあ、来て、朝の食事をしなさい」（21・12）と言葉を掛けて食べ物を与えてくださいました。つまり復活したイエスは、みことばで、弟子たちに食べ物を与えてくださったのです。
同じことは、わたしたちにも当てはまるでしょう。復活したイエスは、今わたしたちの前に現れて、みことばで食べ物を与えようとしておられます。キリスト者であるわたしたちが、社会に出て生活の糧を得ようとするとき、みことばを通してわたしたちに食べ物を与えてくださいます。陸に上がってみると、すでに必要なみことばが用意され、食事ができるように整えられています。イエスはいつも、先回りをして、みことばで食べ物を与えてくださるのです。
福見教会・高井旅教会は 4 月 29 日に記念の日を迎えます。福見教会献堂 100 周年、高井旅教会（正確には 52 年目ですが）献堂 50 周年です。ここまでの歩みも立派なものでしたが、これからの歩みは違った意味で困難な道、険しい道を歩むことになるかも知れません。
信徒の高齢化、過疎化、また生活から信仰が薄れてきている危険もあります。そんな中で、これから生活の糧をどこに求めるかと考えたとき、教会に自分たちの食べ物があるだろうかと疑いをもつ人も出てくるかも知れません。
イエスはそんなわたしたちに、今も声を掛けてくださいます。わたしは、みことばであなたたち教会家族に食べ物を与える。教会の外に食べ物を求めに行っているその場所で、みことばを与え、網が破れそうなほどの食べ物を与える。教会に戻って集まっているその場所で、先回りしてみことばによって食べ物を与える。イエスは今も、わたしたちを奮い立たせようとしておられるのです。
4 月 29 日の式典で、福見教会・高井旅教会ともに祭壇を新調します。祭壇は、イエスの食卓のしるしです。祭壇を新しくすることで、新たな心で、イエスのみことばと御聖体から食べ物をいただき、100 周年 50 周年のその先へと歩みを続ける力をいただけるでしょう。
イエスは今も、みことばによってわたしたちに食べ物を用意してくださいます。外に食べ物を探しに行ったときも、祭壇を囲んでいるときも、復活したイエスのみことばがわたしたちを生き生きとさせ、主を思い出すことができますように、このミサの中で恵みを願いましょう。

復活節第 4 主日(ヨハネ 10:27-30)

主日の福音 13/04/21(No.647)

復活節第４主日（ヨハネ 10:27-30）

わたしの羊はわたしの声を聞き分ける

つい最近国民栄誉賞を受賞することになった長嶋茂雄氏、注目されているからでしょうか、よく特集番組が組まれています。何本か特番を見た中で、現在も懸命にリハビリを続けている様子を特集している番組に心惹かれました。
わたしはリハビリをさせられる経験はありませんが、番組の中での長嶋茂雄終身名誉監督のリハビリの様子を見ていると、相当苦しいものなのではないか、そう感じました。かつて立教大学時代、入学した同期には甲子園で活躍した錚々たるメンバーが集っていて、高校時代ほぼ無名だった長嶋は、だれよりも努力してスターの座を掴んだと言われています。しかし、その苦しい思いと比べても、脳梗塞に倒れてから失った機能を回復させようとする努力は、比べものにならないほど辛く苦しい訓練ではないか。そう感じました。汗びっしょりになって全身を曲げたり伸ばしたり、マシンを押したり引いたり、文句一つ言わず、トレーナーさんの指示を守って全力で取り組んでいました。
どうしてそこまでできるのだろうか。ちょっと言えばもう後期高齢者のおじいちゃんなのですから、リハビリで苦しむ様子は可哀想でもあります。もう無理しないでいいよと言いたいくらいですが、本人は今も前を向いて、胸を張って長嶋茂雄を生きているのだと思いました。
彼がリハビリを決していやがらない理由を、番組はこう説明していました。大学時代に、だれにも負けないくらい練習して、監督からもしごかれて、「練習は嘘をつかない」ということを体で覚えたのだそうです。そして今は同じように、「リハビリは嘘をつかない」と信じて、見ている方が目を背けたくなるような辛いリハビリを自ら引き受けている。番組はそのように紹介していました。
聞く所では、長嶋さんの奥さんはカトリック信者だそうです。息子の長嶋一茂さんもカトリックの洗礼を受けています。そうすると、どこかで、長嶋茂雄氏もカトリックの教えに結びつくものを見たり聞いたり、また自ら学んだりしているかもしれません。
今週の福音朗読、羊飼いであるイエスと、羊であるイエスに耳を傾ける人々との固い絆、深い信頼関係が描かれているのですが、このたとえ話の羊の姿、わたしは長嶋茂雄氏がだれにも言わずに、自分に今必要な姿として、受け入れているのではないかなぁと思ったのです。
羊は、常に羊飼いによって守られ、導かれなければ生きていくことのできない動物です。実際、方向感覚が弱くて、放っておくとすぐに迷子になって、獣の餌食になる弱い生き物です。そんな羊ですから、羊飼いに従うことは生きる上でとても大切なことなのでしょう。
羊飼いも、羊のことをよく知っています。それぞれの特徴や、弱さまで知っていて、どのように導けば良いのかをわきまえています。だから、羊は自分を任せることができるのです。今日の朗読よりも少し前の箇所

では、「ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」（10・5）とあり、やみくもに従っているのではなく、羊は羊飼いを信頼して、自分を委ねているわけです。
放っておけば固くなって動かなくなる体を、トレーナーの人が動かし、トレーナーを信頼して、汗だくになってこんな動きもあるのだよと体に思い出させる。トレーナーを家族のように信頼して、自分の体を委ねてリハビリを続けている。そんな長嶋さんの姿は、やはり今でも背番号にふさわしい毎日を生きているのではないか。そう思いました。
わたしたちはどうでしょうか。イエスを羊飼いとして、全面的に信頼して、一日を始めているでしょうか。全面的に信頼するとは、自分の予想に反する状況の中でも、信じ続けるということです。
努力を続けているのに、思っている結果に結びつかない。こうであってほしいと思う生活ではなく、望んでいないこと、避けて通りたいことが起こる。こんな中でも自分たちを導いてくれる羊飼いイエスを信じ続けることが、今日求められていると思います。
「わたしは彼らに永遠の命を与える。」（10・28）信じる道のりは、易しいことの連続とはいかないでしょう。けれども、導いてくださるイエスは、永遠の命を与えると保証しておられます。わたしたちが、イエスの声を聞き分ける羊と言えるただ一つの状態は、どんな場面でも羊飼いを信頼するという生き方です。わたしたちが羊飼いイエスの羊であるためには、信じ続けることが必要です。
脳梗塞に倒れ、一時は輝かしい場面から消えた偉大な野球選手が、トレーナーを全面的に信頼し、汗まみれになってリハビリを続けています。そうやって、今の生活の中でわたしたちに勇気と感動を与え続けています。
わたしたちが、社会に対して証しするためにも、イエスを信頼し続けることが必要です。わたしたちはだれであっても、どんな場面でもイエスを信頼して生きるなら、イエスを知らない人々に大きな影響を与えることができるのです。「わたしは、イエスの声を聞き分けることができます」と人々に証明する暮らしを続けていけるように、このミサの中で恵みを願いましょう。

4月29日（月）、高井旅教会での司教様の祭壇祝別式は10時過ぎからの開始となります。そのため、高井旅の信徒の皆さんは、9時40分に高井旅教会で司教様を待つようにしてください。

復活節第5主日
(ヨハネ 13:31-33a,34-35)

主日の福音 13/04/28(No.648)

復活節第 5 主日（ヨハネ 13:31-33a,34-35）

神の民がイエスに倣い愛し合う

金曜日に、青方のゆうちょ銀行で ATM を操作したのですが、すぐ脇の丸テーブルに、財布の入った手提げを置いたまま帰ってしまいました。郷の首のガソリンスタンドで「レギュラー、満タン。洗車もお願いね」と言って車を降りようとしたら、助手席に手提げがありません。
シートの下に落ちたのかなと思ったりしましたが、見当たりません。その瞬間、「あーこれは、どこかで忘れてきたんだな」と気づき、血の気が引きました。青方でどこを回ったか考えてみました。まず親和銀行に行って、新札を引き出しましたので、親和銀行に電話をしました。行員さんは、「手提げ類はないみたいですねー」という返事でした。
ガッカリしましたが、ならばゆうちょ銀行だと問い合わせると、「ありますよ。中身を答えてみてください。」と聞かれたので、「ねずみ色の手提げの中に、財布が入っていると思います。財布には、ナカダコウジという名前の免許証があります。」すると応対してくれた人が「はい、確かにあります。お預かりしておきます。」と返事をくださいました。
給油と洗車をしてくれたスタッフの方に事情を言って青方に引き返し、財布を取り戻して来ました。献堂百周年・献堂五十周年記念行事を目の前にしたこの忙しいときに、何をぼおっとしているのだろうか。どれだけ神さまも試練をくださるのだろうか。そんなことを思いました。
今になって考えると、よくまあ財布も持って行かれずに残っていたものだなぁと思います。カード類は役に立たないかもしれませんが、現金もそこそこ入っていましたし、一緒に入れていた免許証の住所を調べれば、わたしからもっとお金を要求することもできたかもしれません。だれもいたずらせず、小一時間そこに置いたままになっていたのですから、上五島の人たちは優しい人たちだなぁと感謝しました。
だれも気にしてなかったのかもしれませんが、もしかしたら、忘れ物をした人をかわいそうに思ったのかもしれません。「忘れた人は困っているだろうなぁ。そおっとしておけば、思い出して取りに来るかもしれない。」それは、ある意味、今週の福音でイエスが弟子たちに与えた掟、「互いに愛し合いなさい」という掟の実践なのだと思います。
さてイエスは、「あなたがたに新しい掟を与える。」（13・34）と切り出しました。この場面は、ユダがイエスを離れていって、夜の暗闇に消えて行ってからの話です。「はっきり言っておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」（13・21）この言葉がきっかけとなって、イエスのもとに留まる人と、イエスを見捨ててしまう人とが明らかになる場面です。留まる決意をした弟子たちに、「新しい掟を与える」と仰ったのです。
けれども、「互いに愛し合いなさい」という掟そのものは、そんなに目新しさはありません。「兄弟姉妹互いに仲良くしなさい」そうした言葉は、だれでも交わす言葉ではないでしょうか。この掟の新しさはどこに

あるのでしょうか。
イエスの掟の新しさは、そのあとに続く「わたしがあなたがたを愛したように」ということばにあります。イエスは、留まる決意を示した弟子たちに、自分がこれまでどんなに深く弟子たちを愛してくださったか、身をもって示されました。多くの奇跡を行い、最後の晩さんの席では、弟子たちの足を洗ってくださいました。
そして今日の場面では、ユダが離れてしまい、裏切る者によってご自分が十字架にはりつけにされ、栄光を現すことが確実となりました。十字架上で人類のためにいのちを与えるほど、イエスは弟子たちに代表されるすべての人間を愛してくださったのです。
ですから、イエスの掟の新しさは、「お互い、できる範囲で愛し合いなさい」というものではないということです。自分を投げ出して、相手を愛する。イエスが示した新しさです。ですから、互いに愛し合うとは、「互いに相手のために自分を投げ出す」その覚悟が必要なのです。
幸い、福見教会は献堂百周年、高井旅教会は献堂五十周年、浜串教会も4年もすれば今の聖堂は50年になります。それぞれが、この聖堂に集い、声を合わせて祈り、声を一つに歌っていますが、互いに愛し合いなさいとのイエスの言葉に生きているでしょうか。
「人は人、自分は自分だから。」そんな雰囲気が、社会を飲み込んでいます。協力はするけれども、自分が損をするのは嫌だ。それがごく当たり前と思われています。その中で、新しい関わりかた、新しい隣人愛を示し、生きるようにイエスは求めているのです。
わたしたちの聖堂は、五十年・百年と年月を積み重ねる所まで来ました。この日までに、きっとだれかが、自分を投げ出してでも、この聖堂を愛し、守ってくれたことでしょう。懐を痛めずに、そこそこ協力しましょう。そんな関わりかたでは、この聖堂は今日を迎えることはできなかったでしょう。
さらに、あと五十年この聖堂を維持するためには、わたしたちの中から、自分を投げ出してでもこの建物を愛し、守ってくれる人たちが続いてくれないと、維持することは難しいと思うのです。そうして大切に守られてきた聖堂に集っているのですから、今がもっとも「互いに愛し合いなさい」というイエスの掟を学ぶにふさわしい時間だと思います。
全能の神と、兄弟の皆さんに告白し、ゆるしを願いました。ともに主の祈りを唱えます。平和のあいさつを交わします。同じご聖体から、皆が養われます。このミサの中で、自分をすっかり差し出して相手を愛する生き方を学びましょう。その生き方が社会の多くの人にも理解されるように心を配りましょう。
大きな喜びの日を前に、わたしたち小教区の神の民は、またとない学びの機会をいただいているのだと思います。

主日の福音 13/05/05(No.649)

復活節第６主日(ヨハネ 14:23-29)

聖霊が教え、思い起こさせる

無事に百周年・五十周年の記念式典を終えてホッとしています。支えてくださった皆さんに、心から感謝申し上げます。５月３日（金）、教区の評議会総会がカトリックセンターで開かれたのですが、大司教さまがわたしを見つけて声を掛けてくださいました。心優しいなぁと感激しました。
今週は３つの朗読を眺めて感じたことを分かち合います。３つの朗読から、「聖霊の働き」に目を留めました。第一朗読、使徒たちがエルサレムで会議を開き、信者の生活に本当に必要なものは何かを協議して、大原則を決めました。その際、次のように前置きしてから話し始めています。「聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。」これは、聖霊に祈り求め、聖霊による照らしを受けた結果、導き出した結論が正しいと判断したことを伺わせます。
第二朗読、迫害の最中にあるヨハネが「霊」に満たされて、聖なる都エルサレムが神のもとを離れて、天から下って来るのを見ます。迫害を乗り越えるために「霊」が迫害にある教会を力づけてくださることを経験しました。
福音朗読では、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（14・26）まさしく、聖霊が与えられたときに、すべてのことを教えてもらえるとイエスは約束してくださいます。
３つの朗読を通して、聖霊の助けが、どれほど大切であるかを教えてくれています。そこで、わたしたちにも聖霊の助け、導き、照らしがどのように注がれているのかを考えてみることにしましょう。
まず、弟子たちとイエスとの関わりから入っていきましょう。弟子たちは３年にわたってイエスと寝食を共にしましたが、十字架の場面ではイエスを捨てて逃げ出してしまいます。弟子たちには、イエスとの関わりが十分に理解できていなかったのです。
けれども聖霊は、イエスを捨てて逃げ出した弟子たちに、彼らにとってイエスとの関わりがどれほど大切かを理解させてくれました。ヨハネ福音書は、西暦 90 年頃に書かれたとされますから、この場面でイエスが「聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」と言っているのは、振り返って、ああそうだったなぁと納得して書いているわけです。
聖霊は弟子たちにとって、イエスとの関わりがどれだけ大切であるかを教えるだけではありません。わたしたちイエスを信じるすべての弟子にとって、イエスとの関わりがどれだけ大切であるかを聖霊は教えてくれます。そこで、わたしたちにとっての聖霊の働きを考えてみましょう。
考えるにあたって、今年の一つの目の付け所を紹介したいと思います。今年は偶然にも、５月５日「こどもの日」が日曜日に当たりました。わたし

は常々、「こどもの日」とは、「こどものためにいちばんよいことをしてあげる日」と考えています。神から与えられたこの子に、何をしてあげることがいちばんよいことになるでしょうか。わたしは、イエスの近くにわが子を置いてあげることだと思います。
もしかしたら、今日はさまざまな行事でミサに参加できていないかもしれません。ミサに参加させることは、こどもをイエスの近くに置くために最も優れた方法ですが、それが叶わなくても、イエスの近くにこどもを置く方法は他にもあると思います。
親の責任で、こどもをイエスの近くに置く。こどもはまだその意味と価値を十分に理解できませんから、こどもの日にイエスの近くに導こうとする親の気持ちを理解してくれないかもしれません。しかし考えてみてください。イエスは、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」と言われたのです。今は分からなくても、聖霊が、理解させてくださいます。
わたしたちは、イエスの側にいることが生活の基礎であるべきです。そのことを、ミサに来ることで、家庭で祈ることで、聖母月のロザリオで、学ぶことができます。もちろん、学べばそのまま分かるというものでもありません。そのために、聖霊がわたしたちに、イエスとの関わりの大切さを理解させてくれるのです。
こどもたちにもぜひ、イエスと繋がっていることの大切さを、まず体に覚えさせてください。体験によって知ったことを、聖霊はあとになって、ことごとく理解させてくださいます。聖霊の働きがあることをわたしたちが信じること。それが、次の世代にイエスの教えを受け継がせる鍵なのだと思います。

主の昇天(ルカ 24:46-53)

主日の福音 13/05/12(No.650)

主の昇天（ルカ 24:46-53）

橋渡しであり、別れではない

金曜日に、久しぶりに伊王島時代の賄いさんが五島に遊びに来てくれて、いろいろ伊王島のことやら、こちらで行われた高井旅五十周年、福見百周年を終えた教会の案内をしたりしまして、賑わいました。伊王島時代によく賄いさんをからかっては面白がっていましたが（中略）。
金曜日だったので夜には「ミニバレーの様子も見にいらっしゃい」と誘いましたら、点数の掲示板のところに座って観ていたのが、いつの間にか試合の解説みたいにしゃべるしゃべる、わたしがミスをしたとき「へたくそ」とまで言われました。相変わらず面白い人でした。
懐かしい伊王島も、対岸の香焼と橋が架かってからすっかり様子が変わったらしく、昔のようなのんびりした島ではなくなっているようです。
橋が架かる経験は、過去に西海市大島町の太田尾教会で経験しました。それまで大司教館に出かけたり佐世保に出たりしたときなど、航送船と言って、車を積む船で対岸の西彼町から戻っていました。
それが、大島大橋が架かってからは、のんびりした島に大量に本土の人と車が入ってきて、雰囲気が変わったのを覚えています。便利ではありましたが、島の静けさや子どもたちの純粋さを守ってあげるためには、橋が架かる前のままがよかったかもしれないなぁと当時思いました。
もちろん、橋が架かるということは大きな恩恵を受ける出来事です。対岸の人々といつでも、どこででも会うことができます。対岸でしか受けられない恩恵を、橋を通して受けることができるようになります。橋が架かっていなければ、どんなに目の前に見えている対岸の人とも、交流はできないわけです。
さて、今日は主の昇天を祝っています。わたしは、主の昇天を黙想するのに、この「橋を架ける」「橋渡しをする」という捉え方が、非常に役に立つのではないかと思いました。イエスがこの世を去って御父のもとへ行くと予告したとき、弟子たちはどうしてもイエスの言葉を肯定的に受け取ることができませんでした。
弟子たちが不安がっている様子は、ヨハネ福音書では 16 章に 3 度現れています。「わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。」（16・6）「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」（16・20）「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。」（16・22）
弟子たちの不安は、もっともなことです。しかし、わたしが今日皆さんにたとえとして紹介している「橋を架ける」という考えでイエスの御昇天を見るとき、違った受け止めかたができるのではないでしょうか。イエスが天に昇られるのは、この世界と、御父のおられる天の国との間に橋を架けるため、架け橋となられるためなのです。

イエスが橋を架けてくださったのであれば、この世を去ることは悲しい出来事にはなりません。イエスという架け橋のおかげで、わたしたちの世界は神の国と繋がることになるからです。しかも、わたしたちのほうからは神の国に橋を架けることは不可能で、神がお遣わしくださった御子イエスによって初めて神の国への道ができたのです。
先に話したように、橋が架けられていなければ、対岸にいる人たちとは交わることはできません。橋を架けてくれるだれかがいること、橋渡しになってくれるだれかがいることは、本当にありがたいことです。イエスは天に昇り、わたしたちの国と神の国に橋を架けてくださいました。このように考えるとき、イエスが天に昇られたことは、はっきり喜びとして理解できるようになり、「その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」（ヨハネ 16・22）のです。
イエスが天に昇り、この世界と神の国に橋を架けてくださったのですから、わたしたちはイエスというその道を歩むことを当然期待されています。イエスが御父のもとから遣わされてわたしたちに道を示し、みずからが道となって、御父の国への扉を開いてくださいました。イエスという道を歩むとは、イエスが示された生き方に倣うことです。イエスのことばと行いを、わたしたちが歩んで体験してみることです。
主の昇天の喜びを、弟子たちは「たえず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。」（24・53）とあります。神殿は、この世での神とわたしたちとの交わりの場です。神の国とこの世との架け橋であるイエスを、わたしたちの境内でほめたたえましょう。天に昇られたイエスは、御父のもとでいつもわたしたちのことを心に留めておられ、まもなく聖霊を注いでわたしたちを強めてくださいます。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 14:15-16,23b-26)

主日の福音 13/05/19(No.651)

聖霊降臨の主日 ヨハネ 14:15-16,23b-26)

家族

浜串教会は、今日聖母行列を行ってから聖霊降臨のミサに入りました。聖母行列をして、聖霊降臨の意味合いを考える良い機会となりました。聖母行列は、希望の聖母が設置されている岬から出発します。ということは、必然的に岬までいったん出向いてからでないと行列ができないということです。

ここに、聖霊降臨のお恵みを黙想するヒントを見つけました。イエスによって弟子たちに約束された聖霊は、今日のわたしたちの聖母行列で体験したように、御子イエス・キリストがいったん御父のもとに行ってからでなければ、わたしたちのもとに送ることはなかったのです。ですから、主の昇天と、聖霊降臨は切り離すことのできないものなのです。

先週、わたしは主の昇天が橋を架けることに例えられると言いました。イエスが復活して天に昇り、この地上と神の国とを結ぶ橋を架けてくださったのだと話しました。橋は、もしも一方通行であったらその価値は半分しかありません。橋を通して、こちら側と対岸とを行き来できて初めて、橋の価値は完全なものとなります。

イエスは、天に昇られたことでわたしたちの地上の世界と御父の国とに橋を架けてくださいました。この橋は、実は聖霊降臨を待って完全な役割を果たすことになると思います。御子イエスがわたしたちの救いを父なる神に橋渡しする、そして父なる神からわたしたちにイエスが約束された聖霊が遣わされる。そうして、イエスがかけてくださった橋は片側通行の橋ではなくなり、橋を通して神の救いのわざが行き来するようになったのです。

中田神父の本心を言うと、先週この考えは頭の中に浮かんでいまして、全部話したい欲求に駆られていたのですが、そうすると今週話すことがすっかりなくなってしまいます。それで、「橋を行き来することで橋の役割は完全なものになる」と話すのを控えておりました。もしかしたら、先週の話の中で、「橋は相互に行き来するもののはずだが」と考えていた人もいたかも知れません。

一つだけ、橋の果たす役割について説明を尽くす必要があります。この世界と御父の国との橋は、この世界から御父の国へ行くことのできる御子イエスにしか架けることができないものでした。同様に、この橋を通して御父のもとから聖霊が遣わされますが、この恵みもまた、御父のもとからわたしたちのもとへ来ることのできる御子イエスによってしか果たすことができません。

つまり、この橋を行き来することができるのは御子イエスお一人であって、わたしたちはこちらから渡ることもあちらから戻ることも、一切できないということです。ただ、イエスという道を歩むとき、わたしたちはイエスを通してこの世界から御父の国へ架けられた橋を渡していただくことになります。

そこで最も大切なことは、昇天の栄光も、聖霊降臨の恵みも、ひとえに御子イエスの働きによるものだということです。神から人への橋渡し（恵み）人から神への橋渡し（救い）いずれも、御子イエス・キリストを通して父なる神が一方的に与えてくれたいつくしみのなせるわざなのです。ですから、聖霊降臨の恵みを喜ぶいちばんの方法は、イエス・キリストに心から感謝することなのです。

三位一体の主日(ヨハネ 16:12-15)

主日の福音 13/05/26(No.652)

三位一体の主日（ヨハネ 16:12-15）

父と子と聖霊は同じいのちのことばを語る

80 歳の三浦雄一郎さんがエベレスト登頂に成功しました。凄すぎます。とてもじゃないですが真似できません。もしも参考になるとしたら、80 歳になっても努力を怠らない姿勢でしょう。80 歳になっても、ミサの説教を考え続ける努力を怠らない。そういうことでしたら、真似することができるかもしれません。でも 80 歳になって、説教を準備したとして、説教をする場所が与えられるのでしょうか。それが問題です。
三位一体の主日を迎えました。毎年この日の説教は悩みますが、今年はもしかしたら、何かをとらえたかもしれません。ただ、わたしがとらえたと言っても、それがうまく皆さんに伝わるとは限りませんが。
今年、三位一体の神を考えるにあたって、神の働きは何かということを考えてみました。神の働き、それは人に命を与え、命を救うということです。なぜなら、人に命を与え、命を救うのは神にしかできないことだからです。
今日選ばれた福音に、「父が持っておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」（16・15）とありますが、これは、父と子と聖霊の三位の神が、連続性をもっていることを表している言葉です。父と子と聖霊の働きが連続していることが、唯一の神である証しになります。
そこで、父と子と聖霊の神の働きが連続していることをわたしたちのほうから確かめたいなぁと考えたわけです。神の働きで、どんな働きをたどっていけば、わたしたちに確かめることができるかなと考えたとき、「人に命を与えること」「人の命を救うこと」が浮かびました。
ところで、わたしたちが、「人に命を与え、命を救う神の働き」を確かめる方法は何でしょうか。それは、聖書を丹念に読み返すことです。わたしもそうすべきですが、実際には聖書の言葉を検索できるパソコンソフトの力を借りました。
まず「命を救う」という言葉に関係する箇所を検索すると、神が命を救おうとされる場面はたくさん出てきまして、なるほどと納得できるくらい見つかりました。
旧約聖書、創世記を調べると、19 章に「ソドムの滅亡」の物語があります。この中で、ロトとその家族の命を救おうとされます。「あなたは僕に目を留め、慈しみを豊かに示し、命を救おうとしてくださいます。」（19・19）神のことばに従って難を逃れたロトとその家族は、神によって命を救われました。これはもちろん、御子イエス・キリストが人間の命を救うことの前触れでもあります。
旧約聖書の引用だけでもたくさんありますが、あと 1 つ紹介しておくと、申命記の 4 章に「イスラエルよ。今、わたしが教える掟と法を忠実に行いなさい。そうすればあなたたちは命を得、あなたたちの先祖の神、主

が与えられる土地に入って、それを得ることができるであろう。」（4・1）
この箇所は、モーセが神から受けた十戒を念頭に置いて考えるとよく分かります。神は旧約時代に、出エジプトなどのドラマチックな救出劇も行いましたが、もっと大切なことは、神がモーセを通して与えた十戒を忠実に守り行うなら、命が与えられるということです。
この点について、イエスも金持ちの青年とのやり取りで同じ事を言いました。金持ちの青年が「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」（マタイ 19・16）と尋ね、イエスはそれに「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」（同 19・17）と答えたのです。
新約時代になって、御子イエス・キリストが人に命を与えるために遣わされました。ヨハネ福音書がそのことを的確に言い当てています。「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」（10・10）命を与え、命を救う神の働きは、御父から御子に、確実に続いています。
ほかにも、「あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。」と、御父と御子の働きの連続性が証言されています。
聖霊については、何が語られているでしょうか。ローマの信徒への手紙の中で、パウロが次のように語っています。「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」（8・2）霊によってあなたがたは救われたと言ってますので、ここにも、父と子と聖霊の神の働きの連続性が見られます。
ほかにも、同じローマの信徒への手紙の中に「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。」（8・11）とあります。
今年の三位一体の主日、わたしたち人間の側から神の働きをたどってみました。父と子と聖霊の三位の神が、人に命を与え、命を救う働きを途切れなく続けさせてくださいます。わたしが生きている今も、イエスがわたしたちと共にいてくださったときにも、神の働きは途切れなく、同じです。三位一体の神をたたえ、神の働きは変わりなく続くと、証ししましょう。そのための恵みを、このミサの中で祈り求めましょう。

キリストの聖体(ルカ 9:11b-17)

主日の福音 13/06/02(No.653)

キリストの聖体(ルカ 9:11b-17)

イエスに渡し、イエスの祝福を受ける

典礼暦Ｃ年の「キリストの聖体」の主日は、ルカ福音記者が書き記したパンの奇跡の出来事を福音に選びました。ルカは、福音を書き残すのにマルコ福音を参考にしたようです。ただ、マルコ福音を丸写しするのではなく、マルコが伝える物語の中で、自分が伝えたいことに合わない部分は省略したりしています。
２つその例を挙げますと、朗読の最初に「イエスは群衆に神の国について語った」とありますが、参考にしたマルコ福音書には「大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（マルコ６・34）となっていて、「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れむ牧者の姿」をルカは省略しています。
また、パンを群衆に分け与えるときに、マルコ福音書では「イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった」（マルコ６・39）とあるのですが、今日朗読したルカ福音書の同じ箇所では「イエスは弟子たちに、『人々を五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい』と言われた」（９・14）となっています。
これは、パンを増やす奇跡物語を通して、福音記者が何を伝えたいかを知ると理由が分かります。マルコ福音記者は、「羊を青草に休ませ、豊かに養う牧者の姿」を伝えようとして、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れむとか、群衆を青草の上に座らせるとかの記述があるわけです。
ルカ福音記者は、それとは違うイエスの姿を伝えようと考えているので、あえてマルコの強調点を後ろに下げて、見えなくしているのです。ルカが伝えたいのは、弟子たちが「あなたはキリストです」と信仰告白できるための姿、神のキリストとしての姿なのです。
では弟子たちは、イエスのどんな姿を見て、「あなたはキリストです」と信仰告白できるようになったのでしょうか。単純に、五つのパンと二匹の魚を増やしてくださったことでしょうか。
それは、どうすれば食べ物を大勢の人々に渡せるのか、そのことに気づいたときでした。弟子たちがわずかな食べ物を差し出し、イエスの働きに協力すると、絶望的とさえ見えた大群衆に食べ物が行き渡りました。いったん自分たちのパンと魚をイエスに渡し、イエスから受け取ったパンと魚を群衆に配ったときに、彼らはイエスがだれであるかに気づいたのです。
わたしたちの体験に照らして考えてみましょう。4 月 29 日、わたしたちは高井旅教会献堂五十周年、福見教会献堂百周年を祝いました。この記念事業はどうしてもなし遂げたい事業でしたが、わたしたちの努力で、本当にその日を迎え、すべてをなし遂げることができると、最初からお考えだったでしょうか。
わたしの頭の中は、こんな大きな事業を無事になし遂げるのは、難しい

のではないか、わたしの力では無理なのではないか。最初はそんなことを思っていました。だれか代わりに、陣頭指揮を執ってくれないだろうか、一度も経験したことのない大きな計画に圧倒されて、もしかして三年で転勤しないだろうか、そういうことすら考えていたのです。
わたしたちの手元にあったのは、本当はパン五つと魚二匹、それくらいしか持ち合わせがなかったのです。本来なら、これだけの事業をなし遂げるにはあまりにも頼りない出発でした。けれどもわたしたちだけですべてをなし遂げるのではないと途中で気づき、多くの先輩、この土地をふるさとにしている多くの出身者、そうした人との繋がりの中で、一筋の光が見え、道が示されていったのです。
それは、言ってみれば、パン五つと魚二匹を、いったん神さまにお渡しすることでした。わたしたちだけではとても無理です。今ある知恵、今使える人材、お金はこれだけです。どうかこれをあなたの祝福で満たしてください。
そう願ったとき、イエスはわたしたちの五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて渡してくださったのです。イエスの祝福を受けて帰って来たとき、わたしたちが持ち合わせていた物はすべての必要を満たすほど豊かになっていました。
わたしは、今回の高井旅教会献堂五十周年、福見教会献堂百周年をとおして、パンの奇跡を体験し、イエスを「神からのメシアです」と信仰告白できる力をいただいたのだと思います。遠大な計画を可能にしたのはイエスのおかげですと、今は自信を持っていうことができます。
わたしたちの体験は、大切なことを教えていると思います。わたしたちが持っているものを、いったんイエスに渡すこと。そしてイエスの祝福を受けて渡してもらうなら、豊かにしてもらえるということです。イエスが祝福して豊かにしてくださったとき、それはわたしを満たしてくれるだけでは終わらず、わたしを通して多くの人を豊かにしていきます。
では何を、イエスにお渡しすれば良いのでしょうか。何よりもまず、今日一日の始まりを、イエスにお渡しするのがよいと思います。わたしたちは、たとえばこうして主日のミサに集まり、礼拝をささげています。それは、今週一週間を、イエスにいったんお渡しすることです。イエスに委ねることで、イエスが祝福し、もう一度渡してくださいます。その時、祝福された一週間は、わたしだけではなく、数えきれない人を豊かにする時間に変わっているのです。
ミサは、みことばと聖体の食卓に近づくことです。わたしたちの持っているもの、時間も知恵も、大きなことを成し遂げるにはあまりにも非力です。それをささげものとしていったんイエスに渡し、みことばと聖体に近づくとき、大きな祝福を受けます。
キリストの聖体の祭日、いったんイエスに明け渡して、大きな祝福を受けてもう一度授けてもらう体験を積みましょう。体験を通して、「イエスは神からのメシアです」と、力強く信仰をあかしできるよう、恵みを願いましょう。

年間第 10 主日（ルカ 7:11-17）

キリスト者は御聖体のイエスにいのちの根拠をもつ

今年度の教区司祭黙想会に参加してきました。約一週間にわたる黙想会の最初のほうは、よく説教師の講話に集中して耳を傾けることができたのですが、終わりのほうになると小教区の皆さんのことがだんだん気になってきて、浮き足立ってしまいました。
今週末には浜串教会の旧教会跡地で記念碑の祝別とミサを予定していましたし、福見教会の人で病者の塗油をお願いされている人のことも気になっていました。そのほかにも船舶検査の係官から連絡が入ったりして、だんだん帰ってからのことが頭の中で膨らんでいたのです。
それでも、今年の説教師から持ち帰ることのできた収穫はたくさんありました。その中から、6 回目の説教で話された「御聖体についての講話」を紹介しながら、今週の福音に結びつけていきたいと思います。
御聖体の秘跡は、皆さんご存じのようにイエスが最後の晩餐の席で弟子たちを目の前にして制定されたものです。この最後の晩餐の雰囲気を、説教師の塩谷神父さまは「この上なく愛し抜かれた弟子たちに最後に残した形見、それが御聖体である」と説明してくださいました。
イエスと弟子たちは、3 年間の宣教生活の間、イエスのことばによれば、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」（ルカ 9・58）という生活をしていて、この世的には何も残せる財産は持ち合わせていませんでした。
イエスもそのことは十分承知していたでしょう。そのような中で、イエスが弟子たちに残せる形見、財産は、イエスご自身だったわけです。もはや弟子たちに残せる形見は、ご自身のからだしかなかったのです。
この雰囲気を感じ取りながら、わたしたち司祭はミサをささげていきたい。説教師の神父さまはそうわたしたちに呼びかけました。「みな、これを取って食べなさい。これは、あなたがたのために渡されるわたしのからだである。」
別れの間際に、形見を残しておきたい。しかしイエスには、物質的な形見となるようなものは何もない。ただあるのは、ご自分のからだのみ。このわたしのからだを、あなたたちに形見として残そう。そんな思いを、司祭たちもミサの聖変化の時に感じ取ってほしい。説教師が最後の晩餐の場面を深く理解していることが、この日の講話から十分伝わりました。
黙想会のこの学びを、今週の福音朗読を読み解くきっかけにしたいと思います。選ばれた箇所は、「やもめの息子を生き返らせる」という場面でした。すでにやもめとして登場する母親は、今度は一人息子まで失うことになります。男性が絶対的に優位だった 2 千年前のユダヤ社会の中にあって、頼るべきものをすべて失った。それがこのやもめの姿でした。
イエスは、すべての希望を失っている親子に近づきます。イエスは若者を生き返らせ、母親に返してくださいました。本来いのちに満ちあふれているはずの若者が、いのちを絶たれてしまっている。この場面でイエ

スが与えることができるのは、この世的な何かではなく、やはりイエスご自身のいのちだったのではないでしょうか。いのちの与え主である神として、若者のいのちを取り戻してくださったのです。
今ここで泣いている母親にとって、「もう泣かなくともよい」と言うことができるのは、若者のいのちを取り戻せるお方しかいません。母親はきっと、一人息子のいのちの他に何も望みはなかったからです。イエスは、母親の「これしかない」という望みに答えてくださいました。
実は、イエスはその当時も今も、人間の「これしかない」という願いに応えてくださるお方なのだと思います。わたしたちキリスト信者は、この世にすべての希望を置きません。キリストに希望を置いて、この世を生きています。それは、この世にすべての希望を置く人からすれば滑稽な姿かも知れません。
この世にすべての希望を置く人に対するわたしたちの答えはこうです。「わたしたちの希望は、イエスにしかありません。」御聖体のうちにおられるイエスにしか、この世にすべての希望を置かない生き方を説明できる根拠はないのです。
司祭・修道者は、結婚生活などに代表されるようなこの世のパートナーをもちません。お互いに助け合う生き方である結婚生活は本当にすばらしいわけですから、それを手放して生きることは、司祭・修道者の生き方に縁のない人々にとっては滑稽に見えるかも知れません。
司祭・修道者にとって、自分たちの生き方に価値を与えるのは御聖体のイエスさま、これしかありません。単に独身生活を保って社会に貢献する生き方を目指すのであれば、司祭・修道者になる必要などどこにもありません。御聖体のイエスしか、司祭・修道者の生き方を説明できる根拠はないのです。
キリスト者の生き方は、日本の中にあってたった１％しかいない人々の生き方です。99％の人々にとっては滑稽な生き方かも知れません。しかし、わたしたちがこの生き方に絶対の自信を持って生きるなら、パン種が練り粉全体を発酵させるように、日本の社会に変化をもたらすことができるのではないでしょうか。
そのためには、「わたしたちが１％しかいない人々の生き方ができる根拠は、御聖体のイエスにしかない。」そう固く信じて、生きていく必要があります。
今日のミサでみことばと聖体に養われながら、「わたしたちが確信を持てる根拠は、御聖体のイエスにしかない」と、信仰を言い表すことにしましょう。わたしたちキリスト信者の生き方が、日本に住む多くの人の生き方に響きますようにと、ミサの中で恵みを願いましょう。

年間第 11 主日(ルカ 7:36-8:3)

年間第 11 主日（ルカ 7:36-8:3）

神の全能の力は弱さの中に現れる

木曜日に、少し怖い思いをしました（イノシシと納骨）。福見の曽山という墓地で納骨を頼まれていて、祭服を着て墓地に登り、納骨の祈りを済ませてきました。帰り道、まだ雨のあとだから足もとに気をつけてと言われたその直後に足をすべらせてしまい、石段を三段くらいすべって、尻もちと、手を擦り剥き、小指の爪が割れていました。
側にいた参加者が「キャー」と大声を出しまして、祭服に泥が付いてしまいましたが、幸いにわたしは起き上がることができまして、今こうして報告することができています。あとで、肩胛骨あたりがやけにひりひりするので確かめましたら、そこも擦り剥いていました。
今になって考えると、よくあれくらいの擦り傷で済んだなぁと胸を撫で下ろしています。頭を打ったり、首を痛めたりしていてもおかしくない状況でしたから、神さまに感謝しなければと思います。ついでの話ですが、少し寄付をしますので、横道に入る手前の石段に、手摺りを付けてください。次に納骨をお願いされた時、安心して出掛けたいです。
さて、今週の福音朗読には、イエスが罪深い女をゆるすという場面が選ばれています。16 日（日）の午後に、わたしは信仰養成講座の講師を頼まれているのですが、講話のために準備していたことが今週の朗読された福音の学びと結びついたので、講話の紹介も兼ねて話したいと思います。
午後からの信仰養成講座でわたしが担当するのは、信仰宣言の中の「父なる神」についてです。わたしたちは信仰を言い表すにあたって、この「父なる神を信じる」ということが何より大切になります。わたしたちが信じようとすることがらが、すべて父なる神を信じることに深く関わっているからです。
この父なる神についてわたしたちが宣言するのは、「天地の創造主」という信仰と、「全能の父である神」という信仰です。わたしたちの多くは、神さまの特徴について次のようなことを習い覚えたと思います。「神は全知全能永遠で限りなく尊く、また慈愛深いお方です。」
ところで、わたしたちが唱える信仰宣言の中で、父なる神について、「全知全能永遠で限りなく尊く、また慈愛深い」とすべてを並べて宣言しているわけではありません。ただ「全能である」そのことだけを取り出して宣言しています。ということは、もっとも古いとされる使徒信条や、ニケア・コンスタンチノープル信条が固まった時代には、「全能の神」ということがとくに重要視されていたということなのでしょう。
そして、この「全能の神」という性質を、今週の福音朗読を読み解く鍵に使いたいのです。さてカトリックの教えを学ぶ規範版として福者ヨハネ・パウロ二世が最後に手掛けたのが「カトリック教会のカテキズム」という書物です。そして、最近この本を要約したものが出まして、この中に「全能の神」の性質がとくに現れるのは、「無からの世界の創造」

「愛による人間の創造」において現れるとあり、さらに、「御子の受肉と復活」「人を神の養子とするたまものにおいて」また「罪のゆるしにおいて」現れることが説明されています。
今週の「罪深い女をゆるす」という場面は、まさに、罪のゆるしにおいて神の全能が発揮された特徴的な場面です。「イエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った」（ルカ 7・38）この女性は、あわれみがもっとも必要な状態にありました。
ところが、この場面で女性にあわれみをかける人はだれもいません。「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」（7・39）ファリサイ派の人の心の声は、イエスの弟子たちの声も代表していたかもしれません。みなが、女性を罪人として排除しようとしていたのです。
ここに、神の全能が働きます。神お一人しか、この女性にあわれみをかけることはできませんでした。それは、神の全能の力でしか、この女性の罪を覆うことはできなかったということです。イエスがパウロに語った「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」（二コリント 12・9）ということばの通りです。
もしわたしたちが、今週の福音朗読を通して「神の全能の力は、弱さの中で働く。罪人のゆるしの中で働く」ということを信じるとき、過去に起こった出来事だけに目を向けてはいけないと思います。むしろ、神の全能の力は、今この時代に、わたしたちの今の生活にも発揮されるのだと信じる必要があるのです。
イエスは、かつてファリサイ派の人の招待した家で全能の力を示してくださったように、わたしたちの家庭にも、わたしたちの小教区にも、わたしたちの社会にも、罪のゆるしを通して神の全能の力を示し、罪人に近づいてくださいます。わたしたちは今日の物語のファリサイ派の人のように罪人を排除するのか、罪人をゆるして受け入れるのか、どちらか選ばなければなりません。
この 21 世紀においても、わたしたちは神の子イエス・キリストの「全能の力」を信じる人でありたいと思います。イエスに神としての全能の力を信じなければ、「あなたの罪は赦された」ということばも、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」ということばも聞くことはできません。全能の力を信じなければ、2 千年前と何も変わらないことになります。
全能の神が、弱さの中に、罪の中に、力を発揮してくださると信じましょう。信じたことを、生活の中で声にしてみましょう。全能の神の力を信じるとき、わたしたちは変えることのできなかった社会を変えることができるのだと思います。

年間第 12 主日(ルカ 9:18-24)

年間第 12 主日(ルカ 9:18-24)

「神からのメシアを知る道」がある

運転ルールを守らないのは中田神父だけかと思いましたが、どうやらそうでもないようです。わたしがいつだったか車を出して福見に行こうとした時、教会前の十字路で、浜串に帰って来るお母さんの運転する車が十字路を斜め 45 度に横切っていきました。それはつまり、一時停止をせず、直角に曲がらずに、けっこうなスピードで斜めに横切ったということです。
わたしは車庫から出たばかりだったので、速度は出ていませんでしたが、怖いなぁと感じました。わたし自身もあちこちで他の車に迷惑をかけているのであまり言えた義理ではありませんが、心の中で「事故起こさないでね・・・救急車で運ばれたりして、わたしの仕事を増やさないでね」と祈りました。けがなくて、良かったです。
あちこちで、「お腹出てきたね」と言われるようになりました。「最近、走ってないの？」と遠回しに言う人もいます。正直、秋口にならないと走る理由が見つからないので走っておりませんが、まだイトヨリのシーズンに入っていないことだし、時間の無駄遣いをするくらいなら、走ったほうがよいかもしれません。心を入れ替えて、走ってみようかと思います。
今週の福音朗読を読み味わうのに、直前の箇所を頭に置いておくと役に立つと思います。ルカ福音書の 9 章が選ばれていますが、9 章の始めで、ヘロデが、イエスの噂を聞いて戸惑う場面があります。「いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は。」（9・9）
ヘロデはイエスを信じることはありませんでしたが、イエスが弟子たちに問いかけた「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」（9・20）ことばの前に、図らずも立たされていることになります。ユダヤの王ヘロデがイエスを「何者だろう」と不思議に思ったということは、ユダヤの国民すべてが、イエスに関心を持つきっかけになったでしょう。そんな中で、「五千人に食べ物を与える」奇跡が取り上げられ、今週の朗読箇所へと続いているのです。ヘロデ王が、イエスを「何者だろう」と思っている。そんな中で、イエスは五千人に食べ物を与えてくださる。それを目の前で見た弟子たちも、当然「このかたは何者だろう」と考えたはずです。
イエスは、これらの出来事、つまりヘロデの当惑、パンの奇跡を見たあとで、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と弟子たちに問いかけます。これまでよりも適切な答えをイエスが期待していたとしても不思議ではありません。そこでペトロが代表して「神からのメシアです。」（9・20）と答えました。
ペトロの答えは、十分なものだったのでしょうか。ペトロは適切な答えを言ったのですが、ペトロ自身には、言葉の重さがどれほどのものであったかが理解できていませんでした。実際イエスは、弟子たちを戒め、

このことをだれにも話さないように命じておられます（21 節参照）。
言葉の重みを分かってなくても、答えは立派です。ただ、いつかはその言葉の重みを理解しなければなりません。イエスは、「神からのメシア」が「苦しむメシア」であることを、正しく理解する道も示してくださいました。それが、「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（9・23）という道でした。
この道を、何の疑いもなく歩んでいけるなら、弟子たちに沈黙を守るように戒めたりはしなかったでしょう。ですが、「自分を捨てる」とか「十字架を背負って」といった生き方は、喜んでは引き受けられない生き方です。難しい道ですが、この道を通らなければ、「神からのメシア」「苦しむメシア」を理解することはできないのです。
「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」（9・22）「必ず・・・ことになっている。」これは神のご計画です。人間の、なかなか当てにならない計画とは比べものにならない確かな計画です。
わたしたちは、イエスに従う道を選ぶか、拒むかを決めなければなりません。「苦しむメシア」が苦しむ理由は、ほかでもない、わたしたちのためです。わたしたちのためにイエスが苦しむことを、わたしたちが信じるために、わたしたちも日々、自分の十字架を背負って、イエスに従うのです。
もちろん、わたしたちは自由に物事を選ぶ自由意志を与えられています。ですから、自分の十字架を避けて通ることも可能です。しかしそれは、「苦しむイエス」を信じないことになります。「神からのメシア」が示す神秘に背を向けることになります。
イエスが示す「神からのメシア」への信仰を、ペトロは表明しました。その言葉の重みも、わたしたちが理解するために、今日の自分の十字架を背負うことにしましょう。報いが欲しいから自分の十字架を背負うのではなく、十字架を担うことに意味があり、イエスがどなたであるかを知る道があることを信じましょう。十字架を愛するための恵みを、このミサで願うことにしましょう。

年間第 13 主日(ルカ 9:51-62)

年間第 13 主日（ルカ 9:51-62）

あなたはいつ決意を固めますか

棒アイスで 1000 円当たりました。当たったのは、暑くなってきて賄いのシスターが気を利かせて買ってくれたアイスです。そのアイスで、1000 円分のクオカードが当たったのです。
この話には前置きがあります。あるときシスターから「冷凍庫にアイスが入っているのでどうぞ食べてください」と勧められたので冷凍庫を空けましたら、なぜか袋の中でアイスがグニャグニャになっていたのです。以前から気にはなっていたのですが、まれに冷凍庫引き出しのレールに氷が付くことがありまして、きちんと閉まらないのです。今回もそうだったのでしょう。アイスがちゃんと凍らず、中で溶けていたのだと思います。「これ、溶けてグニャグニャになってるよ。食べられないから処分してね」するとシスターは「もう一度凍らせましょう。そうすればきっと食べられます」と言います。
たとえ凍っても、一度溶けたものですからもとの形にはなりません。あまり乗り気ではありませんでしたが、それでも甘いものが欲しくなってあとで袋を空けてみたら、案の定グチャグチャのままもう一度固まっていました。
まぁそれでも、口に入れればアイスの味はします。そうして食べ終わってからビックリです。ハシに、「1000 円当たり」と書いてあるではないですか。危うくゴミ箱行きになる運命だったのが、1000 円儲けさせてくれたのです。ありがたいことです。何事も、よく人の話を聞くことが大事だなぁと、今回の件で学びました。
日本の教会に喜ばしいニュースが入ってきました。教皇さまは、札幌教区に新しい司教様を任命なさったのです。6 月 30 日付のカトリック新聞の一面に新司教さまの記事が掲載されていました。実は同じ新聞に、中田神父も福音の解説をお願いされて、記事になりましたよとお知らせしたかったのですが、わたしのニュースは札幌の司教様のニュースで吹っ飛んでしまいました。
カトリック新聞編集部からの原稿依頼は、本音はお断りしたかったのです。いろいろ断りたい理由があったからです。わたしはここ 10 年ほどすべての日曜日の説教をブログに掲載しているので、わざわざカトリック新聞に載せる必要を感じていません。ほかにも、カトリック新聞はほとんどすべての長崎教区司祭が読んでおられます。わたしが福音解説をするよりも、もっとふさわしい人が何人もいます。こうした理由で、引き受けたくなかったのです。
すると、編集部の人はこう言いました。「神父さまのブログは承知しています。でもブログの読者は 200 人でしょう？カトリック新聞は、1 万 5 千人です。神父さまの福音解説は、1 万 5 千人の読者にも必要ではないでしょうか？」それで断りきれなくなって、引き受けたのでした。
せっかく書くので、「わたしはミサ中の説教をこう理解している」とい

うことと、「今週の福音の学び」この２点を与えられた字数で書いてみました。まず、ミサ中の説教をどう理解しているかですが、司祭の説教は、福音朗読箇所の読書感想文であってはいけないと思います。
「わたしはこう思う」という説教も、それはその司祭の「わたしはこう生きようと思う」という姿勢であるべきだし、説教を聞く人にとっては「ではわたしたちはこう生きていこう」という招きであるべきです。しかも、「イエスに倣って、こう生きようと思う」という説教でなければ、聞く人の心に届かないと思うのです。
次に福音の学びですが、今週の福音の冒頭、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」とあります。いよいよ、イエスのこの地上での歩みが完成する場所へと近づいています。エルサレム、それは三度にわたってイエスの死と復活が予告された場所、復活したイエスが再び弟子たちと出会う場所、聖霊が注がれて、ここから福音があまねく宣べ伝えられる場所です。イエスのすべての歩みがそこへと秩序づけられる場所へ、いよいよ向かわれるのです。
当然、イエスを信じる人すべてに、イエスは弟子としての覚悟をお求めになります。サマリアの村人は、イエスを歓迎せず、弟子としての準備がととのっていないことをさらけ出してしまいます。「あなたがおいでになるところなら、どこへでも従って参ります」と言う人には、その覚悟が自分の身を横たえる場所、つまり「枕」すら取り上げられても変わらないか、と問われます。
別の人は「主よ、まず父を葬りに行かせてください」と懇願しました。ですがたとえ「父母を敬いなさい」という掟でも、イエスに従うことより優先させてはいけないのです。同じように「家族とのいとまごい」すら、イエスに従う弟子の覚悟を鈍らせてはいけないのです。大変厳しい要求のように思えるかもしれませんが、わたしたちに最初に福音を知らせにきてくれた数えきれない宣教師が、イエスの求めに喜んで応え、身をささげてくださいました。
では振り返って、わたしたちはいつ、「エルサレムに向かう決意を固める」すなわちそれぞれの場所でイエスの弟子として生きる決意を固めるのでしょうか。「生涯互いに、愛と忠実を尽くすことを誓います」と契約を交わした夫婦は、いつその契約の完成のためにいのちをかけるのでしょうか。「わたしとわたしの後継者に、尊敬と従順を約束しますか」「約束いたします」と公言した司祭は、いつその言葉のゆえにこの世に死ぬことができるでしょうか。「清貧・貞潔・従順」を神に誓った修道者は、いつその三誓願が束縛ではなく自由と感じられるようになるのでしょうか。
イエスは、だれも決意を固められずにいたその時に、自ら先頭に立ってエルサレムに向かう決意を固められました。わたしたちの模範となるためです。わたしたちがイエスの後について、イエスが歩いたように歩くことができるためにです。流行しているセリフでまとめましょう。わたしたちはいつ決意を固めるのですか？もちろん「今でしょ。」

主日の福音 13/07/07(No.658)

年間第 14 主日(ルカ 10:1-12,17-20)

収穫の主に願いなさい

先週の火曜日、イトヨリ釣りに行きました。わたしにとってのイトヨリシーズンの開幕です。前日の月曜日、「今日は釣り日和だよ」と何人かに声をかけてもらいましたが、残念ながら月曜日は地区司祭会議その他がありまして、行くことができませんでした。
その代わりに火曜日に行ったのですが、火曜日は先週一週間を代表するような荒れた天気で、２ｍくらいボートが上下する状況でした。速度を上げてボートを走らせることはできず、低速で２ｍの波をじわりじわりと乗り越えながら、「この辺かなぁ」という場所で釣りを始めたのです。２時間ほどでイトヨリ６匹と、サバフグ（キンブク）５匹くらいを釣り上げて帰って来ました。まだ粘っていればもう少し釣れたでしょうが、立ち上がると海に放り出されそうな波でしたから、捜索願いが出る前に退散してきました。
今週の福音朗読はイエスが七十二人を派遣する場面が選ばれています。「その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。」（10・1）イエスが行くつもりの場所の中に、漁師が漁をする海の上は含まれていたでしょうか。含まれていたらなぁと思います。
「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」わたしはこのイエスのことばを、あらためて考えてみたいと思いました。
「収穫は多いが、働き手は少ない」とイエスは明言します。ところが、収穫が多いことを保証してくれる材料はあまり見当たりません。むしろ、努力しても収穫のないのが現実です。2013 年 5 月のよきおとずれに発表された長崎教区現勢統計表を見ると、信徒数 61634 人で、日曜日のミサに参加している人は 20003 人です。参加できている人は 3 分の 1 です。結婚する人を数えると、カトリック信者同士は長崎教区全体で 56 組、カトリック信者と、キリスト教でない人（おもに仏教の方と思いますが）が 202 組です。幼児洗礼が 341 人、これは生まれた幼児の数とあまり変わらないと思います。成人洗礼は 162 人、両方の洗礼を合わせて 503 人です。これに対して、年間で亡くなる人は 643 人と、洗礼の数を大幅に超えています。
これらの統計は、大きな期待を持たせる数字ではないと思います。そんな現実の中で、「収穫は多いが、働き手は少ない」というイエスのことばをためらいなく受け入れ、イエスのことばを信じて働き続けるためには、どう考えればよいのでしょうか。
１つ、気にしていることがあります。２年くらい前に信徒の皆さんに長崎大司教区がアンケートをとりました。その中の声を拾って感じることは、「取りこぼしが多いのではないか」ということでした。たとえば、司祭に対する率直な意見を読んでいると、司祭の対応のまずさで拾える

収穫を取りこぼしているのではないか、そう思いたくなる声がたくさん届いているのです。
海で網を使って魚を捕らえる時に、対象にしている魚よりもはるかに大きな網目の網を使えば、魚が漏れてしまうのは当然です。司祭の働きが、神の国のぶどう園で期待されるはずの収穫を取り逃がすようなら、もっときめの細かい働きをしてくれる人が必要です。これが、「働き手が少ない」ということかも知れません。
司祭が取り逃がした収穫と思われる人々はどこへ流れていくのでしょうか。イエスが行くつもりのすべての町や村ではないでしょうか。そこへ、イエスが十二使徒のほかに選ばれた七十二人が派遣されていきます。現代の七十二人はきっと信徒の七十二人です。取り逃がしたたくさんの人々をもう一度神の国の平和にあずからせるために、イエスが必要としているのです。
司祭はそれぞれ、大なり小なり欠点を持っています。司祭のまずさで、収穫を取りこぼすことがあります。本当に反省しなければなりません。そして同時に、取りこぼした収穫を集めてくれる働き手を、心から願い求める必要があります。さまざまな機会に取りこぼした収穫を、きめの細かい対応で神の国に結び付けることができれば、これからも収穫は多いのではないでしょうか。
イエスは、欠点もある人々十二人を使徒としてお選びになりました。彼らの働きがまず必要ですが、使徒たちの働きでも漏れる人がいるかも知れない。神がこの世界で働き続けて、多くの収穫に結び付けるために、ほかに七十二人を必要としておられます。
どうか、取りこぼしをしてしまう司祭たちの働きを、皆さんが七十二人に加わって助けて欲しいと思います。イエスが行くつもりのすべての町や村に、先に行って欲しいと思います。実りを付けてくださるのは神です。今も多くの実りを付けてくださる神に信頼を寄せて、お一人お一人の名が天に書き記される働きを積み上げることができるように、収穫の主に願いをささげましょう。

年間第 15 主日(ルカ 10:25-37)

主日の福音 13/07/14(No.659)

年間第 15 主日(ルカ 10:25-37)

イエスからの最上の招きに答えよう

昨日の後浜串での地曳き網は大変お世話になりました。網を張るところから、網を曳いて魚を浜に引き上げるところまで、参加させてもらいました。網を曳きながら、そんなに遠くないと思っていた場所が、かなり長いこと網を曳かないと引き寄せられないくらい遠いのだと知り、海の作業も大変だなとあらためて思いました。
子どもたちも、一心不乱に網を引き寄せていましたので、お腹も空いてきっと昼の魚はご馳走に感じたことでしょう。かなり沖合から、今日は満潮になる時間が網を引き終わる時間くらいだったので、足もとも良くない中でみんなかけ声を出し、調子を合わせて頑張っていました。
わたしも、つい張り切りすぎて左指にマメを作ってしまいました。ミサの時に左手でご聖体の容器「チボリウム」を持つのですが、指を痛めてしまってしっかり持てなくなるのではないかと心配までしてもらいました。ありがとうございます。
さて、今週の福音朗読は「善いサマリア人」のたとえでした。このたとえでイエスがいちばん問いかけたいのは、「あなたは、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」（10・36 参照）ということでした。
イエスのことばは、律法の専門家が、「自分を正当化しようとして、『では、わたしの隣人とはだれですか』」（10・29）とイエスに尋ねたのに答えて言われたものですが、律法の専門家が考えていることとイエスが考えていることの間には相当開きがあります。ここからまず考えてみることにしましょう。
律法の専門家は、「わたしの隣人とはだれですか」とイエスに聞き返しました。この質問は、隣人をある一定の枠で考えようとしている態度が現れています。同じ民族であるとか、同じ地域に住んでいるとか、同じ時期に共に学んだとか、そういう繋がりをもとに、隣人を考えようとしているわけです。
ところが、イエスが言う「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」という問いかけは、いつ、どこででも、わたしはわたしを必要としている隣人に出会うということを前置きにして問いかけているのです。
たとえば、わたしたちが病院に行ったとしましょう。受け付けを済ませるために、待合室にはたくさんの人が集まってくると思います。ほとんどの人が、知らない人かもしれません。ここで、「わたしの隣人とはだれですか」と考えるなら、隣人はだれもいないことになります。
一方、イエスが問われたように、「だれがその人の隣人になったと思うか」と考えるならどうでしょうか。受け付けのために集まっている人をよく見ると、わたしよりも辛そうにしている人、離れた所にひとりぼっちでいる人、前回も前々回も、わたしと受け付けで一緒になった人など、

いろんな人が目に留まると思います。
こうした人の中に、わたしが声をかけたら、喜んでくれる人がいるのではないでしょうか。声をかけてもらいたいと待っている人がいるのではないでしょうか。同じ、待合室に集まる人々ですが、「わたしの隣人とはだれですか」と考える場合と、「だれがその人の隣人になったと思うか」と考える場合では、見え方はまったく違うのではないでしょうか。
もう１つ、イエスの問いかけを具体的に考える例を紹介します。15 日（月）昼１時半から蛤の総合運動公園で、上五島下五島の司祭たちが集まって、鯛ノ浦にある養護施設の子どもたちと野球の試合を予定しています。夏休み中に、県内の養護施設同士で野球大会があるそうですが、その練習として、鯛ノ浦の養護施設の子どもたちから五島の司祭たちに毎年この日試合を申し込んでくるのです。
わたしたちは、対戦する子どもたちのことをほとんど知りません。野球の試合をしても、また来年の海の日まで、一度も出会わないかもしれません。もし「わたしの隣人とはだれですか」と問うなら、対戦する子どもたちのだれ一人として、隣人とは言えないでしょう。
けれども、「だれがその人の隣人になったと思うか」と考えるなら、わたしは子どもたちの隣人になることができると思います。今年も、この日まで練習を積んで、試合をすることができた。試合は勝つかもしれないし、負けるかもしれない。それでも、真剣勝負を子どもたちとすれば、子どもたちの隣人になれるのです。
わたしたちはイエスの問う「だれがその人の隣人になったと思うか」をもっと生活に取り込んでいきたいものです。わたしはいつ、どこででも、わたしを必要としている隣人に出会うことがあるのです。いつ、どこででも、わたしを必要としている人がいるなら、隣人になってあげよう。その心構えがあれば、何かの一定の枠に隣人を閉じ込めずに、もっと積極的に自分を役立てることができるようになるでしょう。
イエスはわたしたちに、「もっと自分を役立てることができる考え方があるよ」「もっと人を思いやり、愛することのできる考え方があるよ」と招いています。「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」イエスのことばは、もっと人を愛することのできる人になるための「最高の招き」「最上の招き」なのです。

年間第 16 主日(ルカ 10:38-42)

主日の福音 13/07/21(No.660)

年間第 16 主日(ルカ 10:38-42)

イエスの話に聞き入る時を空けておく

ここ 15 年ほどのわたしの経験から、荷物は片手で持てる分量になるように心がけています。この考えにたどり着いたのは、巡回教会に泊まりがけで出掛けることがきっかけになっています。
これまで主任司祭として３つの小教区に赴任しましたが、太田尾小教区では間瀬教会に出掛ける時、伊王島の馬込小教区では高島教会に出掛ける時、ここ浜串小教区では福見教会に出掛ける時に、荷物を両手に抱え、自分で自分にイライラしながら移動していたのです。
特に泊まりがけの巡回教会訪問で痛いほど分かったことは、荷物をいっぱい抱えていっても、全部使うことはないし、本教会の司祭館の鍵を閉めて出るとか、雨の日に傘を差すとか、車に乗り降りするとか、巡回教会の司祭館の玄関の鍵を開けるとか、いろんな場面で瞬間的に片手で持てなかったら、イライラが募り、何の得にもならないと感じたのです。
そこで、自分の行動を整理して考えてみました。本当に、両手一杯の荷物が必要だろうか。どうしても必要なことが、そんなに山のようにあるだろうか。あれもこれも、欲張って持ち出そうとしているのではないか。
考え抜いた末にたどり着いたのは、「荷物は、片手で持てる程度に収めよう」ということでした。
まったく同じ事が、仕事についても言えると思っています。両手に抱えきれないほどの仕事というのは、最初から背負いすぎであって、片手に持てるくらいの仕事に減らした方が、きっと仕事もはかどります。
さて今週の福音朗読ですが、マルタとマリアの姉妹の物語が選ばれました。せわしく立ち働いているマルタのことを、わたしは他人事のように見ていましたが、今はマルタはまさに自分のことだと思います。
「いろいろのもてなしのためにせわしく立ち働いていた」（10・40）マルタは、まさに両手いっぱいの仕事と格闘し、注意力散漫になり、イライラを抱え、とうとうイエスに不平を述べるのです。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」（同 40）
興味深いのは、マルタはこの言葉を、「イエスに近寄って言った」（同 40）ということです。おそらくマルタは、物理的にも精神的にも、イエスから遠くにいた、イエスの思いから遠ざかっていたのかもしれません。
そこで、わたし自身の経験を重ねて考えるのです。もしマルタが、例えて言えば片手が空くくらいのもてなしで抑えていたら、妹マリアのことでイエスに不平不満を募らせずに済んだことでしょう。両手一杯のもてなしを冷静に見つめ、本当に、これだけのもてなしが必要だろうか、どうしても必要なことが、そんなにたくさんあるだろうかと考えたなら、イエスから遠く離れない場所、よくイエスの話が聞ける状態で、もてなしをできたことでしょう。
マルタとは正反対の態度を取ったのがマリアです。「マリアは主の足も

とに座って、その話に聞き入っていた」（10・39）とあります。ここには書かれていませんが、わたしは、マリアがそれほど気が利かない妹だとは思えないのです。お茶と煎餅くらいは、マリアも手元に持っていたかもしれないからです。
つまり、片手間でお世話できるくらいのもてなしは、用意できていたかもしれない。マリアは、もてなしは片手が空くくらいにして、本当に必要なことは何だろうかと、考える余裕を手に持っていたのです。
イエスは、マリアの態度を褒めました。わたしたちはマルタとマリアの姉妹の、どちらが優れているかと考えがちですが、マルタもマリアも、わたしは１人の人間の持つ二面性と考えることも可能だと思います。
わたしたちは、両手に余るほどの物や仕事や思いを抱えて、そのためにイエスから心が引き離されていることがあります。片手が空いていないので、冷静に自分を見つめることができないことがあるのです。そうなってしまうと、つい今の自分の置かれている状況に不満を抱き、だれかのせいにしたり、だれかを攻撃したりするわけです。
そうではなく、どんなに忙しくても、片手が空くくらいにしておくと、周りがよく見えて、自分が抱えている物や仕事や思いは、すべて必要な物だろうか、本当に必要なものって、そんなにたくさんあるだろうか。いつも生活の中心にイエスを置いて、イエスから離れない状態で、物事を見つめることができると思うのです。
イエスは、マリアの態度を褒めました。マリアという人を褒めたというよりも、マリアのように、イエスの近くにいられる状態、どんなに忙しくても片手は空いている状態に留まることを褒めたのだと思うのです。
片手が空いているとは、どんなに忙しくても生活の中で祈りをする空きがあることだったり、どんなに忙しくても教会とのつながりを保ったりすることです。
両手に抱えきれないほどの仕事、両手に抱えきれないほどのもてなしは、みずからをイエスから遠く離れたものにしてしまいます。すると、ストレスやイライラがたまり、不平不満がこぼれることになるのです。
どんなに忙しくても、片手は空いている状態をお勧めします。イエスの話に聞き入るだけの時間と都合を空けて、毎日を過ごしましょう。そうすることで、「ただ一つの必要なこと」をイエスが語りかけ、教えてくださいます。
そしていつかは、イエスを知らない人に「あなたも、良い方を選ぶことができます」と、自分の生活を紹介できるように、ミサの中で恵みを願いましょう。

年間第 17 主日(ルカ 11:1-13)

年間第 17 主日（ルカ 11:1-13）

粘り強さがわたしたちには必要

いよいよ、夏休み中のこどもの大きな行事であるドッヂボール大会の日を迎えました。子どもたちには、わたしの釣りの経験を踏まえて、粘りの必要性を説きたいと思います。粘り強く、１点を取りにいく試合をしてください。これで、わたしの釣りの話ができる口実ができました。
金曜日に釣りに行きました。帰ってきた時間は昼２時頃だったと思います。金曜日の満潮の時間はおよそ 11 時で、満潮になる前の時間と、満潮から潮が下げ始める時間にイトヨリ釣りをしました。前半戦は思ったほど釣れなかったのですが、後半みるみる挽回して、イトヨリは全部で 18 匹釣りました。ボートを繋ぐ時に、ボートの係船場で海水浴していた子どもたちに魚を数えさせたので、間違いありません。
前半うまくいかなかった時、諦めてしまったり、いつまでもくよくよしていると、勝負に勝つことはできません。後半、きっとうまくいくと自分に言い聞かせて、みんなでそのことを確認して、後半戦に臨む。これが大切です。わたしも、後半戦はきっとうまくいくと自分に言い聞かせて、１匹ずつイトヨリを積み重ねていきました。
ドッヂボールの試合でも、１点が試合を分けます。１点差というのはちょっとした気持ちの持ちようでどちらのチームにも点数は転がります。その、ほんの僅かの差を勝ち取って決勝リーグに上がりましょう。あとで悔しがってもどうしようもないのですから、粘り強く、１点にこだわって、試合をものにして欲しいと思います。
さて福音朗読は、弟子たちがイエスに祈りを教えてくださいと願い、主の祈りを教えてもらうところから始まります。主の祈りを教えたイエスは引き続きたとえ話を弟子たちに語りました。続けて話されたのですから、主の祈りを解説するたとえだと考えてよいと思います。
真夜中に、友人がパンを三つ貸してくださいとお願いに来ました。友人は、願いがかなうまで粘り強く頼み込みました。この粘り強い態度が、主の祈りを唱える時に必要だと、イエスは言いたいのではないでしょうか。
「粘り強さ」というのはとても大切です。わたしは船釣り用の竿を２本持っていますが、イトヨリが釣れそうな場所に行って、魚がエサに食いつき、「よっしゃ」と思って合わせを入れ、リールを巻き初めてしばらくすると「スポッ」と魚が抜ける。最初のうちそういうことが何度かありました。
魚が必死に抵抗すると、竿に粘りがない場合、釣り逃がすことがあるわけです。わたしは竿の問題ではないかと思い、それ以後、もう少し粘りのある竿で釣るようにしたら、魚が抜けるミスがぐっと減りました。ガッチリ合わせたつもりでも、粘りのない竿ではみすみす取り逃がしてしまいます。もしそれでも釣り逃がすのであれば、腕のせいです。
主の祈りについても同じです。祈りの前半部分は御父に祈っていますが、

たとえば「み国が来ますように」と祈りながら、この世界の状況がそれとはほど遠いと感じても、諦めてはいけないと思うのです。御父の思いが行き渡り、平和と愛に満ちた国は、わたしたちが粘り強く祈る限り、いつかその通りになります。今日祈ってかなわなかったから諦める、希望を捨てるというのは、主の祈りを教えたイエスの望みではないのです。
また、主の祈りの後半は自分を含む隣人すべてに対する願いですが、これこそ一つひとつが、粘り強く祈ることを必要としている祈りではないでしょうか。「毎日与えてください」と願う人は、毎日、粘り強く祈る必要があります。わたしたちの罪の赦し、また自分に負い目のある人のゆるし、誘惑から逃れること。どれも、うまくいかなかった瞬間からつい諦めてしまおう、希望しても無駄だと考えがちです。
すぐに答えが返ってこない長いトンネルのような道でも、粘り強く努力する、粘り強く願い求めるその先にしか、答えはないと思うのです。「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」というイエスの勧めは、粘り強く願い、簡単に諦めるなということをとても分かりやすく教えているのではないでしょうか。
ドッヂボールの試合に出る子どもたち。１点差で勝つか負けるかは、数秒の違い、場合によっては１秒で結果が変わるかもしれません。１秒で相手を１人倒すとか、最後の１秒で球をよけて内野の人数を減らさなかったとか、そういうほんの数秒で決まるかもしれません。
本当に粘り強く、最後の１秒まで、自分のしなければならないことを努力してください。上級生は相手を１人でも多く減らす。下級生は最後まで内野に残る。すると、すばらしい結果がその先にあると思います。
主の祈りは、粘り強く祈り求めるだけの十分な価値があります。御父は願い求めるわたしたちに聖霊を与えてくださるからです。聖霊は、被造物のわたしたちが本来願っても手に入らない賜物です。被造物のわたしたちが、聖霊である神さまをくださいと願っているのですから、本来ありえない話です。
けれども神は、わたしたちの粘り強い祈りを聞いてくださり、造られた者である人間に、聖霊を与えてくださいます。人間は聖霊の賜物を受け取るには不十分な存在ですが、神の溢れる思いは、不足のあるわたしたちを覆って余り有る恵みをくださるのです。粘り強く祈り求める十分な理由があります。
そこで最後に、わたしたちの日頃の祈りが、どのような祈りになっているか振り返りましょう。粘り強い祈りになっているでしょうか。粘りのない素材は、力が加わるとポキッと折れてしまいます。粘りがないために、祈る心が折れたりしていないでしょうか。もう一度、粘り強く祈ることを今週学びましょう。そして、わたしたちの粘り強い祈りに必ず答えてくださる神に信頼して、今週一週間に入ることにしましょう。

年間第 18 主日(ルカ 12:13-21)

主日の福音 13/08/04(No.662)

年間第 18 主日（ルカ 12:13-21）

神を喜ばせる考え方に目を留める

６月の下旬から、浜串の集落をてくてく歩いています。だいたい歩数計で１万歩です。初めは平地を歩いていたのですが、７月の下旬からは坂道を歩こうと、教会前のバス停から後浜串バス停までを利用しています。まだ始めたばかりなので、見た目の体型はまったく変わりません。
６月 24 日から８月３日まで約 40 日間、１万歩に達しなかったのは３日間だけでした。坂道は平地を歩くときよりきついです。このきつさを乗り越えたら、11 月くらいから走り出して、来年１月のマラソン大会には怖いものなしの練習を積んで出場する予定になっています。全部、頭の中だけの計算ですけど。
平地を歩くには問題ないのですが、坂道で１万歩稼ぐのは一苦労です。歩き始める時に「後浜串までの坂を５往復すれば簡単に１万歩だ」と頭では考えますが、２往復したころには最初の決心は吹っ飛んでいます。「今回はやめとこう。平地を歩いて辻褄を合わせよう」となるのです。せいぜい３往復が関の山で、まだまだ心の鍛錬ができていないです。
今週、愚かな金持ちのたとえ話が語られています。たとえ話に出てくる人物は、この世を渡る人としてはとても賢い人物でした。金持ちになったわけですし、畑の作物は豊作に恵まれています。やりくりの上手な人でなければ、これほどの成功は望めないでしょう。
この人はとても良い考えを思い付いたつもりでした。「こうしよう」と言った時、「いいことを思い付いた」と考えたはずです。ところが、彼には残酷な運命が待っているのです。「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」（12・20）
彼の取った行動は、なぜ神に「愚かな者よ」と切り捨てられたのでしょうか。一言で表すと、「神を喜ばせなかったから」です。彼の「いいことを思い付いた」というのは、「自分を喜ばせる思い付き」であって、「神を喜ばせる」ことには少しもつながらなかったのです。
「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。」今夜命が取り上げられるというのは極端だとしても、わたしたちもまた、神に命を与えられ、神にいのちを取り上げられる者です。その最終告知の時までに、「自分を喜ばせること」ばかり思い付いたのか、「神を喜ばせること」を思い付いたのかは大きな運命の分かれ目になるのです。いつか命は取り上げられるのに、その神の前で「自分を喜ばせる思い付き」しか報告できないとしたら、どんなに愚かな人生でしょうか。
わたしは、「神を喜ばせる思い付き」が浮かんだことがあるでしょうか。中田神父は坂道で足腰を鍛えようと決めてから、日曜日の説教を考えてみることにしました。「自分を喜ばせること」を考えながら３往復目に入ろうとしても、ぜんぜんうまくいかないからです。むしろ、３往復目以降日曜日の福音朗読をどう話すかを考えれば、目の前のきつい坂のこ

とを少し忘れることができます。しかも、そのことで「神を喜ばせる」ことができます。一挙両得です。
ただ単に坂道の訓練をしても、たとえ５往復できたとしても、神は喜んでくれないかもしれません。けれども、訓練の途中で日曜日の説教のことを考えているなら、神を喜ばせるのではないでしょうか。引退したある先輩の神父さまが、「わたしは説教を考えるのに行き詰まったら、走りに行って考える」と言っておられました。わたしは「できるはずがない」と思っていましたが、今はその考えが少し分かる気がします。
さて、皆さんは今週の「愚かな金持ちのたとえ」をどう受け止めるでしょうか。両親、また祖父母が、子どもたちを眺める時、「子どもたちを喜ばせる」ことを考えるでしょうか。それとも、「子どもたちを神が喜ぶ道に向かわせる」ようにするでしょうか。単に「子どもたちを喜ばせる」だけでは、自分を喜ばせるのと同じです。それは、神の前に賢い思い付きではないわけです。
むしろ、子どもに「神さまを喜ばせる何か」を思い付かせ、そのために協力するようにすれば、神の前に豊かになります。イエスの答えはこうです。「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」（12・21）
福音書をひもとくと、あちこちに「神を喜ばせる人」が登場します。しかも、その人たちは難しいことを言っているのではなく、ふだんの生活の中に神を喜ばせる方法を見つけています。
たとえば、「シリア・フェニキアの女」は、娘から悪霊を追い出してもらいたいと願う時に、「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」（マルコ 7・28）と答えました。
また、百人体長が僕をいやしてもらいたいと願う時に「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」とふだんのありのままの姿を述べました。
どちらの場合も、イエスはその立派な答えを聞いて、願いを聞き届けてくださいました。難しい言葉を並べたのでも、どこからか借りてきた言葉を並べたのでもありません。ありのままの生活から、彼らは神を喜ばせたのです。
わたしたちも、自分を喜ばせることばかりにとらわれないで、神を喜ばせる毎日でありたいと思います。命をいただいたかたに報告できるのは、どれだけ神を喜ばせるために工夫したか、それだけです。それは、どこか遠くにあるチャンスではなく、生活のただ中にあるのです。自分を喜ばせる見方からは、神さまを喜ばせることは生まれません。
神を喜ばせるような捉え方に目を留め、神の前に豊かに生きることができるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

主日の福音 13/08/11(No.663)

年間第 19 主日（ルカ 12:32-48）

わたしたちは神のいのちを託された僕

８月９日、68 回目の長崎原爆の日に、長崎大司教区主催で行われる平和祈願祭の取材のために式典に出席してきました。今年はたくさんの司教様がおいでになっておられました。
教皇庁の正義と平和評議会議長のタークソン枢機卿、駐日バチカン大使のジョセフ・チェノットゥ大司教、広島、福岡、大分の司教、平山名誉司教もミサに出席していました。これだけの教会指導者が集まるということは、長崎から平和のメッセージを発信することが、とても大きな意味があることを証明しているのだと思います。参加できてよかったです。
毎度お恥ずかしい話ですが、先週の月曜日、ケータイを水に濡らしてしまいました。わたしが車を洗うと、決まって雨が降るのですが、月曜日はまさかと思っていました。午前中福江に船で渡って後輩司祭たちとソフトボールの練習をして帰ってきていましたし、雨の気配は全くなかったので、給油をしてもらってから自分で車を洗い、直後にウォーキングに出発しました。
歩数を数えるためと、緊急連絡のために、わたしはケータイをポケットに入れて歩くのですが、10 分も経たないうちにしとしと雨が降り出しました。それでもまぁ、何とか持ちこたえてくれるだろうと思っていたのですが、実際には雨が入り込んで濡れてしまい、臨終を迎えました。
しかたなく浦桑のドコモショップに相談に行ったのですが、浦桑に向かう間も、店で説明を受けている時も、「どうしてすぐに歩くのをやめて、ケータイを司祭館に置きに行かなかったのだろう」と、そのことが悔やまれて、店員の説明はまったくうわの空でした。
わたしはこれまで少なくとも３回、ケータイを水に濡らしてダメにしています。その苦い経験から学んで、今回はすぐにケータイを持ち帰るべきだったのです。めったに自分で洗わない車を、なぜあの時だけ洗ったのでしょうか。しかも玄関近くにある鉢植えにもたっぷり水をあげたりして、天気もビックリしたのかもしれません。本当に痛い目に遭いました。
わたしの苦い経験、今週の福音朗読にも繋がってくるのですが、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」（12・40）とあるように、わたしたちのいつもの心がけを、わたしたちの主は突然確かめに来るのです。その人の心構えが不十分であれば、厳しい結果が待っています。今回わたしは、用意が足りなかったために、ケータイを失う結果になったのでした。
わたしたちの主である神は、時と場所を問わずに、わたしたちの用意が万全であるか、確かめに来ます。それは、わたしたちが主である神の僕だからです。わたしたちは、主である神に信頼され、留守を預かっている僕のような存在なので、時と場所を問わずに、わたしたちの心がけをご覧になるのです。

もしわたしたちが、主である神と何の関わりもなかったら、わたしたちに用意ができているか確かめたりはしないでしょう。わたしたちの用意が足りなくても、咎められることはないでしょう。厳しい言い方ですが、信頼もされていないから、要求されることもないということです。
わたしたちが主である神から託されているものは何でしょうか。それは神のいのちです。わたしたちは洗礼によって神のいのちを与えられ、この神のいのちの豊かさを失わないように、たえず用意しておくことを期待されている者です。わたしたちが預けられた神のいのちにいつどんなときでも備えができていれば、主である神はそれを確かめ、わたしたちをもてなしてくださいます。しかも、僕と主人の立場をすっかり入れ替えて、あたかもわたしたちに仕える僕であるかのように振る舞って、もてなしてくださるのです。
一つ、考えておくことがあります。「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される」（12・48）ということばです。これは、だれのことを指しているのでしょうか。
わたしたちは皆、「神のいのち」を託された僕ですが、ある人々は多くの神のいのちに関わっています。たとえば、洗礼の時に神のいのちがもたらされますので、洗礼に立ち会う司祭・代父母・両親などは自分に託された神のいのちのほかにも、多くを託されている人です。
ですから、司祭はもちろんのことですが、代父母の経験を何度か果たしている人、洗礼だけでなく堅信の秘跡も、神のいのちに関わる役目です。こうした役割を任された人は、「多く任された人」ではないでしょうか。このような役割を与えられた人は、多くの神のいのちに配慮することを期待されるでしょう。「わたしは何人もの代父母を引き受けた。彼らが神のいのちをどのように扱うか、彼ら自身と一緒に責任がある。」こんな心構えで、毎日を生きて欲しいと思います。
ここからはついでの話ですが、今日夕方に、消防避難訓練をします。神がお住まいになる見える建物である教会堂が、火事や災難から免れるよう信徒皆が配慮すること。これも、「あなたがたも用意していなさい」に通じる行動です。今日の夕方５時から消防避難訓練をしますので、できるだけ多くの人が訓練に立ち会って欲しいと思います。
わたしたちは主である神の僕です。主がいつやって来ても、信頼されている僕として振る舞えるように、託された神のいのちにつねに配慮して日々過ごしましょう。そのための知恵を、ミサの中で願いましょう。

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

主日の福音 13/08/15(No.664)

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

主の目に留まる尊い生き方

この前、とある教会の中学生をボートで釣りに連れて行きました。今年の４月から神言会の神学生として頑張っている子どもです。釣りをする場所は前もってボートで出かけ、舟竿が海中に突っ込むくらいのアタリがあった場所です。その際登山用の携帯用 GPS を持って行っていたので、周りに船がいないことを確認して、緯度経度を GPS に記録しました。ここなら、神学生を喜ばせることができると思っておりました。
当日神学生を迎えに行き、前回 GPS に記憶させた場所にまっすぐボートで向かいました。ところが、わたしが記憶させておいた場所に、何と漁師のウキが置いてあったのです。あれだけ周りを気にしてこっそり持ち帰ったＡ級ポイントだったのに、どこで見ていたのでしょうか。
それでも、イトヨリはわたしたちを待ってくれていました。到着してすぐに、パタパタと２人とも連続でイトヨリを釣ることができて、船頭の役割を果たすことができ、ホッとしております。
聖母の被昇天の祭日を迎えました。8 月 15 日が聖母マリアの祝日であることについて、歴史的に次のように言われています。５世紀のエルサレムでこの日に祝われていた神の母マリアの記念は、６世紀には、マリアの死去の日として東方教会で祝われるようになりました。
マリアの死去は、彼女が天に召されたことと永遠のいのちのうちに誕生したこととして記念されていたようです。やがて７世紀半ばに西方教会にも受け継がれ、教皇セルジオ一世（在位 687～701）は、徹夜祭やハドリアヌス教会からサンタ・マリア・マジョーレ教会までの行列などで盛大に祝っています。
マリアの被昇天の名で知られるようになったのは、８世紀末になってからです。後に 1950 年のピオ十二世の教義宣言に至るまで、マリア信心の深まりと同時に次第にこの日を特別な日として祝うようになりました。ピオ十二世は自身の教皇令 Munificentissimus Deus の中で次のように宣言します、「われわれの主イエズス・キリストの権威と、使徒聖ペトロと聖パウロの権威、およびわたしの権威により、無原罪の神の母、終生処女であるマリアがその地上の生活を終わった後、肉身と霊魂とともに天の栄光にあげられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布告し、定義する」（『カトリック教会文書資料集』3903）。
わたしも、教会が聖母の被昇天を祝うことに大賛成です。マリアが、地上の生活を終わった後、体も魂も天に上げられたと考えるのは、マリアにふさわしいことだと思うからです。２つの理由を考えました。
１つは、マリアが主である神の御心を知って生きていたからです。朗読箇所で、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、エリサベトに挨拶に行きました。マリア自身もこれから大切な時期を迎えるのに、自分のことをいちばんに考えるのではなく、エリサベトのことを心配しました。エリサベトは不妊の女と言われていましたが、今や身ごもって６ヶ月に

なっていました。エリサベトは子を宿せなかった時期が長かったので、人々から低く見られ、自分のことを恥ずかしく思っていた女性でした。マリアは、いち早くこのエリサベトを訪ねていきます。それは、主である神の御心を自分の行動で示すためでした。つまりマリアは、神がエリサベトを見捨ててはおられない、彼女のように身分の低い者に神は目を留めてくださる。そういうことを知らせに行くためでした。マリアは主の御心をよく知って生活していたのですから、いち早く体も魂も天の栄光に挙げられることは、神の望みにかなうことだと思います。
２つ目に、マリアは御子イエスの最大の理解者でした。幼子イエスがヘロデに命を狙われ、エジプトに避難した時から、イエスの十字架の苦しみをそのそばで受け止めた最期の場面まで、人類の中でイエスの思いをもっともよく理解し、受け止めることのできた人物でした。いつもマリアは、イエスの近くにいて、離れることなく生涯を過ごしました。
このような方ですから、主である神がマリアをいち早くイエスの側にいることができるようにされた、しかも体も魂もイエスの側にいられるようにしてくださったのは、イエスの最大の理解者であったマリアにもっともふさわしいことだったと思うのです。
マリアに与えられた栄誉は、わたしたちの目標でもあります。マリアが生涯追い求めた２つの姿をわたしたちが見倣うなら、わたしたちにも神は目を留めてくださるはずです。すなわち、主の御心を知って生きること、イエスの理解者になろうとすることです。
もちろんマリアのように最上の形で２つの姿を生きることはできないにしても、これら２つを生き方の基本にすることは十分可能です。わたしたちには、神が語りかけたことを知るために聖書が与えられています。聖書に親しみ、日常生活のさまざまな出来事を見て、関連する神のことばがわたしたちの中からわき出てくる。そのような生活は可能です。
また、聖書に親しむ結果として、わたしたちが何かを判断し、決断する時に、「イエスだったらどう判断し、決断するだろうか」と、思いを重ねることもできるようになるでしょう。これはまさに、イエスの理解者となる生活です。わたしたちは聖母の被昇天をたたえながら、わたしたちにも目を留めてくださる神をたたえて生きることが可能になるのです。
最後に、朗読された福音の箇所でだれも気づかないかもしれない結びのことばを取り上げて終わりたいと思います。「マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。」（1・56）これはつまり、三か月留まることが大事だということです。
わたしたちは何に三か月留まるのでしょうか。聖書のことばが体からわき出すくらいに聖書に親しみ、イエスだったらどう考えるだろうかと判断できるようになる。そのために、同じ努力を三か月続けてみてほしいのです。三か月は、何かを見える形にする一つの期間だと思います。
マリアの生き方は、神によって天に引き上げられました。わたしたちも、自分の生き方を神の目に留めていただけるよう、マリアに見倣って生きていきましょう。そのための恵みをミサの中で願いましょう。

主日の福音 13/08/18(No.665)

年間第 20 主日（ルカ 12:49-53）

火によって変えられ火を熱源として持つ

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（12・49）今週は、イエスがこの地上に投げる「火」について、考えてみたいと思います。

イエスがもたらす「火」を考えるために、「火」についてすでに知っていることをつなぎ合わせたいと思います。まず、「火」は燃えている状態を指しているので、何か触れようとするものを燃やす力を持っています。海外では、山林で自然に発火し、火災が発生することがあります。

また、火を使って、物の形を変えることができます。鉄は、火によって熱せられ、ものすごい熱さの溶けた状態から、いろんな形に変わっていきます。刀を作る鍛冶職人は、火を使って思い通りの刀を作り上げます。

また火は、熱も持っていますので、近くにいる人から遠くにいる人まで、熱を伝えます。適切な距離にいれば、熱の恩恵を受けますが、近すぎるとやけどをしたりします。その他にもあるかも知れませんが、おおまか、こうした特徴を火は持っているわけです。

今挙げたような特徴を当てはめて、イエスがもたらす「火」を考えてみましょう。イエスが投ずる火に、触れようとするものを燃やす意味合いはあるでしょうか。聖書の出来事を探ってみましょう。

まず思い出されるのは、聖霊降臨の出来事です。使徒言行録第 1 章で、聖霊が弟子たちに注がれた時、炎のような舌の形をして、弟子たちに聖霊が降ったとされています。

ここでは、ものを燃やす火ではありませんが、弟子たちの心を燃やして、宣教へと駆り立てる火として働いています。イエスの投ずる火は、人の心を燃やす働きがあります。

また、物の形を変える火の働きはどうでしょうか。ここでは、いくつかの秘跡を考えてみましょう。洗礼の秘跡は、人を神の子とする働きがあります。また堅信の秘跡は、洗礼の恵みを強め、聖霊の七つの賜物で大人のカトリック信者に強めます。さらに叙階の秘跡は、もう一人のキリストと言われるほど、イエスの生き方、働き、恵みを人々に分け与える者に変えてもらいます。

ここまで考えると、イエスの投ずる火は、秘跡の恵みとなって人を今までとは違った存在に変える力を持っていることが分かります。他のどんな力も、人を神の子に変えることはできません。イエスが、「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」と仰ったことは、秘跡の中でとくに当てはまるかもしれません。

火は、同時に熱も伝えることを考えました。イエスが投じる火に、同じ特徴は見られるでしょうか。イエスによって火が投じられ、その火によって変えられた人が、だれかにその熱を伝えることができます。近

くにいる人はより大きな熱意を伝えますし、遠くにいる人にも、何が起こっているのか知りたいと感じるような熱意を伝えることができます。イエスの投ずる火は、熱を伝えることも当てはめてよいと思うのです。

ところで、イエスが投ずる火は、「分裂」をもたらすことにもなると仰います。この「分裂」は、熱を伝えるたとえを考えると少し分かりやすくなるかもしれません。もし、家族の中でイエスの火によって熱意を与えられ、イエスに変えてもらった生活に喜んで身を置く人と、そうでない人がいるとしたらどうでしょうか。

イエスの火を受け入れた人は、熱心にイエスの生き方を取り入れていきますが、同じ家族の人がイエスの火を耐えられない熱さだと嫌うなら、そこにはどうしても分裂が生じるのではないでしょうか。

分裂は、イエスの火を喜んで受け入れるか嫌うかで生じます。イエスは、分裂が生じることを予見しています。イエスの火を嫌って、分裂した人々はどうなるのでしょうか。とくに家族の中で、分裂してしまった場合はどうなるのでしょうか。

わたしは、イエスの火を受け入れるために、長く時間を必要とする人もいると考えました。家族の中でさえ、今はイエスの火を受け入れられない人が現れて、分裂してしまいます。けれども、イエスの火はどんな人にも必要な火です。その人の中で熱源となって、その人を動かすからです。

今は受け入れられない家族がいても、時間をかけて、イエスの投ずる火によって、変えられ、動かされることを願いたいと思います。「父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。」（12・53）とあります。分裂は辛い現実ですが、距離ができたことが、イエスの火を理解できるきっかけになるかもしれません。

わたしたちの心と体は、イエスの投ずる火によって神の望む形に変えられ、イエスの火が自分を動かす熱源となります。イエスの投ずる火によって生かされていることに感謝できる人でありたいと思います。そして、周りの人にイエスを感じさせる熱源となれるように、このミサの中で祈り求めましょう。

年間第 21 主日(ルカ 13:22-30)

年間第 21 主日（ルカ 13:22-30）

常々その戸口を出入りすれば狭くない（2004 年を参照）

わたしたちは、いつも時間と場所の中に置かれて暮らしています。このわたしたちから切っても切り離せない時間と場所の問題ですが、もう少し考えると、「過ぎた時間」「今」「将来の時間」の三つに分けられます。その中で、いちばん考えなければならいのは、「今の時間」です。これは誰が考えてもそうなるのではないかと思います。
「過ぎた時間」「過ぎたこと」は、変えることができません。また、「将来起こること」を前もって用意することもできません。せいぜいできることと言ったら、今の時間をより良く生きるということです。この基本中の基本について、今日の福音朗読は考えさせてくれると思います。
ある人がイエスに尋ねました。「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」。この人が尋ねたのは「将来のこと」「将来起こること」です。イエスは神の子として、この質問に直接答えることもできたでしょうが、未来のことはわたしたちにはどうにもできないことです。
わたしたち人間にとっていちばん大切なことは「今の時間」なのですから、イエスは「救われる者」について、「今の時間の中で考えるべきこと」を答えとして示してくださいました。「狭い戸口から入るように努めなさい。」つまり、今の時間にできること、今考えておくべきことこそ、あなたにとって必要ですと言いたいのです。
「過ぎた時間」あるいは「将来のこと」よりも「今の時間」が大切なのはすでに考えましたが、「今の時間にできること」はどんなことでしょうか。大きく二つに分かれると思います。一つは、「目の前にあることを今おこなってみる」ということ、もう一つは、「今は取りかからず、後回しにする」ということです。
わたしたちの経験で十分に分かっていることですが、後回しにしたことは、結局どうなるのでしょうか。当然のことですが、後回しにしたことは消えてなくなるはずもなく、どのみち後でしなければなりません。そしてしばしば、「あの時しておけばよかった」と言うのです。
後回しにした経験をお持ちの方は、イエスの言葉がよく分かるのではないでしょうか。「狭い戸口から入るように努めなさい」。ある時わたしたちは、すべき事を後回しにしました。後回しにしたことは消えてなくなるどころか、更に問題が大きくなってのしかかってきます。時には取り返しがつかないことさえあります。
人間の救いは「将来起こること」に違いありませんが、そのために何かができるとすれば、それは今しかないのです。だから、「どちらかを選ばなければならないのであれば、狭いほうを選びなさい」と強く勧めているわけです。
主人に締め出しを食った人が食い下がります。「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、わたしたちの広場でお教えを受けたのです。」（13・26）ですがこの人は食べたり飲んだりしている時に話してくれた「勧め」

を気にも留めていなかったのかも知れません。教えを受けた時に、「そんな面倒な教えは今のわたしには関係ない。後で考えよう」と言って後回しにしたのでしょう。「今できること」と、「今できるけれども後回しにしよう」という気持ちの中で、狭いほうを選ばなかったのです。
わたしたちの生活はどうでしょうか。今積み上げないといけない努力を、後回しにしてはいないでしょうか。今積み上げることができるのに、そこから目を背けてはいないでしょうか。
わたしは皆さんの勉強のことや仕事のことに口を挟むつもりはありません。ですが、任せられた信徒の牧者として、「こんな態度は『今できること』を『後回し』にしていることですよ、その責任は、ほかでもないあなたが引き受けるのですよ」と言い続けなければなりません。また、中田神父みずからが生活による証しを立てなければなりません。
たとえば、わたしたちは一日に三回食事をします。どのみち、食べるのですが、食前の祈りをするかしないかは、できることを今するのか、後回しにするのかの境目なのではないでしょうか。どうせ食べるのです。ですがしばしば、わたしたちは狭い戸口を避けようとするのです。
一日の終わり、目を閉じない人は誰もいません。どのみち目を閉じて、眠りに就くのですが、わたしは狭い戸口から入るように努めているでしょうか。疲れてヘトヘト、今日は何もできない。そういう日もたまにはあるでしょう。イエスはそんな疲れた人、重荷を負う人を責める方ではありません。イエスの言葉をよくよく考えれば、「狭い戸口から入るように努めなさい」「入るように努めなさい」です。「狭い戸口を通れない人はその時点で救われません」とは仰っていないと思います。
日曜日のミサ。どんなに忙しい人でも、二週に一回とか、月に一回は休みを日曜日に振り替えることはできると思います。できたのにしませんでした。このようなことが多々あるのではないでしょうか。
今何をするか考える時、後回しにしようと考えるか狭い戸口から入るように努めるか。いつもわたしたちはどちらかを選んで生きています。何かを後回しにした時、それがそのまま過ぎた時間の出来事となります。今しなかったことで、取り返しがつかなくなることもあるのです。
子供からお年寄りまで、今できることがあると思います。ありがとうという言葉を口に出して言うこと、お世話する人が愛情あるひと声をかけることなど、今できることは何か見つかると思います。
狭い戸口から入るように常々心がけている人は、今できることを一つずつ引き受けて、それを積み重ねていく人です。神はその人をご自分の懐に入れてくださいます。狭い戸口から入る人は、今の生活の中で、神に守られて生きる幸せを感じることができるのではないでしょうか。
教会を通して示される神のすすめを、わたしたちの選ぶべき戸口として受け取りましょう。ひとりで引き受けるのではありません。そばにいてくださるキリストと引き受けていくのです。そのことをしっかり感じ取るためにも、ミサの中で照らしをいただくことにしましょう。

主日の福音 13/09/01(No.667)

年間第 22 主日（ルカ 14:1,7-14）

神の前に自分を無にする人は高められる

今年に入って３回、鍋を焦がしました。すべて、味噌汁の鍋です。いちばん最近は８月 26 日の月曜日です。朝ご飯を食べる時に、味噌汁の鍋に火をかけて、温まるまでと思ってテレビを見ていたら味噌汁のことを忘れてしまい、最後にデザートでも食べようかなと台所に戻ったら、煙が充満していました。
隣の台所で火をかけていながら、忘れてしまうのですから、あまり気にもかけていないのか、テレビを見ていて気を取られているのか、いずれにしてももう火をかけながら食べるのは無理だと思いました。
鍋を焦がして、イエスのみことばを実感しました。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」（15・11）たぶん１度目、2 度目には「今度は失敗しない。するはずがない」と思っているわけです。でも、また失敗した。それは、人間のおごりや高ぶりを、神が低くする典型的な例だったのだと思います。
イエスのみことばは、神が人間を低くし、あるいは高めるということを教えてくれます。その上でわたしは、高ぶる人間を神が低くするのは、いつか神がその人を高めてくださるためではないか、そういうことを思いました。いつかすべての人を、神が高くしてくださる。そのために、高ぶる者を低くされるのではないかと考えました。
人間のおごり高ぶりというのは、ある意味終わりがないのかも知れません。いくら高慢な態度を取って失敗しても懲りない。場所が変わり、環境が変わると、今まで収まっていた高慢心が頭をもたげてくる。その繰り返しではないでしょうか。
そこで、高ぶることをやめようとしない人間を、神が低くするわけです。神が人を低くする時、人はそれから逃れることができません。そして、神が人を低くするのは、理由があるのです。
今テレビのあちこちで、かつて人気歌手だった人が再起を賭けている様子が取り上げられています。皆さんもどれかの番組で見たかも知れません。歌姫と言われ、宣伝しなくてもトップセールスを続けていた歌手でしたが、いったんすべてを失って、ゼロからのスタートとなりました。自分でお金を払って練習場所を見つけ、どんなに小さな仕事でも喜んで引き受けています。
復帰後も、周囲の厳しい目にさらされます。「あの子、クスリをやってた子でしょ」と陰口を言われたり、「だれ？あの人」と冷ややかな言葉を浴びせられたりしたそうです。それでも、前を向いて、もう一度歌う舞台に立っています。今の姿を見ていると、わたしは、神が今の姿に立ち直るためにいったんその歌手を低くされたのかなぁと思いました。
繰り返しますが、神が高ぶる人を低くされるのは、へりくだる体験をした後に、その人を高めるためだとわたしは考えています。神の目にかなう人に造りかえるために、高ぶる人を低くしているのです。神の目にか

なう人、へりくだる人に変えられたなら、神は喜んでその人を高く上げてくださるのです。ここまで話して、みなさんの中には「よきおとずれ8月号」を思いだした人もいるはずです。8月号の1面は、ユスト高山右近を取り上げた記事でした。ここで思い出すために、引用したいと思います。
（ユスト高山右近は）1553年摂津国は高山に生まれ、1615年フィリピンはマニラで閉じられた63年の人生。その後半の29年は追放の身だった。戦乱の世に身分ある家柄の子として生まれ、20歳で大名となり、下克上の熾烈な競争社会の中、もって生まれた才能で頭角を現し、時の権力者織田信長・豊臣秀吉・徳川家康が目をとめる存在にまで登りつめていく。成功者と目された若者の洋々たる前途は開けていた。
しかし、右近は人々の期待とはまったく違った生き方を見せていくことになる。伝えられたことを生きる信仰は、右近に「降りていく生き方」を選ばせた。34歳で大名職をはく奪、改易追放。世の力におもねない人。心細く生きる人を大事にし、礼を失せず、清さを求める人。そうして残ったのは、「十字架の死にいたるまで従順に生きる」お方を追い求める人の姿だった。こうして、いちばん低い所からいのちの方角を示す右近は、新たな輝きを放つことになる。神は、過酷な競争社会の中で信仰のために「負け組」に身を落とした右近を通して、ご自分の福音を差し出した。競い合うことの先に確かな幸せを求める現代社会――今、教会が右近を記念する理由がここにある。
右近はなぜ、あえて「降りていく生き方」を選んだのか。高山右近という生き方には何が宿っているのか。キリストの3つの神秘が右近の人生を包んでいたことがわかる。神が人の間に宿る「出会いの神秘」。み旨を求め続ける「苦しみの神秘」。そして、すべてがついえた闇と沈黙から生まれる「復活の神秘」。洗礼の恵みを徹底的に生きた時、ユスト高山右近という生き方になった。それはまた、「ワレラノムネ　アナタノムネトオナジ」と公言した信徒発見の教会が受け継いだ信仰でもある。
右近は遠い昔の人ではない。競い合う現代社会――降りて、仕えて生きる右近は今も確かないのちの方角を指し示している。
結局、「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」というのは、イエスがこの地上で最も低くされ、いのちの道を示したことで、父なる神に高められた、その同じ道を歩む呼びかけなのです。わたしたちがへりくだる生き方にいのちを見つけなければ、神に高めてはもらえないのです。
低くされ、へりくだる生き方を自分の生きる道と納得できるまで、神は何度でもわたしたちを低くするのでしょう。そして、心からへりくだる生き方を受け入れる時、十字架を背負って生きるわたしたちを御子イエスと同じように高めてくださるのです。
わたしの今の生活は、神に低くされる生活か、高められる生活か、考えてみましょう。わたしたちがいつも神に高めてもらう生き方を選び取るキリスト者でいられるように、ミサの中で聖霊の助けを願いましょう。

年間第 23 主日（ルカ 14:25-33）

どのような執着も捨てて敬老者になる（2012 年説教案参考）

今週、敬老者のためにミサをささげています。歳を重ねることは、人生に重みを増すことだと考えています。最近わたしは 3 月 12 日の誕生日を迎えるたびに、生まれ年のワインを 1 本購入して祝っています。生まれ年、つまり 1966 年（昭和 41 年）に生産されたワインですが、年を追う毎に探し出すのが難しくなっています。値段も、年に 1 回しか買えないくらいの値段になってきています。

たとえばこのワインのように、敬老者の方々の積み重ねた年月は、徐々に重みを増してくるのです。重みを増してきたのですから、周りの人はふさわしい敬意を払う必要がありますし、敬老者本人は、毎日の生き方が、より福音の勧めに沿った生き方となるように期待されていると思います。

そこで、与えられた福音朗読から、敬老者だからこそたどり着ける境地、敬老者に期待されている姿を拾ってみたいと思います。鍵となるのは、「〇〇でなければ、わたしの弟子ではありえない」という表現です。3 回繰り返されています。

「これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」「ついて来る者でなければ、わたしの弟子ではありえない。」「捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」繰り返すことで、どのような執着心も捨てて、イエスに従うよう求められています。

まず求められているのは、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら」ということです。家族や身内が、いちばんわたしたちにとって執着のもととなる相手だと思います。

家族や自分の命に執着しないということで、わたしは今でも、ある一人のお父さんを神さまのもとに送る告別の説教を思い出すことがあります。そのお父さんは定年まで造船所で働きましたが、定年を機に故郷の家に戻りました。ところが半年もしないうちに夜釣りに出かけたボートで転落し、命を落としたのです。

わたしはとても親しくさせてもらっていたので、その人の葬儀ミサに出席して説教するのは簡単ではありませんでした。いろいろ考えた中で、このお父さんは、家族の元に戻るための綱と、神の国に入るための綱の二つの綱のうち一つしか選べない難しい場面で、神の国に入るための綱を両手で掴んで、神にいのちを引き上げてもらったのだと話したのです。とても信仰厚い方でした。家族への愛着もあったでしょうが、神にすべてを委ねることを最後は選んだのだと思います。最後の最後まで、イエスに従う人生をまっとうしたのでした。

次にイエスが求めているのは、自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ」と言います。十字架は重荷です。初めから、避けて通り

たい重荷ですから、その十字架を背負ってイエスについて来るのは簡単ではありません。それでも、十字架を背負ってついて来る者に、イエスは目を留めてくださいます。

敬老者にとっての十字架は何でしょうか。すぐに思い当たるのは、記憶の衰えやからだの衰えではないでしょうか。今日お祝いを受ける敬老者の方々は、思い通りに生きることを少し控え、思い通りにならない頭と体を日々担ってこられました。それは、敬老者の立場で、十字架を背負ってイエスに従う生き方だと思います。考えようによっては十年前二十年前よりも、もっとイエスの望みに従って生きることができるようになっているのです。

最後に、「自分の持ち物を一切捨てないならば」と招きます。しばしば自分の持ち物は、努力して手に入れたもの、苦労して手に入れたものです。それらを捨てるのは大変勇気の要ることです。

自分の持ち物によって安心できていた人は、イエスが自分を安心させてくれるから、わたしの持ち物を手放すことができると、自分に言い聞かせることになります。年齢を重ねていかなければ、イエスが安心させてくれると納得するのは難しいでしょう。

ときには、どうしてわたしの持ち物を手放さなければならないのかと悩むこともあるかも知れません。けれども年齢を重ねて、思い通りにならない道は、イエスが模範を示した十字架の道なのだと理解できるようになります。わたしたちも、思い通りにならない道を通って初めて、意味深い信仰告白ができるようになるのだと思います。

今日のこのミサには、敬老者を祝う人々も集まっています。子供たち、敬老者を家族に持っておられる方、教会家族で敬老者のお祝いのために集まっています。敬老者を祝うわたしたちも、敬老者の生きたお手本から自分の振る舞いを見つめ直したいと思います。

敬老者が生き方で示す信仰に謙虚に耳を傾けることで、年配の方々を敬う人でありたいと思います。敬老者の方々と共に、イエスに従って歩む道を見つめ直しましょう。思い通りにならないことを数多く通り抜けた先に、輝く信仰者の生き方があります。

年間第 24 主日(ルカ 15:1-32)

主日の福音 13/09/15(No.669)

年間第 24 主日（ルカ 15:1-32）

イエスの導きのもとにまことの命がある

木曜日と金曜日にかけて、九州全域から集まった視覚障害者に情報を提供する施設の大会に参加してきました。今年は九州全域から 490 人の参加がありました。この大会は正式には九州視覚障害者情報提供施設大会と言いますが、今年は長崎県が主催になっていましたので、長崎県内で視覚障害者に情報を提供している２つの施設、すなわち長崎県視覚障害者情報センターと、わたしが代表を務める声の奉仕会マリア文庫が今回の大会の主催者となって２日間の大会を切り盛りしてきました。

ただ、主催した２つの施設と言っても、声の奉仕会マリア文庫と長崎県の施設である視覚障害者情報センターとでは活動の規模も組織の大きさも比較になりませんので、わたしたちは長崎県視覚障害者情報センターにおんぶに抱っこの状態でお手伝いをさせていただいたという状況です。具体的には、閉会式の部分を引き受けさせていただいて、わたしも主管施設の代表として終わりの挨拶をさせていただきました。

大会期間中の講演会と研修会の内容はここでは省略しますが、毎年この大会のために苦心して先生を選んできて、参加者が実りある研修を受けられるように配慮してくださるのには本当に頭の下がる思いです。今回の研修を受けて、視覚障害者への声による情報提供と点字での情報提供に、さらに心を込めて務めることができるようになると思います。

さて今週の福音朗読はルカ福音書の第 15 章です。第 15 章と言っただけで「あー」と気づく方は相当聖書に親しんでおられる方です。３つのたとえがありまして、「『見失った羊』のたとえ」、「『無くした銀貨』のたとえ」、「『放蕩息子』のたとえ」の３つです。皆さんの手元にある「聖書と典礼」にはそのうちの「『見失った羊』のたとえ」と「『無くした銀貨』のたとえ」が掲載されていますから、いちおうこのうちの１つのたとえに絞って、話をまとめたいと思います。

「『見失った羊』のたとえ」の中で、百匹の羊のうち一匹を見失ったとあります。聞いた話では羊は方向音痴の動物のようで、羊飼いに導かれなければすぐに迷子になってしまうのだそうです。何らかの事情で一匹の羊が迷子になったのでしょう。羊が迷子になると、それはそのまま「死」に直結してしまいます。羊飼いの導きのもとにあることで、羊の命は守られています。羊が、安心して生き続けるためには、羊飼いの目の届く所にいる必要があるのです。

しかし、羊がいったん迷子になると、羊のほうから羊飼いのいる所に戻って来ることは不可能です。ですから、羊飼いは「九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで」（15・4）捜し回ることになるのです。

羊飼いのそばに置いて、安心して生き続けられる状態にしてあげることは、羊飼いの務めです。イエスはこの羊飼いの使命を、ご自分の使命と重ね合わせて語っています。つまり、わたしたち人間と、救い主イ

エス・キリストとの関係です。

わたしたち人間は、つねに命の与え主イエス・キリストの導きのもとにあって生きることができる存在です。自分で自分の命を守り、生き続けることができないか弱い存在なのです。どんなに人間が強がっても、眠っている間に心臓がほんの僅か止まっただけで明日は無くなってしまいますし、脳の血管が 1cm 詰まっただけで、これまでと同じ生活ができなくなるのです。自分ではどうすることもできないさまざまな危険を、神が見守ってくださっているので、今を生きています。

イエスは、こんな弱い存在である人間を、いつもご自分の導きのもとに置きたいと願っているのです。それはわたしたちを支配するのではなく、わたしたちがのびのびと、本来の人間らしい活動ができる自由を守ってあげるために、導いてくださるのです。体のことだけではありません。罪によって、神の導きに背を向ける場合も、わたしたちは「死」に直面することになります。人間があらゆる意味で死なないために、イエスは「見失った一匹を見つけ出すまで」捜し回ってくださるのです。

イエスが見つけ出そうとして捜し回るのは、職務上の務めとして自衛隊や消防や警察が行方不明者を捜すのとは根本的な違いがあります。職務で捜索をしてくださる方々は、日没になれば捜索はいったん中断し、また明け方になってから再開します。イエスが見失った一匹を見つけ出そうと捜し回るのは、命を賭けて、最終的には十字架上で命を投げ出して捜してくださるのです。それは見失った命が、ご自分の導きのもとにいなければ命がないと知っておられるからです。

わたしたちの命は、イエスが命を賭けてご自分の導きのもとに置いていただいている命です。イエスが十字架上に命を投げ出して、捜し回ってくださったことで、イエスの導きのもとに置かれている命です。いったんイエスの導きからそれてしまうと、自力では戻って来ることのできない弱い命です。

それなのに、いつしか自分を見失い、イエスの声の届かない場所に迷って、死の危険に身をさらすことがあります。こんな時わたしたちにできることは、悔い改めることだけです。聖書と典礼に掲載されていない「『放蕩息子』のたとえ」の中で、弟は悔い改めましたが、兄は悔い改めた弟を喜ぶことができませんでした。

人間は、自力では命の与え主であるイエス・キリストの元に戻ることができず、悔い改めることしかできないのですから、わたしたちはだれも、悔い改める罪人を非難してはいけないのです。事の大小はあるかも知れませんが、悔い改める罪人を喜んで迎える羊飼いイエス・キリストの姿を、わたしたち教会家族も表していく必要があると思います。

わたしたちの毎日の生活の中に、神の導きのもとにいることを感謝するきっかけを持ちたいと思います。生活の中で感謝できる人は、悔い改める人を喜ぶ人にもなれると思います。イエスの導きにすべての命が置かれるよう願いながら、このミサを続けてまいりましょう。

主日の福音 13/09/22(No.670)

年間第 25 主日（ルカ 16:1-13）

すぐに行動し、迎えてくれる場所を確保する

司祭団のソフトボール大会がいよいよ 24 日と近づいてきました。今年は長崎が会場です。今年も、どこかの地区に奉公に出されるかもしれないなぁと、覚悟はしているつもりですが、できれば奉公に出されず、自分の地区で暴れたいなぁというのが本音であります。

今年、上五島地区の堅信式が 11 月 10 日に入っています。浜串小教区からは、浜串教会の男子と福見教会の男子、合計２人が堅信の秘跡を受ける予定です。今年の受堅者にも筆記試験と口頭試験と２つの試験を課そうと思っています。

筆記試験は例年通りです。そう難しくはありません。口頭試験はわたしがこれまで課した試験の中ではもっとも難しいと思います。口頭試験の内容は１つ、ニケア・コンスタンチノープル信条を暗記して唱えることです。完全に暗誦できてなくても筆記試験を高得点でパスしたら堅信式は受けられますが、お楽しみの焼き肉はどうなるか分かりません。

さて、今週の福音朗読「不正な管理人のたとえ」は、わたしにとって興味深い箇所です。ルカ 18 章に出てくる「不正な裁判官のたとえ」と並んで、個人的に興味をそそられる箇所です。不正を働いていたとされる管理人が、その不正の源になっていた行為を通して、最後は主人にほめられる。実に面白いと思います。何より、「不正な人間」をイエスがたとえ話に登場させるところが痛快です。

物語で目に付くのは、不正な管理人が、主人から最後通告を受けた後に、素早い行動に出ている点です。会計の報告をし、管理の仕事を取り上げられるまで、わずかな時間しかありません。このわずかな時間にできることを、迷わず実行した結果、彼は主人にほめられたのでした。

よいことをしたわけではありません。あいかわらず狡猾な、抜け目のないやり方で事態を切り抜けようとしたのです。ただし「迎えてくれる」場所は確保します。素早い行動で、迎えてくれる場所を確保する。これが今週わたしたちの考えるべきテーマと言えるでしょう。

まずは素早い行動です。お一人お一人自分のことを考えてみて、自分は素早い行動を取れる人間でしょうか。動きが速いか遅いかではなく、しなければならないと思ったことを、日を置かずに取りかかるかどうかということです。

食事の後に歯を磨きます。定期的に歯を磨く人でしょうか。何日も歯を磨かないことがあるでしょうか。食事の後先に祈りを唱える人でしょうか。何か教会行事で食事が振る舞われた時だけ、久しぶりに食前食後の祈りをするのでしょうか。

もしも神から「あなたの日常の祈りについて聞いていることがあるが、どうなのか。今すぐ報告を出しなさい」と言われた時に、わたしはどんな報告をするのでしょうか。

どんなことにもすぐに行動する、という人は少ないかもしれません。

多くの人は、すぐに行動する得意分野があり、なかなか行動に移さない分野もあるというのが当たっているかもしれません。

例えば5月10月にロザリオの信心があり、わたしはそれまでにロザリオのカードを作り、最終的には出席者の数をまとめて、何か励みになるようなものを準備して渡すという一連の流れがあります。こういう準備が楽しみだという司祭は、いつもすぐに行動するでしょう。ですがわたしは準備大好き人間ではないので、「あーしまった、カードを作ってない。どうしよう」となってしまうわけです。

もう1つの考えるべき点は、自分の取った行動が「迎えてくれる」場所を確保することにつながるか、という点です。今週の主日のミサは、亡くなられた歴代主任司祭の追悼も兼ねていますが、それぞれの主任司祭に関わる思い出があると思います。お一人お一人、自分が関わった主任司祭に今すぐにできることが何かあるかも知れません。

亡くなった歴代の主任司祭のためにすぐに行動すれば、それはそのまま天に宝を積み、ひいては天に迎えられることになるはずです。亡くなられた歴代主任司祭のためにすぐに行動する。これはきっと、わたしたちが天に迎えられる場所を作る近道です。

すぐにできることが、本当に自分たちが天に迎えられる場所を用意してもらうことに結びつくか、心配な方もいるかも知れません。世の中には慎重の上にも慎重な人もいます。ただわたし自身は、すぐにできることは迷わず実行したいと思います。

考えてみてください。迷っているうちに、できることはどんどん遠のいてしまいます。それに「これは天に場所を作る働きで、これは天に場所を作る働きではない」と、いったい誰が判定できるでしょうか。それは神のみが判断できる事柄のはずです。わたしはすぐに行動できる時に、ためらう必要は無いと思います。

「お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。」（16・2）それぞれの人生の決算報告を求められた時、わたしたちには一刻の猶予もありません。いつ決算を求められるかすら分かりません。

「そうだ、あの手があった」とか、「あの人がわたしを助けてくれる」そんな人がわたしと神との間にいるなら幸いです。思い当たらないなら、今のうちに、この世の富を使って、神と自分との間を取り持ってくれる人を見つけておきましょう。神は抜け目のないやり方にもほめることを知っておられるふところの深い方なのですから。

年間第26主日(ルカ 16:19-31)

主日の福音 13/09/29(No.671)

年間第 26 主日（ルカ 16:19-31）

あなたの暮らしは神の目に留まっていますか

先週 24 日（火）の司祭団ソフトボール大会、五島チームが、決勝戦３対 10 の劣勢を最終回の驚異的な集中力でひっくり返し、11 対 10 で見事優勝しました。相手の長崎市内チームの張り切り神父さまは、相当悔しかったろうと思います。個人的には、連合チームに奉公に出されることもなく、７打数４安打、１ホームランでした。拍手（の予定）。

優勝できた今年は２つの幸運が重なったと思います。１つは、予選の相手が長崎市内チームでなかったことです。予選１試合、本戦１試合だけですから、予選で負けてしまえば決勝戦に回ることができません。

もう１つは試合会場です。今年の長崎市松山ソフトボール場は、外野が金網のフェンスで囲まれています。他の試合会場はいつもホームランラインを引いて試合をしています。この違いが大きかったかもしれません。

どういうことかと言いますと、ホームランラインを引いた球場だと、ゴロでホームランラインを越えていった時は、自動的に２塁打になって２塁ストップです。ところが、フェンスが設置された今回の球場の場合、ボールが転がっている間は打者走者がフリーで進むことができるのです。実際、４試合中３人がランニングホームランとなりました。ちなみにわたしは、歩いて帰ってくる文句なしのホームランでした。

さらに言うと、フェンスのある球場は大きな飛球が来た時にフェンスをかなり気にします。すると、フェンス直撃の打球はなかなか捕球できないわけです。ラインを引いているだけでしたら、ライン際でファインプレーの可能性があります。今回は金網のフェンスでしたので、それも難しい状況でした。

こうして、強打者のいるチームにかなり有利な展開になりました。しかしながら、わたしは今回の結果に浮かれることなく、48 歳になる来年も厳しいレギュラー争いに挑戦です。司祭が元気であることは、小教区、また教区も元気になる源だと思っております。

お許しを頂きたいことが１つあります。優勝を祝して、大分の日田温泉に明日から１泊したいのです。月曜日に行って、火曜日の昼のフェリーで帰りますので、火曜日と水曜日は夕方５時のミサでお願いします。

さて今週は、「金持ちとラザロ」のたとえです。貧しい人ラザロは死んでアブラハムのすぐそばに連れて行かれ、金持ちは死んで葬られ、陰府でさいなまれるわけですが、わたしは今回、どんな人が、最終的に父なる神の目に留まる人なのかということについて考えてみたいと思います。

まず、地上での金持ちと貧しい人ラザロの生活について考えてみましょう。金持ちは、「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」（16・19）とあります。彼は地上で、多くの人の目に留まり、多くの人の注目を浴びていたのでしょう。一方のラザロ

は、誰の目にも留まらず、金持ちの門前にたたずんでさえも、だれからも見向きもされなかったのでした。「犬もやって来ては、そのできものをなめた」（16・21）とあるのは、本当にだれも、ラザロに注意を払わなかったことが強調されているわけです。

この両者は、死後に境遇が逆転します。貧しい人ラザロは、天使たち、宴席の人たち、父アブラハム、ここには書かれていませんが当然父なる神に見守られています。これは神の国に住む者すべてに見守られているということです。

ところが金持ちは、死後はだれからも気に留めてもらえなくなりました。「炎の中でもだえ苦しんでいる」（16・24）と訴えているのに、父アブラハムにはその訴えが響かないのです。「指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください」（16・24）と哀願しますが、それすら断られます。いつもたくさんの人にちやほやされ、取り囲まれていたのに、今はだれも気に留めてくれないのです。どんなに苦しんでいても、手を差し伸べてはもらえないのです。

アブラハムは言います。「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。」（16・25）貧しい人ラザロは生前だれからも気に留めてもらえなかったけれども、天の国の宴席にいる人々は皆、苦しんでいるラザロに注目していたのです。注目していたから、すぐに父アブラハムのもとに連れて行かれました。金持ちは、これほど天の国の宴席にいる人々が注目していたラザロに気付かなかったわけです。

なぜ気付かなかったのか。この問題はわたしたちにも深く関わってきます。旧約聖書の出エジプト記には、貧しい人に対する配慮を語った箇所があります。一般にユダヤ人は聖書を熱心に読んでいましたから、該当する箇所を十分承知していたはずです。次のように書かれています。

「もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。わたしは憐れみ深いからである。」（出 22・25-26）

金持ちがもし、自分がすでに何度も聞かされていた箇所を他人事と考えずに真剣に受け止めていたなら、父アブラハムはこの金持ちにも目を留めたことでしょう。金持ちが神の国の宴席にいる人々の目に留まり、将来招かれる可能性はいくらでもあったわけです。

わたしたちはどうでしょう。今の暮らしは、神の国の住人の目に留まる暮らしぶりでしょうか。地上で誰の目にも留まらない平凡な暮らしであっても、神の国のすべての人の関心の的になっている人も必ずいるはずです。

父なる神が目を留めてくださる生き方を目指しましょう。その姿が仮に誰の目に留まらなくても、神をよりどころとしている人を神は決して見落とすことはありません。今週のたとえは「誰の目に留まることを第一に考えて生きますか」とわたしたちに問いかけています。

年間第 27 主日(ルカ 17:5-10)

主日の福音 13/10/06(No.672)

年間第 27 主日（ルカ 17:5-10）

多い信仰ではなく、揺るぎない信仰を願う（２）

土曜日朝から、頭が痛くて起きているのが辛かったです。思い当たることは、金曜日に婦人会ミニバレー大会の練習に参加した後、ボイラーが作動せず、しかたなく水でシャワーを浴びたことです。これが効けたのかもしれません。でなければ、たまに悩まされている気圧の変化で起こる頭痛かもしれません。どうにも頭を働かせることができなかったので、今回の説教はかつて文庫本で出した 2004 年のものを参考にしました。

福音は、信仰を増してくださいと、弟子たちが願うのに答えて、イエスはからし種一粒ほどの信仰があれば、あなたにとって十分だ。問題はそれが揺るぎないものかどうかなんだよと教えてくださる場面でした。信仰はいかに小さなものであっても人をあっと言わせる大きな働きができるのです。

ここでもう一つ考えてみたいと思います。それは、信仰を増してくださいという弟子たちの願いは、少し的はずれだったようで、やんわりと断られたということです。つまり、人が神に願うことはいつも適切かというとそうでもなくて、的はずれな願いは取り上げてもらえないということもあるのです。

わたしたちの願いごとのうち、ある願いは、的はずれな願いに終わっています。信仰は願う人すべてに種として蒔かれます。からし種ほどの信仰で十分働く力を持っていると諭されたところを見ると、信仰を増してくださいという願いはおそらく的はずれだったのでしょう。むしろ「不信仰から立ち直らせてください」と願うべきだったのだと思います。

イエスは、信仰を多いか少ないかで考えている使徒たちに注意を促します。イエスは違う答えを示します。少ないと思われる「からし種」ほどの信仰で十分です。なぜでしょうか。それは、信仰は突き詰めると「神様を信じているかどうか」「信頼しているかどうか」だからです。

神を信頼している人はすでに十分な信仰を持っています。信仰とはその人が自力で何でもできるということではありません。その人には、神が信仰に答えて働いてくださいます。信仰が神を信じることと言い切ることができるのであれば、少なめに神を信じていますとか、多めに神を信じていますというのはどこか的はずれだと思います。

では、信仰について何を願うことができるのでしょうか。わたしは、すでに信仰を持っています。神を信じているからです。信じていないという人は別として、もうすでに信じています。ですから、わたしどもの信仰を磨いてください。ふらふらしないようにしてください。こんな願いが適当かもしれません。

次に、善良で忠実な僕を紹介しながら、「あなたがたも同じこと

だ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」（17・10）という呼びかけをしました。これはじつは信仰を増してくださいという前半部分で考えた答えと深く関わっていると思います。

信仰が揺るぎないものとなるように、信仰に磨きをかけていただくように願うなら、その願いは取り上げてもらえると思います。結果、わたしたちがいただくものは、さらに磨かれた、ふらふらしない確信のようなものだと思います。そして、今日の朗読の結びでイエスが勧めている態度も、神が評価してくださるという確信がなければそれは言えない言葉だと思うのです。

「しなければならないことをしただけです」。わたしたちは多くの場合、自分がしたことを並べたがります。覚えてもらうため、自分のことを良く思ってもらうためです。これもしてきましたあれも続けました・・・それは、裏を返せば、自信がないからそう言うのかもしれません。「しなければならないことをしただけです」とは、よほどの自信がなければ言えないせりふだと思うのです。

せっかく願うのであれば、ふらふらしない信仰を願いましょう。イエスの前で「わたしは生きている間、しなければならないことをしただけです」と、信頼のうちに自分をゆだねることができるように生活を整えていきましょう。それを可能にするのは、ふらふらしない信仰だと思います。そしてこの揺るぎない信仰こそは、わたしたちが願い続けてよいものではないでしょうか。

年間第 28 主日(ルカ 17:11-19)

主日の福音 13/10/13(No.673)

年間第 28 主日（ルカ 17:11-19）

あなたはその出来事から何を見ますか

10 月 9 日の水曜日、この日は夕方のミサで、説教は小学生を相手に話すことにしているので、いつもの通り小学生の席まで降りていって話をしました。毎回、いろんなことを質問して、子どもたちの反応を見ています。質問されるのが恐ろしくて、この日のミサに子どもが行きたがらないという噂も聞いていますが、わたしは何と言われようが水曜日のスタイルは変えないつもりです。
さてこの日の質問はこういう内容でした。「昨日、10 月 8 日（火）の台風はすごい雨風だったねー。屋根が吹き飛んだ人いますか？車がひっくり返った人いますか？そうかー。被害は少なかったんだね。なぜ被害が少なかったと思う？」子どもたちは思い思いの返事でした。「偶然そうなった」「奇跡が起こった」「分からない」でもわたしが期待する答えではありませんでした。
わたしが期待したのは、「神さまのおかげで被害が少なかった」「わたしたちが神さまにお祈りしたから、被害が少なかった」という答えです。実際、8 日の火曜日は朝 6 時のミサを始める時に、「台風の被害が少なくて済むように、ミサの中でお祈りいたしましょう」と呼び掛けてからミサを始めました。
わたしはこう思うのです。大きな台風が上陸して、大変な被害が予想される中で、結果的に被害は少なくて済みました。台風の進路がどうだとか、科学的な説明は後からいくらでもできるでしょう。けれども、そんな説明はつまらないし、天気図の説明は東京に住んでいる気象予報士でもできることです。
わたしは台風のただ中で過ごし、そして感じたのです。台風が無事に通過してくれた。「これはわたしたちがミサの中で祈ったおかげだ。」わたしの考えは非科学的でしょうか。子供じみているでしょうか。
確かに今回の 24 号台風は、都合よく通過していってくれたのでしょう。ですがただ単に幸運だったというだけでしたら、いったい何に感謝するのでしょうか。感謝することもなければ、被害がなかった、あーよかったで、台風が来たことも忘れてしまうのではないでしょうか。わたしは、台風が無事に通過したその向こうに、感謝する相手を見つけました。これは神に感謝すべきだと、心から思いました。
さて今週の朗読箇所は、「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」物語です。この重い皮膚病を患っている人々は、時代が違えば、イエスに憐れみを求める必要も無かったかもしれません。重い皮膚病と言われている病がハンセン病であれば、いまは特効薬が発見されていて発病している人でも完治しますし、日本でこの病気にかかる人はゼロです。
ただし、当時は重い皮膚病にかかった人は社会から切り離されて暮らす必要がありました。重い病でも、社会に取り残されずに暮らすことができるなら、まだ慰めもあるでしょう。けれども彼らはその慰めを期待で

きませんでした。
イエスは憐れみを求めるこの十人に、深い憐れみを示してくださいます。イエスはこの場面で人間社会が与えることのできなかった憐れみを与えることができるお方です。しかも彼らに、救いの喜びをも与えるため、重い皮膚病という鎖から彼らを解いてくださいました。
ところが、「自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た」（17・15）のは一人のサマリア人だけでした。確かに十人とも重い皮膚病はいやされたのですが、「イエスの足もとにひれ伏して感謝した」（17・16）のはサマリア人だけでした。
思い出してください。わたしは説教の始めに、なぜ24号台風の直撃を受けたにもかかわらず、被害が少なかったのでしょうかと子どもに問いかけました。わたしの答えはどんな答えだったでしょうか。「これはわたしたちがミサの中で祈ったおかげだ」というものでした。
わたしは、福音に登場する重い皮膚病を患っている人々のいやしにも、同じことが言えると思うのです。理論的に、あるいは医学的に、これこれこのようにして重い皮膚病が治ったと説明することは可能かもしれません。けれどもそんな説明は、つまらないと思うのです。何の感動もないし、そこから感謝の気持ちも湧いてこないと思うのです。
実際に、十人のうち九人は、清くされたはずなのにその後のことは何も触れられていません。彼らは自分の病がいやされ、清くされたことを理解していたはずです。それでも感謝の気持ちが湧いて、神を賛美するということには繋がらなかったのです。重い皮膚病がいやされたことに自分なりの説明は付いたかも知れませんが、自分たちが体験した奇跡の向こうに、感謝する相手を見ることができなかったのです。
わたしたちはどうでしょうか。わたしたちは奇跡的に災難を免れて、生き残った体験がないでしょうか。助からないと言われるような病気を背負って、それでも生かされている人がいないでしょうか。あなたが体験したことは、「大声で神を賛美し」「イエスの足もとにひれ伏して感謝」してよい出来事ではないでしょうか。
わたしたちは奇跡的な出来事の向こうに神の働きを見て、神に感謝することがあまりに少なくなったのかもしれません。そうした考えを子供じみていると考えているのでしょうか。「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」（ルカ18・17）というイエスの御言葉は、もはや時代遅れなのでしょうか。
十人のうち九人が「これは理論的に説明できるから、だれにも感謝する必要がない」と言ったとしても、わたしは神に感謝したいと思います。神は今も「絶望のあるところに希望を、悲しみのあるところに喜びを、暗闇のあるところに光を」届けてくれていると、言い続けたいと思います。出来事の向こうに神の働きを見る人は今日もイエスと出会い、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」（17・19）と声をかけていただけるのです。

年間第 29 主日（ルカ 18:1-8）

気を落とさずに絶えず祈るなら結果になる

東京に行ってきました。教区広報担当者の会議でした。新潟の菊地司教さまが基調講演をしてくださいました。福音宣教のために、現代社会で人と人とをつなぐ道具になっているものを、特性をよく見極めながらも、積極的に使い、福音宣教に役立てるように呼び掛けてくださいました。
現代社会で人と人とをつなぐ道具として特に目立っているものは、ソーシャルネットワーキングサービスという枠に含まれるもので、たとえばフェイスブックや mixi や、ツイッターなどを指しています。
これらの道具はもちろん危うさを含んでいます。こうしたネット上の道具で出会った人同士がトラブルになるケースもありますので、賢明な使い方が求められますが、恐れているばかりではこれだけ社会に浸透している場をみすみす逃すことになります。経験のある人などに教えてもらったりすると、福音的な価値観を広める場にしていくこともできます。
さて福音は、「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教える」というねらいで、「やもめと裁判官」のたとえが取り上げられています。やもめは、相手を裁いて、守ってもらうために、裁判官のもとにひんぱんに通っています。この裁判官は、「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」（18・2）として取り上げていますから、強い者にこびへつらい、弱いものを踏みつけるような態度を取っていたのでしょう。時代劇で言えば、水戸黄門に成敗される悪代官だったのだと思います。
しかし、悪代官であっても自分の主張を取り上げてもらう人が他にいないやもめにとっては、どうしてもこの裁判官の心に訴えかけて、自分を守ってもらう必要がありました。やもめにできるたった１つの手段は、「うるさくてかなわない」「さんざんな目に遭わす」そう思わせるほどひっきりなしにやって来て求め続けたのでした。
わたしたちも、絶対にあきらめないで願い続ける、期待し続けるという体験を、わたしたちと神との間で持ちたいものです。そのために、自分に身近なところで、あきらめないでよかったなぁ、この日をずっと待っていてよかったなぁという体験を積むと、それが役に立つと思います。
先週の東京出張で、わたしは広島教区から来ていた２人の広報担当者と知り合いになって帰って来ました。中田神父は広島カープのファンなので、今年はかなり期待して野球を見ているという話を別の人と話していたのです。するとその話に広島の広報担当者のかたが大変興味を持ってくれまして、すっかり意気投合して話に花が咲きました。
話は脱線してしまいますが、わたしの応援しているチームは 16 年ぶりにＡクラスに入り、ようやくクライマックスシリーズを勝ち上がってセリーグの優勝チームに挑戦できたのです。16 年もこの日を待っていました。夏の蝉でさえ、7 年地下に潜っていれば 1 週間地上で大声で鳴くことができます。わたしは 16 年間、応援しているチームの話を地下に潜って話していたのですが、今年ようやく話すことができたのです。

けれどもわたしはその間決してあきらめたりはしませんでした。わたしの中には、応援し続ける理由がいくつもあって、あきらめる理由は一つも無いからです。わたしの名前は中田輝次（なかだこうじ）ですが、下の名前の「こうじ」というのは往年の名選手「山本浩二」から取ったと聞かされています。そして、父はわたしを膝に抱いて、「こうじ頑張れ、こうじ頑張れ」と言いながら野球観戦をしていました。
ほかにもわたしが今なお日本シリーズに 20 年近く出たことのないチームを応援する理由はあるのですが、そうしたことをさんざん話していたら、今年出会った広島の広報担当者のかたから、「広島教区の司教さまに『長崎には熱烈カープファンの司祭がいます』とお伝えしておきます。ぜひおいでください」とまで言われてしまいました。わたしも心から長崎教区を愛しておりますが、どうしても広島に来てほしいと言われたら、広島だったら考えてもいいなぁと思っています。
つい脱線してしまいましたが、わたしにとっては応援している球団が「あきらめないでよかった、この日をずっと待っていてよかった」という体験になっています。16 年この日を待つことができるのですから、イエスが気を落とさずに絶えず祈らなければならないと励まし続けることをもっと身近に考える材料を、わたしたちは持つ必要があると思います。
わたしたちには、それぞれの体験の中で、「気を落とさずに、願いが叶うまで待ち続ける」具体的な例がきっとあると思います。その、自分でしか経験していないような貴重な体験を、もっと周りの人を力づけるために役立てて欲しいです。
気を落とし、もう神に願うのはやめよう、もう神に祈ってもしかたがないと感じている人がいるかも知れません。そうした人に、もう少し祈る努力を続ける気持ちに向かわせることができるなら、わたしたちの個人的な体験は自分だけのもので終わらずに、人に役立つことになります。
イエスは最後に、「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」（18・8）と言っています。一人でも多く、生活の中で祈り続ける人、信仰が生活の土台になっている人がイエスの再臨の日まで立っていることを願いたいと思います。昼も夜も主に叫び続ける力を、今日のミサの中で願いましょう。

年間第 30 主日(ルカ 18:9-14)

主日の福音 13/10/27(No.675)

年間第 30 主日（ルカ 18:9-14）

神により頼む心を保ち続ける

先週の説教で、研修を東京で受けてきたという話をしたのですが、話さなかったことが１つあります。それは右足親指付け根の痛みのことです。東京に行くその日、つまり 13 日（日）の朝、突然痛みが始まりました。何の痛みかまったく思い当たることがないのに、東京に着いた頃にはもう横断歩道を青信号で渡れないほど足を引きずって歩いていました。
それはもう、足を切って捨てたいくらいの痛みだったので、知り合いのカトリックの医者にメールで症状を説明し、外反母趾だろうかと尋ねたところ、痛風の疑いもあるという返事で、痛み止めの薬を買って飲み、五島に戻ってから必ず病院で診てもらうようにと指示を受けました。
それなのに「喉元過ぎれば熱さを忘れる」で、戻ってから１週間、痛み止めも飲まずに放置していたのですが、先週の木曜日の夜にまた痛みだし、痛くて眠れなかったため翌朝慌てて奈良尾病院に連絡を取りました。実は戻ってきてから、生活習慣病検診を受けようと有川病院に相談に行ったのです。すると 12 月 26 日まで空いてないと言われ、12 月 26 日の申込はしたものの、こっちとしてはそれまでに何かあったらどうするのかと、イライラしながら週末過ごしていたのです。
不安は的中し、木曜日の夜中２時に、毛布をそっと載せることもできない状態になりました。奈良尾病院ではてっきり血液検査をしてくれるものと思っていましたが、「12 月 26 日に生活習慣病検診を受けるのでしたら、慌てなくてもよい」とあっさり断られ、レントゲンを撮って、「骨の異常は何も無いから、さしあたって痛み止めを出しておきます」と言われて診察は終わりました。きっと、12 月 26 日の検査では、尿酸値がどうのこうのと言われて、「病人」という診断が下るのでしょう。とうとうわたしも、病人の仲間入りということになりそうです。
今週の福音朗読は、「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえですが、ファリサイ派の人の祈りは、わたしのこれまでの生活と重なると感じました。「神様わたしは、これこれの者でないことを感謝します。」つまり、「神様わたしは、毎日酒を飲むわけでもないし、美食家でもないし、また、すでに何人もいる糖尿病や痛風の司祭でもないことを感謝します」と考えていたのです。自分にはまったく関係が無く、これからも決してそういうグループには含まれないと、本気で思っていたのです。
ところが今回のこの痛みです。まだ診断が確定したわけではありませんが、いろいろ話を総合すると、痛風の疑いが濃厚です。ここにきて初めて、わたしのこれまでの生活は、弱い立場の人を見下していたのではないか、見下していないとしても、自己管理をして、病気を抱えるような司祭には陥らないと考えていたかも知れないと思ったのです。
次に徴税人の祈りを自分に重ねてみます。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」（18・13）今のわたしでしたら、「神様、痛風のわたしを憐れんでください」となるでしょうか。頂いた大切な体を壊してし

まった申し訳ない気持ちで遠くに立ち、顔向けもできないので目を天に上げようともせず、「憐れんでください」と祈る。
今まで、「憐れんでください」という祈りはわたしの祈りになかったのに、横断歩道もまともに渡れず、「病気になったわたしを憐れんでください」と祈るしか言葉が見つからない。弱い立場になってみてやっと真剣に神と向き合った気がしました。
すると、「義とされて家に帰った」（18・14）というのは、神とどのように向き合えばよいのかを正しく理解しているということではないでしょうか。わたしは意識的ではないにせよ、「これまで病気一つしなかったことを感謝します」と神に祈っていました。健康であったがゆえに、「あなたに頼るしかないのです」という気持ちに欠けていたのです。
反対に、「神様、病気のわたしを憐れんでください」そうとしか祈れない時は、「あなたに頼るしかないのです」という気持ちが充ち満ちています。今まではどこか、わたしは弱い立場のグループではないということを自慢していました。
今は病気を認めなければなりません。ここに至ってようやく、神により頼んで生きることが義と認められ、神により頼むより自分により頼む人は義と認められないという今週のたとえが理解できたのです。
もちろんたとえに登場するファリサイ派の人は立派な人です。当時の律法に求められている以上の努力を喜んで果たしているからです。立派な人かどうかというのであれば、徴税人は立派な人とはほど遠い生き方をしていました。ですが負い目があるから、顔も上げられない生き方をしていたからこそ、神により頼む心を失わなかったのです。
神により頼む心を失わないこと。神により頼む心を保ち続けること。これが今週わたしたちに求められていることです。それは例えて言えば自転車に乗っているようなものです。自転車はずっとペダルを踏み続けなければ倒れてしまいます。わたしたちも、ずっと神により頼んでいなければ、立っていられない生き物なのです。健康だから自分で立っていられる、病気だから神により頼んでいるのではないのです。
痛み止めを飲まなければ耐えられないほどの痛みを味わいました。いつまでも自分の健康には頼れないことがよく分かりました。唯一、頼り続けることができるのは神のみです。
徴税人が胸を打ちながら言った「神様、罪人のわたしを憐れんでください」をわたしたちの祈りの出発点にしましょう。自分の努力を並べ立てても、神はその声を放置なさいます。「神により頼むわたしなりのきっかけを持っているだろうか。」今週考えてみることにしましょう。

年間第 31 主日(ルカ 19:1-10)

年間第 31 主日（ルカ 19:1-10）

わたしたちは何倍神に返すべきでしょう

最近半沢直樹というテレビドラマが話題になりました。この主人公の信念が「やられたらやり返す。倍返しだ。」というものです。あちこちでこのセリフが使われましたので、皆さんの多くもこのセリフはご存知でしょう。
ところで、倍返しの考え方は今に始まったことではなく、聖書の中にも登場します。旧約聖書の中には 14 箇所も出てきまして、その中でぴったり当てはまると思われる用法が 3 箇所見つかりました。どれも、「他人の持ち物に損害を与えた場合、その人は二倍にして償わなければならない」というものです。
例として出エジプト記 22 章 3 節には「もし、牛であれ、ろばであれ、羊であれ、盗まれたものが生きたままで彼の手もとに見つかった場合は、二倍にして償わなければならない。」とあります。「損害を与えた場合の償いは倍返し」というのが、旧約時代から適用されていたのです。
さて倍返しの話はこれくらいにして、今週の福音朗読では「四倍返し」の話が登場します。ザアカイはイエスから「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」（19・5）と言われて、喜んでイエスを招待し、もてなしました。その席上でザアカイはこう言ったのです。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」（19・8）
ザアカイは何となく、「四倍にして返します」と言ったのでしょうか。「二倍にして返します」という言い方も可能だったはずです。ザアカイは徴税人の頭でしたが、聖書の知識があったかも知れません。そこで「四倍にして返す」という表現が旧約聖書の中に出て来ないか、調べてみました。すると 1 箇所だけ見つかりまして、しかも場面にうってつけの箇所でした。
該当箇所は、サムエル記下の 12 章 5 節から 6 節です。これだけではピンと来ないかもしれませんが、ダビデ王がウリヤの妻を奪った話と言えば思い出す人もいるでしょう。王の過ちを咎めに来た預言者ナタンが、ある金持ちが友人をもてなす時に、自分の家畜を料理に回すのを惜しんで、家畜を一匹しか持たない貧しい人から取り上げたというたとえを話しました。
それを聞いたダビデ王が激怒してこう言うのです。「主は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。小羊の償いに四倍の価を払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから。」これに対して預言者ナタンは王に答えました。「その男はあなただ。」旧約聖書にはこの 1 箇所だけ、「四倍」に関連する引用があります。
もしかしたら、徴税人ザアカイは、ダビデ王の過ちを預言者ナタンが叱責するこの箇所を知っていたのかもしれません。無慈悲なことをした人

に対して四倍の償いを要求するダビデ言葉を自分に当てはめ、たとえ自分が無慈悲なことをしていないとしても、仲間の徴税人が無慈悲なことをしたかもしれない。ザアカイは徴税人の頭として、仲間の過ちにも責任を感じ、自分が四倍にして返すと、答えたのではないでしょうか。
「四倍にして返す」とは、どういう意味があるのでしょうか。一般的な損害の賠償でしたら、二倍で十分償いができるかもしれません。しかし人のいのちに関わる賠償でしたら、何倍あっても償いきれないはずです。もし、ザアカイの知らないところで徴税人の仲間が無慈悲な取り立てをして、人のいのちを危険にさらしていたとしたらどうでしょう。彼は責任を感じて、かつてダビデ王が「小羊の償いに四倍の価を払うべきだ」と言ったことに倣って、「だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と言ったのかもしれません。
彼は今、「すべての人のいのちに無関心でいられない方、イエス」を前にしているのですから、徴税人の頭という立場で負い目があるかも知れないので、心から悔い改め、イエスによる救いを求めていたのだと思います。
わたしたちは神に何倍返す必要があるでしょうか。人と人との間で発生する損害は、十分に配慮して、必要な賠償や償いを果たしているだろうと思います。同じことを、わたしたちと神との間で配慮して生活しているでしょうか。
わたしたちが神に背負わせてしまっている欠点・不足・罪を、日々の生活の中で、ミサに参加する中で、償っているでしょうか。人と人との損害は、いのちに関わるものはそう多くはないと思いますが、神に背く罪の中には、わたしたちの救い、永遠のいのちに関わる重大な罪もあり得るのです。
「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」（19・10）ザアカイは、自分が本来あるべき場所から失われたものであり、イエスに捜し出してもらわなければ、救われないことを理解していました。わたしたちも、本来あるべき場所から迷い出た者であり、自分で元の場所に戻ることができない存在なのです。そのことをなかなかわたしたちは認めることができません。ほんのわずかでも高い木に登って、「わたしはあの人とは違う」「あの人よりはましだ」と考えようとするのです。実際は、だれ一人、自分で救われることはできないのです。人とは違うと言い張っているその場所から降りて来なければ、わたしたちはイエスと出会うことができないのです。
神からすべてを請求されるなら、わたしたちは本来償いきれないいのちです。日々自分自身を神に委ねる謙虚さを保って生活しましょう。つねにイエスに捜し出してもらえるように、「わたしはここにいます」と祈りの声を上げることにしましょう。

年間第 32 主日(ルカ 20:27-38)

主日の福音 13/11/10(No.677)

年間第 32 主日（ルカ 20:27-38）

復活への希望に人生を賭ける

昨日は大司教さまが小教区を公式訪問してくださいました。大司教さまは午後３時に浜串入りしましたが、ミサが始まるまでの１時間半ほど、主任司祭から浜串教会の現状について報告をしまして、また大司教さまからの質問を受けたりして時間を過ごしました。

大司教さまは小教区を公式訪問されると、決まって教会の台帳に目を通し、署名をなさることになっています。わたしも最新の状態に更新された台帳を提出し、署名してもらいました。2010 年 4 月からの４年間で、洗礼を受けた子供が４人、初聖体を受けた子供が５人、堅信を受けた子供が 18 人、結婚式が１組、亡くなった方が 31 人です。

台帳に目を通していただく間に、秘跡を受ける人は目に見えて少なくなり、亡くなる方が目に見えて増えていることを大司教さまに正直に報告しました。こうして大司教さまは、小教区の主任司祭が何を心配しているのか、直に話を聞いていただくことで実感できるのだと思います。

いよいよ、小教区の２人の中学２年生が堅信の秘跡を受けます。堅信の秘跡を受けるにふさわしい信仰の理解を持っているか、試験もしました。200 点満点の試験で、口頭試験が 50 点、筆記試験が 150 点の 200 点満点です。実際は、もしかしたら試験で苦しむ人がいるかも知れないという親心で、筆記試験には 160 点分くらいの問題が埋め込まれています。ですからすべてを完璧に答えることができれば 210 点ということになりますが、仮に完璧な答案でも、本人には 200 点と伝えております。

今回も試験は楽々クリアしました。これで、午後２時からの青方教会での堅信式に、安心して臨むことができます。堅信の秘跡を受けた２人には、これからは大人の仲間入りをしたカトリック信者として、主任司祭は要求もするし、期待もするということです。

今週の福音朗読は、「復活についての問答」です。イエスの時代、人が死んだのち復活するかどうかは、意見が分かれていました。サドカイ派の人々はモーセ五書（創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）に明確な復活の記述がないことから、復活を否定していました。

ですが当時の人々の中には、人は死んで復活するのではないか、と考えている人もかなりいました。そこでサドカイ派の人々は復活についてイエスに問いかけるわけです。彼らは復活があるとしたら混乱することになるような難問を用意して、これに答えられるかと迫ったのでした。

この世では、全くもって不条理なことがたくさんあります。選ばれた朗読福音の、長男が子を残さずに死に、その長男の跡継ぎを残すために次々に長男の妻をめとったにもかかわらず子を残さずに死んでいく。本当にかわいそうな話だと思います。

他にも、幼くして死んでいく命や、事件や事故、戦争や権力者の犠牲になる弱い立場の人々もいます。本当にやりきれない思いになります。わたしよりも若い人の葬儀をしなければならない時がありましたが、ど

うやってご家族に信頼と希望を持ってもらうか、大変悩みました。

こうした不条理を目の当たりにする時、人の一生がこの世だけで終わるということは、受け入れられないのです。この難問に、イエスは答えてくださいました。人にはみな復活への希望があって、復活にふさわしいとされた人々の在り方は、この世の在り方とは違うということです。

この世では、次の世代に命を繋ぐことが大切です。結婚も、いのちを次の世代につなぐ大切な役割があります。ですが、復活にあずかる人は、もはやその思いに縛られる必要が無いのです。イエスが言うように、「めとることも嫁ぐこともない」兄弟姉妹のような生き方となるのです。

ただし、興味は尽きません。この世に生きている間、祖父母や父母を天国に送り出した人もいます。自分たちがいよいよ旅立つ時がやって来て、祖父母や父母を、どのように実感するのでしょうか。会話のできる年齢にも届かず、幼くして旅立った子どもたちがいる場合、その幼い赤ちゃんと、復活の時どのように出会うのでしょうか。興味は尽きませんが、そこまでは示されていません。

いずれにしても、復活を否定する人々に、イエスは復活が必ずあることを明言し、ご自身が復活なさって、復活した人の在り方がこの世の在り方とは違うことを弟子たちに証明なさいました。復活したイエスは家の戸の鍵を閉めていた部屋の中においでになりましたし、弟子たちの見ている前で天に上って行かれました。

最後に今週の学びを得ることにしましょう。わたしたちはこれから、どのような生き方が必要になるでしょうか。それは、復活への希望を証しする生き方です。参考として３つのことを示しておきます。

１つは、復活への希望の源であるキリストに、生活の一部を用いることです。ミサに参加することや、教会の行事、婦人会の行事、上五島地区全体の行事などに参加することは、自分たちが復活したイエスに希望を置いていることを証しするよい方法です。それを見て、他の多くの人も復活への希望に生きる意義を考えることができます。

次に、今月は死者の月です。すでに亡くなった方を墓地に訪ねて行って、復活への希望を語りかけてみましょう。わたしたちは生きて復活への希望を抱いていますが、墓に眠る人々は、少し在り方は違いますが、復活への希望のうちに神のもとで生きています。復活への希望をともに語り合うなら、キリスト教でない人々に必ず影響を及ぼすでしょう。

最後に、可能なら、めとることも嫁ぐこともなく、神によって生きる生き方に人生を賭けてみましょう。復活の希望を持たない人には、この生き方は無意味です。けれども、復活の希望を持つ人にとっては、人生をかけることができるほどの賭です。わたしはこの人生を賭けた証しに生きてみたいと思っています。

あなたにとって、復活への希望を証しする生き方はどのような形になるでしょうか。自分なりの証しの生き方を持ちながら、同じ復活への希望を知らない人々にも生き方を示すことができるよう、今日のミサの中で恵みを願いましょう。

年間第 33 主日（ルカ 21:5-19）

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む(2)

皆さんはNHKの連続テレビ小説、続けてご覧になっているでしょうか。ただ今放送されている「ごちそうさん」のここ数日の放送分、わたしはまともに観ることができず、つい感情的になって観ています。

ご覧になってない方のために、夫のもとに嫁いできたヒロインがやって来た家には、人当たりがとてもきついお姉さんが居座っていました。ことあるごとに嫁に難癖を付け、覚えているだけでも２回、泣きながら「こんな家、出て行ってやる！」と家を飛び出しました。これはドラマで、作り話だと思ってはいますが、お姉さんのことを心の中で「ひどいやっちゃなぁ」と思ってしまい、観ていられません。

テレビを観ていて思ったのですが、苦しみと言いますか、迫害というものは、案外近くにあるのかも知れません。最近小さな迫害を感じていまして、高井旅のミサで、マイクのスイッチが入ってなくて、侍者に「マイク、マイク」と伝えたのです。身振り手振りまで交え、そのうちわたしは頭に血が上ってきました。ところがその侍者は「え？何ですか？」とポカンとしています。わざとなのかとすら思いました。

また、堅信式直後の浜串中学生のけいこで、堅信の秘跡を受けてどう感じたか、本人に感想を聞いて後輩の１年生にも来年への楽しみを繋いでもらおうと思ったのです。けれども聖堂は真っ暗で電気が付いていません。どういうことだと玄関の電気を付けたら、堅信をこの前受けた２年生が真面目に来てくれていて、「１年生はどうした？」と聞くと「明日から試験なので、来てないんですかね」と言います。ボイコットです。

前もって「来ることができません」と連絡があって、「明日から試験なら、今日は休もうか」ということでしたら分かりますが、最初から決めつけてボイコットするのです。わたしはやる気を失い、その日のけいこを休んでしまいました。これもちょっとした迫害であります。

ほかにも、「毎回使う物なのに、なぜ用意されていたり用意されていなかったりするの？」とか、「いくら何でも無くなったら無くなったと言うでしょう」というようなことがありまして、まさに連続テレビ小説よろしく「きっついなぁ」と感じてしまうことがあります。何か機会があったときに言ったりもしますが、これは現代の迫害なのだと思うと、「忍耐するしかない」と諦めにも似た気持ちになるのです。

今週の福音は、「苦難があり、そこで忍耐を学ぶなら、希望が開ける」こんなことを学ばせようとしているかのようです。イエスは話の結びとして、次のように仰います。「忍耐によって、あなたがたは命をかち取りなさい」（21:19）。忍耐について学ぶなら、わたしたちの未来には希望が待っています。今週、忍耐について学ぶことにいたしましょう。今週の説教の内容は、2004年のものを参考にしています。

きっと皆さんは、弱音を吐いているわたしなど及びもつかないような忍耐を、ふだんの生活の中で経験しているに違いありません。夫婦で一つ屋根の下にいれば、いろんなことでどちらか一方は我慢している、忍耐しているということがたくさんあるのだと思います。夫婦と言いま

したが、それは親と同居している場合にもあるでしょうし、子どもと暮らすなかでも気持ちよく過ごせる日ばかりではないと思います。忍耐することは数えきれず、中田神父の弱音なんてたかが知れていると感じている方もいらっしゃるでしょう。

それ程多くの場面で忍耐を強いられているのですが、わたしたちは果たして忍耐から何かを学んでいるのでしょうか。ある意味、いちばん多く積み上げてきている徳であるにもかかわらず、そこから学ぶことがあまりにも少ないのではないでしょうか。そこで今週は、忍耐がわたしたちキリスト信者をどこまでたどり着かせてくれるのか、見極めたいと思っています。

忍耐と言っても、これまでの経験から思い知らされているように、何も学べずに終わる忍耐もあり得ます。憎しみを心に抱いたまま、我慢し続けている。それも忍耐なのでしょうが、おそらくそのような忍耐は不毛なのだと思います。忍耐することで何かをいただく、イエスに少しでも触れることができるように、要点を押さえてみましょう。

イエスの言葉から確かに言えることは、忍耐する人は、命をかち取るということです。どんな命でしょうか。「中には殺される者もいる」（16 節参照）と仰ったのです。殺されてもなおかち取ることのできる命、それは神が与えてくださる永遠の命です。滅びることのない、だれからも取り上げられることのない神の命です。わたしたちは忍耐によって神の命をかち取るのです。永遠の命を得るのであれば、それはわたしたちが神と出会っていることと何ら変わりません。忍耐によって、わたしたちは神と触れ合うことになるのです。

忍耐のすばらしさをいろんな面から確かめることにしましょう。3つ取り上げてみたいと思います。その１つ、まことの忍耐は、愛を現します。誰かの介護をしている人がいるとして、お世話している人の着替えを手伝うこと一つ取り上げても、しばしば忍耐を求められます。まことの忍耐を積む人は、お世話しているその人に、わたしの心の中の愛を現しているのです。あるいは食事の介助をしている時でも、まことの忍耐を積むことで目の前の相手に、またその相手を通して神に、わたしの心の愛を現すことになります。

忍耐が愛を現すことが分かれば、そこから次のことも考えるに違いありません。わたしはこれまで介護に携わってきたけれども、愛を現すチャンスに変えてこなかった。忍耐していたけれども、わたしは苦しい思いだけを積み上げてきた。今日から、愛を現す忍耐へと気持ちを向けていきましょう。すぐにはそうならないかも知れませんが、まことの忍耐は、人間を救うためにあらゆることを忍耐された神の業に、参加するまたとない機会なのです。

次に、忍耐はわたしに与えられた生き方を完成させるものです。結婚生活に置かれている人、修道生活に召されている人、司祭に召された人、いろんな生き方に神はわたしたちを置いてくださっていますが、いずれの生き方（召命）についても、忍耐なくしてはそれぞれの道を全うすることは叶いません。キリストはそのことを身をもって示してくださいました。イエス・キリストは「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ち、愛をもって互いに忍耐する」（エフェソ 4:2）模範を残してくださったのです。こうして、人としての一生を全うして、わたしに倣い

なさいと招いておられるのです。

忍耐せずに置かれた生き方を全うできるならどれほど楽でしょう。現実は、そんなに簡単なものではありません。どんな生き方に召されていても、たとえ他人からは暢気に暮らしているように見えても、完成するためには忍耐が必要なのです。忍耐する覚悟を持たずに逃げようとすれば、完成できずに人生を終えることになるのです。

さらに、忍耐することでわたしたちは真の神の子らとなります。神は人間を愛し赦し救うためにあらゆる忍耐を通ってこられたのですが、わたしたちがまことの忍耐を積むなら、そのままわたしたちは神に似る者となります。同時に忍耐する人は、心の柔和・謙遜なイエスの弟子となることができるのです。

これほどの高みに、忍耐はわたしたちを運んでくれるのです。以前もわたしたちは数多くのことを忍耐してきました。場合によっては我慢ならないことすら耐え忍んできたのです。ですが、なかなかそのことがわたしを清め、キリストに似る者となる機会に結びついていませんでした。

今は違います。忍耐する時、わたしは一歩ずつ真の神の子、イエスの真の弟子に近づいているのです。苦難は忍耐を生み、忍耐する人はイエスによって希望を手に入れるのです。

最後に、聖書の中でいちばん忍耐について話してくれた聖パウロの言葉を紹介しておきます。コリントの信徒への手紙二の引用です。少し長いですが、彼の心の叫びに耳を傾けましょう。

「だれかが何かのことであえて誇ろうとするなら、愚か者になったつもりで言いますが、わたしもあえて誇ろう。彼らはヘブライ人なのか。わたしもそうです。イスラエル人なのか。わたしもそうです。アブラハムの子孫なのか。わたしもそうです。キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。

苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。

しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦労し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渇き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました」（II コリント 11:21-27）。

先にこれほどの忍耐を積んだ人が、忍耐によってわたしたちをどこまで運んでくれるか、教えてくださっているのではないでしょうか。

王であるキリスト(ルカ 23:35-43)

主日の福音 13/11/24(No.679)

王であるキリスト（ルカ 23:35-43）

わたしは今日キリストを王としていただく

皆さんにもお知らせをしておりました通り、この説教の後に、〇〇さんの洗礼式と堅信式をおこないます。その時を待っているお父さんである〇〇さんにとっては、説教などどうでもよいから、早く緊張する瞬間から解放されたいという思いでいっぱいかもしれません。どうかしばらくのあいだ説教に耳を傾け、このあと行われる秘跡にふさわしく与れるよう、中田神父の説教を最後の準備にあてて欲しいと思います。

今週は年間の最後の主日、「王であるキリスト」の祭日です。わたしたちの生活が、主キリストを王として認める生活になっていたか、振り返る日曜日です。またこれまで主キリストを王として認める生活を心がけてきた人にとっては、王であるキリストに導かれて過ごした日々をあらためて感謝する日曜日と言ってもよいでしょう。

まずは選ばれた福音朗読から、イエスはわたしたちにとってどのようなお方であるかを確認しましょう。イエスがどのような方であるかを確認するなら、その姿にわたしたちがどのように応えようとしたかも明らかになります。１つ、取り上げたい言葉があります。それは、「自分を救ってみろ」という言葉です。

議員たちが十字架上のイエスをあざ笑って言います。「選ばれた者なら、自分を救うがよい。」（23・35）また兵士たちが酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して言います。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」（23・27）さらに十字架にかけられていた犯罪人の一人がののしりました。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」（23・29）

わたしは、人々がイエスに言った言葉は、そのまま自分に返ってくると考えます。あざ笑い、侮辱し、ののしりながら「自分を救ってみろ」と言った人々。天に唾を吐く者は、自分に返ってくるのです。それと同じように、十字架上のイエスをあざ笑い、侮辱し、ののしる人は、「自分を救ってみろ」という言葉が自分に返ってくるのです。

あざ笑い、侮辱し、ののしる人が自分を救えるのでしょうか。これらの人々に罪がないと言えるでしょうか。この人たちは自分の罪を自分で清め、自らを救うことができるでしょうか。決して救えないのです。だからこそイエスは、自分で自分を救えないあわれな存在である人類を救うために、十字架上でいのちをささげてくださったのです。

王と呼ばれる人は国民のためにあらゆる努力を惜しまない人です。国民が救われるために、必要ならいのちさえも投げ出すはずです。イエスはすべての人の王として、すべての人のためにいのちを投げ出しました。たとえご自分をあざ笑い、侮辱し、ののしる人であっても、その人の救いのためにいのちを差し出したのです。十字架から降りるということは、これらイエスを憎む人々の救いを放棄することになるのです。

今日わたしたちは、イエスはわたしたちの王ですと言い表すために

このミサに集っています。わたしのためにも、いのちをささげてくださり、わたしを王の民として呼び寄せてくださるイエスに、心から敬意を表そうと、このミサに集まっているのです。イエスはわたしたちの王ですから、わたしたちはイエスの心を曇らせるような言葉や態度を取りませんとあらためて決意するために、ここにいるのです。

長い長い時間をかけて、イエスを王として認め、受け入れた人が物語に登場しています。イエスと一緒に十字架にかけられていたもう一方の犯罪人です。イエスの右と左に十字架に付けられた人は、もはや十字架上で死ぬ以外に処罰のしようがない人たちでした。

つまり、この時まで罪を重ね、神にも背を向けてきた人たちです。けれども、この長い人生の締めくくりに、イエスが王であることを理解し、自分がもし王の国民になれるのであれば、思い出してほしいと願ったのです。

イエスはこの人に言いました。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（23・43）イエスを王と認めたあなたは、たとえどんなに罪があっても、たとえどんなに長い間わたしから離れていたとしても、今日わたしの国民になった。イエスは、どんなに離れていた人でも、どんなに時間がかかった人でも、わたしを王として、救い主として認めたその日から、わたしの民であると言ってくださるのです。

今日洗礼をお受けになる〇〇さん、今日に至るまでの道のりを少し聞かせていただきました。結婚される以前、独身時代に、個人的に洗礼のための勉強をお受けになったそうです。それから何十年時間が経ったでしょうか。神さまは長い時間を経て、もう一度声を掛けてくださいました。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒にいる」イエスは〇〇さんを、神の民として受け入れてくださったのです。

洗礼を受けるに当たって、もしかしたら〇〇さんには不安に思うことがあるかも知れません。けれども、イエスはその不安を十字架上で担ってくださいます。担いきれないと思えるような重荷を担い、救ってくださるために、イエスは今日という日を用意してくださったのです。信頼を寄せて、これから行う洗礼式・堅信式に臨みましょう。

そして、イエスは今日から早速、神の民を養う食べ物を与えてくださいます。王であるキリストは、民を常に養い、育て、導きます。今日秘跡の恵みにあずかることで、ご自身を王であるキリストに委ねましょう。王であるキリストの導きを受け入れますと態度で表しましょう。

これからは、ここに集まった皆さんが家族であり、兄弟であり、姉妹です。唯一の王をいただいている神の民として、互いに神への賛美と感謝を日々忘れないようにしましょう。

これから洗礼式と堅信式に移ります。

待降節第１主日(マタイ 24:37-44)

主日の福音 13/12/01(No.680)

待降節第１主日（マタイ 24:37-44）

到来のその時を逃さないように待つ

司祭研修会に参加してきました。来年の５月連休に開催される「教区代表者会議（教区シノドス）」の提言をまとめるための「集中審議」と言ったほうがよい内容でした。集中審議をしたのですから、この討議が実りある提言を大司教さまに示すことにつながればと思っています。

教会の暦「教会暦」が新しくなり、今日から待降節が始まります。典礼の周期としては日曜日ごとにマタイ福音書をおもに読み続けるＡ年が始まりました。イエス・キリストの生涯が描かれているのが福音書で、四福音書あるのですが、それぞれ語られる相手を意識した書き方をしています。その中でマタイ福音書は、ユダヤ人に対し、イエス・キリストこそ旧約の預言者が告げ知らせていた救い主であると説明する福音書です。

待降節についてもう少しお話ししましょう。日本の教会で、クリスマスを準備する期間を「待降節」「主の降誕を待つ季節」と呼ぶわけですが、もとの言葉はラテン語の”Adventus”「到来」という意味合いの言葉が使われています。

使われている言葉の違いは、何を強調しているかについても違いが出て来ます。もとの言葉では「キリストの到来」ということが強調されていることが分かります。日本語の「待降節」だと、わたしたちの「待つ姿勢」が強調されていると思います。ですが、本来はキリストの到来が強調されるべきです。わたしたちが待つのは、キリストがおいでになるから待つのです。

救い主の到来を待っていた多くのユダヤ人は、救い主が到来しても救い主を救い主と認めることができませんでした。ユダヤ人は今も、救い主を待っているのに到来していないと考えています。ごくわずかの人々、羊飼いや、占星術の学者たち、ほんの一握りの人たちだけが、救い主の前に膝をかがめ、その到来を喜んだのです。

キリストの到来に強調点を置くと、わたしたちの待つ姿勢もはっきりしてきます。２つ考えてみました。１つは、いつどんなときにおいでになっても、救い主を迎えることができるように準備して待つことが必要です。与えられた福音朗読はそのことを教えようとしています。

「（そのときまで）何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。」（24・39）とか、「目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。」（24・42）さらに「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」（24・44）と言われています。

もう１つの心構えは、救い主がおいでになるのですから、何かが変わるはずです。そこで、「わたしの中で、何かが変わる」「わたしたちの教会で、何かが変わる」そういう心構えで、救い主の到来である主の降誕を待つのがよいと思います。

イエスの到来は、具体的に何かを変えてくださるでしょうか。イエスの言葉から考えると、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マタイ 9・13）とありますから、自分では招かれないような生活をしてきた人が、イエスがおいでになることで招かれる、そういう社会に変わります。

何かの過ちがあって、自分では元に戻せない、過去を消せないと思い悩んでいる人がいるかも知れません。そんな悩みの中にある人をイエスは招いて、変えてくださるためにおいでになります。

また、「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」（ヨハネ 10・10）とあります。今までは、何かを使ってだれかにいのちを与えることしかできませんでした。それはいつまでもなくならないいのちを与えることはできませんでした。

イエスはわたしたちのもとにおいでになって、滅びることのないいのちを与えてくださいます。ご自身をいのちの糧として与えてくださいます。イエスのもとに来ること、イエスのもとに留まることで、わたしたちは永遠のいのちに満たされます。

最後に、「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。」（ヨハネ 12・47）と言われます。神が人を裁こうと思えば、どんなに小さなことでも見つけて裁くことはできるでしょう。けれども、どんなに罪が多くても、どんなに闇が深くても、どんなに長い隔たりがあっても、神は世を救ってくださいます。そのことを見える形で示すために、救い主はおいでになります。

こうして、今まで変えることができなかったものを、すっかり変えるために到来します。あなたが変えられるチャンスは、もうすぐそこまで来ています。救い主の到来に気付かずに通り過ぎることのないようにしましょう。クリスマスは、主がおいでになることの目に見えるしるしです。ただし、わたしが変えられるのは、クリスマスの日とは限りません。

その日その時を準備不足のために失うことのないように、この待降節の期間を大切に過ごしていきましょう。イエスの到来によって変えられた。そんな喜びのうちに、今年のクリスマスを迎えることができますように、このミサの中で恵みを願っていきましょう。

待降節第 2 主日(マタイ 3:1-12)

主日の福音 13/12/08(No.681)

待降節第２主日（マタイ 3:1-12）

悔い改めにふさわしい実を結ぶ

土曜日、保育園のクリスマス会に参加してきました。今年のクリスマス会は、わたしにとって忘れられないクリスマス会となりました。クリスマス会の最初に用意されていた聖劇で、たくさんの園児が練習したことを立派に演じている中、羊飼いが羊を導きながら登場しました。その、羊飼いが引き連れてきた小さな羊たちの中の１匹が、会場の隅に座っていたわたしを見つけて、「神父さま～」と手を振ってきたのです。

わたしはとっさに手を振って返してあげたい衝動に駆られましたが、羊飼いの家畜の羊が手を振っているのって演技として変ですよね。もしわたしが手を振って返したら、それこそ聖劇を台無しにしてしまうのではないかと思い、手を振りたいのを何とか我慢して、「神父さまも君を見つけたよ」と目で合図を送って、聖劇を見守りました。

ところが羊を演じている小さな子供には、手を振って返してもらえない理由など分かるはずがありません。「へんだなぁ」と思ったのか、何度も何度も「神父さま～」とその園児は手を振っておりました。わたしはもうたまらなくて、胸を締め付けられる思いでした。皆さんが主任司祭の立場でしたら、こういうとき手を振って返すのでしょうか。

さて、この日のクリスマス会の聖劇を観て、わたしは今週待降節第２主日の構想が思い浮かびました。とっても可愛い園児が聖劇の最中に手を振っています。手を振って返したい。でも、今はその時ではない。よくよく考えて、その時がやって来たら決してタイミングを遅らせることなくすぐに園児に手を振り返すことでしょう。神の救いの計画は、たとえばこのようなものではないだろうか。そう思ったのです。

待降節第２主日は、洗礼者ヨハネの登場を取り扱います。神は救いの計画の中で、御子をお遣わしになる直前に、洗礼者ヨハネを登場させることを計画なさいました。それは、何となくそうしようと思ったのではなく、タイミングを遅らせることなく、的確にヨハネを旧約の最後の預言者として登場させ、救い主を迎える準備をさせたのです。

洗礼者ヨハネを、救い主がお生まれになる 50 年前に登場させる可能性はあったでしょうか。主の到来を待ち望むイスラエルの民は、「主よ来てください」と、何度も神に手を振り続けていたのです。神はそれをよくご存知で、この民を救うためにすぐにでも主への最後の準備をさせる預言者を送ることは可能だったでしょう。けれども神は、もっともよいタイミングを待って、的確に、ヨハネを人々に遣わしたのです。

神が計画を実行されるとき、その計画はもっとも時に叶っているはずです。炎のような口調で荒れ野に集まった人々を悔い改めさせるヨハネは、彼のすぐ後においでになる救い主を迎える最高の準備をさせる最適の人物でした。ヨハネがユダヤの人々に求めたことは、すべてを横に置いておいでになる救い主のために自分を差し出すことでした。

「アブラハムの信仰を受け継いでいる」という民族としての誇りや、

「わざわざ荒れ野のヨハネのもとに来て罪を悔い改めている敬虔な人間だ」といった自負心、そんなちっぽけな優越感をかなぐり捨てて、おいでになる救い主に自分を差し出しなさいと主張するのです。ひとことで言うなら、「悔い改めにふさわしい実を結べ」（3・8）となります。

「悔い改めにふさわしい実を結べ。」具体的には、後から来られる方が授けてくださる「聖霊による洗礼」を受けるということです。アブラハムの血筋によるのでもなく、進んでおこなう償いのわざによるのでもなく、ただ「父と子と聖霊による洗礼」に生きる土台を置く。この生き方を、「悔い改めにふさわしい実」としたのです。それはまた、「救い主、イエス・キリスト」に生きる土台を置くことでもあります。

洗礼者ヨハネは、まだ見ていないお方にすでに生きる土台を置いて生活し始めていました。荒れ野にしりぞいたのも、「後から来る方」にすべてを委ねて生きる決意の表れだったのでしょう。わたしたちも、ヨハネが今週示そうとする生き方を選ぶ必要があります。すなわち、「わたしの生きる土台であるイエス・キリストから離れない」この決意を表す必要があるのです。

わたしたちは洗礼によって、イエス・キリストという土台を据えられました。かつて洗礼は、川のほとりで授けられ、水の中に３度身を沈めていました。今でもキリスト教のあるグループは、体を沈めるための浴槽が用意され、その中に身を沈めて洗礼を施しています。

体を水の中に沈め、また水から引き上げる動作は、洗礼を受ける人がいったん自分に死に、キリストによって生きることを表しています。すると、「父と子と聖霊による洗礼」を土台として生きる人は、キリストのために生きることを行動で示すことが求められます。「悔い改めにふさわしい実を結べ」と、ここでも言われているのです。

３つ例を挙げたいと思います。まずは、日頃から秘跡に親しむことです。聖体拝領、罪の赦し、節目節目に迎える堅信の秘跡、婚姻の秘跡、病者の塗油などです。日頃から秘跡に親しむ生活は、土台である洗礼の恵みをさらに堅固なものにします。

次に、聖書や教会の教えに親しむことです。長い歴史の中で教会も枝を伸ばしてきましたが、枝葉の部分はさまざまに変化することでしょう。けれども聖書と、公会議の教えのような教会が保持している根本的な教えは変わることはありません。信仰年は終わりましたが、信仰の核心の部分を確認することはますます大切になっています。

最後に、あなたのほかにあと１人２人、「父と子と聖霊による洗礼」を土台として生きる人を見いだしましょう。あなたを通して、「わたしも、あなたと同じ土台に人生の基礎を置きたい」と願う人を見つけましょう。「悔い改めにふさわしい実を結べ」との洗礼者ヨハネの呼びかけは、すでに同じ信仰にある人にも、まだ本当の意味で主の降誕を迎えない人のためにも向けられています。わたしたちが、ヨハネの呼びかけをすべての人に届けましょう。そのための恵みと力を、このミサの中で願いましょう。

主日の福音 13/12/15(No.682)

待降節第３主日（マタイ 11:2-11）

行って、見聞きしていることを伝えなさい

年末、クリスマスはもちろんですが、マラソン大会の話が出る頃だがなぁと思っている人もいるでしょう。毎年１月最後の火曜日は司祭マラソン大会ですが、今年は違う目的に時間を充てようと思っています。

今年青砂ヶ浦に赴任してきた神父さまが、来年２月福岡の今村教会までの徒歩巡礼を計画しています。神父さまの前任地は今村教会でした。今村というと、古くからカトリック信者が住み着いている土地です。

かつて浦上のキリシタンが大浦にプチジャン神父を訪ねて信徒発見につながり、それから程なくして、浦上の４人の信徒が今村を訪ねて行って今村のキリシタンが発見されたという歴史があります。当時のことですから、浦上キリシタンは歩いて今村に行ったわけです。

そこで青砂ヶ浦の神父さまが、「今村の信徒発見の出来事を再現するために、浦上から今村まで徒歩巡礼をしようと思う。だれか一緒に行かないか？」と上五島地区の司祭たちに個人的に投げかけたわけです。

わたしは最初尻込みしまして、「いやそれはちょっと」と思ったのですが、わたしよりも若い司祭たちは二つ返事で、「先輩やりましょう。ついていきます」と参加を申し込んだのです。それでもわたしは、簡単に「行く」とは言えませんでした。何せ 135km くらいの距離がありますから、勢いで「ぼくもわたしも」とは言えないわけです。

そうこうしているうちに、「今度の月曜日、巡礼に備えて歩きます。今回は青砂ヶ浦から、中ノ浦までです。次回は、青砂ヶ浦から頭ヶ島までです」と練習が始まりました。参加を名乗り出た後輩司祭と会うたびに、「先輩、練習に行かんと？」と言われ、「行こうよ」みたいな雰囲気になりまして、ついつい「じゃあ、行こうかな」ということになってしまったのです。それで今回、２月中旬の今村徒歩巡礼に備えるため、マラソン大会はお休みします。ちなみに、先に巡礼に同行すると名乗り出た後輩司祭たちは、マラソン大会にも出るそうです。元気ですね～。

さて福音朗読は、ヘロデに投獄された洗礼者ヨハネが、弟子を遣わして「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」（11・3）と尋ねさせる場面から始まっています。洗礼者ヨハネは、イエスのことを自分が告げ知らせていた「来るべき方」と見るべきか、ためらいがあったということになります。

ヨハネがイエスを信用していないという意味ではありません。ヨハネ自身が炎のような言葉でメッセージを語っていましたから、きっと後から来る方も、たちまちにしてこの世の善悪を裁き、あるべき姿に導く「力に満ちた方」であろうと考えていたのです。ところが、実際のイエスは「彼は争わず、叫ばず、その声を聞く者は大通りにはいない。正義を勝利に導くまで、彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。」（マタイ 12・19-20）という姿で登場したのです。

これには洗礼者ヨハネも戸惑ったことでしょう。人は自分で思い描

いた印象からその人を判断し、そこからなかなか抜け出せないものです。イエスはあらためて、ヨハネの弟子に「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」（11・4-6）と告げたのでした。

これは、イエスが示す神の国の姿です。強い者が権力を振るう国ではなく、弱く貧しい人が守られる国。これがイエスの示す神の国です。たとえ、洗礼者ヨハネの頭になかった神の国の示し方であったとしても、イエスが示す姿でしか、神の国を垣間見ることはできないのです。

イエスは群衆にヨハネについて話します。「はっきり言っておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」（11・11）もしヨハネが、イエスの示す神の国に希望を見いだすことができなければ、イエスに希望を見出したほかのすべての人、羊飼い、占星術師、シメオンやアンナのほうがヨハネよりも偉大だということになります。

先週、「すべてを横に置いて、おいでになる救い主のために自分を差し出す」ということを考えましたが、ヨハネも、自分が思い描いていた救い主のイメージを横に置いて、今示されているありのままのイエス・キリストを受け入れるよう求められたのです。彼はきっと喜んでありのままのイエス・キリストを受け入れたことでしょう。

救い主は、もうすぐおいでになります。神が、御子を通して、神の国をもっとも具体的に示すためにおいでになります。家畜の小屋にお生まれになること、羊飼いや、占星術を本業とする人たちの訪問を受けること、地上の権力者から命を狙われること、徴税人や罪人の仲間になること、苦しみを受け、十字架にはりつけにされること。それらすべてが、父である神がもっとも具体的に神の国を現そうとした方法だったのです。

「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。」いまだイエス・キリストを救い主と認めない人々に「あなたは何をよりどころにしているのか」と聞かれたときに、「もっとも具体的に神の国の姿を示してくださった幼子を、飼い葉桶の幼子を、わたしたちは信じている」と伝える必要があります。わたしたちが想像する救い主ではなく、わたしたちに伝えられた通りの救い主を、人々に知らせに行く必要があります。

1865 年、それまで 260 年隠れていた長崎のキリシタンたちが大浦のプチジャン神父のもとに出向き、日本の信徒発見の歴史の一頁が刻まれました。2 年後の 1867 年、135 キロの道のりを歩いて今村の信徒発見に繋がりました。わたしも不承不承ではありますが、長崎のキリシタンが歩いた今村までの道のりを上五島の神父さまたちと歩いてみたいと思います。当時の長崎のキリシタンが、「行って、見聞きしていることを伝えなさい」というイエスの声を心に携えて歩いた道をたどり、救いの喜びを知らせに行った浦上キリシタンの思いに触れたいと思います。

「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。」皆さんも、

救い主が来られるという喜びを、あなたの大切な人に伝えに行きましょう。イエスによって示された神の国を、まだ知らずにいる大切な身内や友達に知らせましょう。待ち続けた救い主はもうすぐおいでになり、喜びの知らせ、福音が、今まさに告げ知らされようとしています。

　　わたしたちが見聞きしたことを伝えて、信じてくれる人も信じてくれない人も出てくるでしょう。けれども、わたしたちが伝えなければ、幸いに招かれる人も招かれずに終わるかも知れません。イザヤは「いかに美しいことか。山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は」（52・7）と預言しました。わたしたちが救い主を知らせる足となれますように、このミサの中で恵みを願いましょう。

待降節第 4 主日(マタイ 1:18-24)

主日の福音 13/01/01(No.683)

待降節第４主日（マタイ 1:18-24）

その名はインマヌエル

先週月曜日、来年２月の今村巡礼に備える徒歩特訓の号令が掛かりました。曽根教会から、仲知教会までを往復してきました。浜串の皆さんにイメージしやすいように言うと、浜串の上の道路を、鯛ノ浦港まで往復すると考えたらよいと思います。

今回は後輩司祭３人と、発起人の先輩司祭１人とわたしで訓練に出発しました。仲知教会まで峠をいくつも越えていくのですが、わたしだけ登りで遅れてついていけなくなり、息が切れ、何度か頭がくらくらして座り込みそうになりました。これで本番に間に合うだろうか、迷惑をかけるのではないかと心配になりました。

幸いに、往復 20km を何とか歩き通し、ご褒美の曽根温泉にゆっくり浸かることができました。ただし、服を脱いだときに気付いたのですが、股ずれを起こしていまして、温泉に浸かるときはかなり染みました。股が痛くなったり足が痛くなったら、それは練習を取りやめる合図です。なぜかと言うと、「股・足・痛→また明日」だからです。

今回の 20km 徒歩訓練、歩数で言うと３万歩でした。人生で初めて、１日に３万歩も歩きました。これは明らかに、「一緒に歩いてくれる仲間がいたから」なし遂げられたことです。１人で歩こうとしていたら、とてもこんな距離は歩けなかったでしょう。特にわたしは、ずっと遅れ気味にみんなの後を追いかけたわけですから、１度もみんなを引っ張ることはできなかった、迷惑を掛けたわけです。

でも、みんなは文句一つ言わず、わたしを気遣いながら、最後まで歩き通してくれました。だれかが一緒にいてくれるって、こんなに力強いのだなぁと、これまででいちばん感じた日でした。

今日の福音朗読は、ヨセフが、すでに母となっているマリアを受け入れようとする場面が描かれています。ヨセフは「ひそかに縁を切ろうと決心していた」（1・19）とあるように、自分一人で目の前の出来事を受け入れることは不可能だったのです。マリアが自分の婚約者であるということは受け入れることができましたが、まだ一緒に暮らしていないのに母になっているという事実は受け入れることができなかったのです。

そこへ、主の天使が夢に現れて、事の次第を詳しく説明します。説明と同時に、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。」（1・20）と促します。たった今、受け入れることは不可能だと考えたのに、夢で受け入れよと言われても、はいそうですかとは言えないはずです。

けれども、「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ（た）」（1・24）となっています。ついさっきまで不可能だと感じていたことを、どうして受け入れることができるようになったのでしょうか。それは、夢の出来事を通して、「神は我々と共におられる」というメッセージを理解したからです。

ヨセフは正しい人、誠実な人でした。きっと律法や預言書の学びも忠実だったでしょう。すると、「神は我々と共におられる」を連想させるいろんな聖書の言葉が思い浮かんだのだと思います。

たとえば、エジプトを脱出したイスラエルの民が、これから取得するカナンの土地を偵察しますが、偵察した人のうちにはエジプトに引き返そうと言う人もいました。そこで民の間に分裂が生じます。その時偵察に行ったヨシュアとカレブは「住民を恐れてはならない。彼らは我々の餌食にすぎない。彼らを守るものは離れ去り、主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。」（民 14・10）と言います。主が我々と共におられる。恐れることはないとヨセフも思い起こしたでしょう。

また、かつて少年ダビデが、ペリシテの巨人ゴリアトと戦ったとき、「この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される。」（サム上 17・47）と断言しました。戦力的には太刀打ち出来なかったイスラエル側が、「神は我々と共におられる」という思いに勇気づけられて戦いに勝利したことも、ヨセフは思い出したかも知れません。

こうして、「神は我々と共におられる」と分かったとき、どんな困難も乗り越えることができるというのがヨセフの知っていることでした。ヨセフは眠りから覚めたとき、出来事をたった一人で背負うわけではない。「神は我々と共におられる」この言葉は信頼できる。そう考えたのです。

すでにマリアは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」（ルカ 1・32）と言って、神が我々と共におられることを信頼して出来事を主に委ねていました。ヨセフも妻マリアを迎え入れ、お互いの気持ちを確かめ合ったことでしょう。自分たちだけではとても起こっていることを受け止めることはできないけれども、「神は我々と共におられる」この言葉は信頼に足りる。ヨセフもマリアもその思いは変わらなかったので、神の計画は大きく前進したのです。

人間は、神の計画をすべて理解するにはあまりにも小さな存在です。けれども、「神は我々と共におられる」この言葉を信じることだけの力は与えられています。それが、１人だけで信じて道を歩くのは困難かも知れませんが、同じ思いを持っている人がそばにいてくれたら、どんな険しい道でも歩き続けることができるでしょう。マリアとヨセフの夫婦は、今日わたしたちにそのことを教えてくれているのだと思います。

わたしも、今村徒歩巡礼のための特訓に加えてもらったとき、これを３日間も続けるなんてとてもできないと最初は恐ろしくなりましたが、わたし１人が歩くのではなくて、「神が我々と共におられる」と思うと、勇気が湧いてきました。しかも同じ思いを持つ司祭がそばに何人もいて支えてくれるので、目指す場所まで歩いて行こうという気になれました。

わたしたちの人生の歩みは、わたし１人で担っているのではありません。「神が我々と共におられる」歩みです。同じ信仰の理解を持つ人となら、さらに心強いはずです。神のご計画に従って歩み始めたヨセフとマリアに倣い、神のご計画の中にある人生の歩みを続けましょう。神に信頼して生きることを全身で示してくださる御子がもうすぐおいでになります。わたしたちも心を整え、御降誕のその日を迎えることにしま

しょう。

主の降誕（夜半）(ルカ 2:1-14)

主日の福音 13/12/25(No.684)

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

神は「不可能」からご計画を始める

主の降誕おめでとうございます。今年の御降誕にあたり、わたしは神のご計画の不思議さについて考えてみました。それは、人間的に「不可能」と思われることから神のご計画が始まるということです。救い主をお遣わしになる直前の時期にも、不可能と思われる３つの出来事を神は可能になさいました。

１つは、マリアが神の母となることの承諾です。マリアは天使から「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」（ルカ１・31）と知らされたとき、その時点で人間的には不可能であることをはっきり知っていました。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」（同１・34）

マリアはよく分からなかったから天使に尋ねたのではなく、「人間的に不可能なことが可能になるのはなぜですか？」と尋ねたのです。それでも天使の「神にできないことは何一つない。」（同１・37）という返事を聞いて、「神がご計画を動かしておられる」と理解し、すべてを委ねることにしました。

２つめは、夫ヨセフの承諾です。ヨセフも、婚約者であるマリアが一緒になる前から母となっている事実を受け入れるのは、人間的に不可能なことでした。けれどもヨセフも、「神は我々と共におられる」という思いを理解し、人間的には不可能だけれども、神が我々と共におられるから、このご計画は信頼出来ると感じたのです。

そして最後３つめは、神の御子が家畜小屋でお生まれになったことです。「布にくるんで飼い葉桶に寝かせ」（ルカ２・7）、地上に姿を現しました。全能の神が、その御子を、さまざまな危険が考えられる場所にお与えになる。こんなことがなぜ可能なのでしょうか。

まったく無防備な姿の幼子が、命を危険にさらすような場所にお生まれになりました。そして３歳にもならないうちに、ヘロデからも命を狙われます。こんな危険な場所と環境が予測出来ているのにそれを選ぶのは、人間的には不可能なことです。それでも神は、人間的には不可能な状態から、ご自分のご計画を始められたのです。

わたしたちが喜び迎えた幼子イエスは、幾重にも張り巡らされている不可能な状況を乗り越えて、おいでになりました。幼子イエスは「神にできないことは何一つない。」との神の思いを、「布にくるんで飼い葉桶に寝かされて」全身で表してくださっています。

不可能が可能になる様子を見た人間は、どんな反応をするのでしょうか。幼子イエスを与えてくださった父なる神は、わたしたちに何を求めているのでしょうか。一つの光景がそれを教えてくれています。「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」（2・13-14）

つまり神は、わたしたちに「神を賛美しなさい」と呼び掛けているのではないでしょうか。人間的に不可能な出来事から、神はしばしばわたしたちにご自分の計画を明らかにしてきました。不可能と思われたことが乗り越えられた時、神のご計画が動き出していることに気付いて神を賛美しなさいと、教えているのだと思います。

実際、救い主の誕生に最も近く関わった人たちは皆、神をたたえています。先駆者ヨハネを宿したエリサベトは、「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。」（ルカ 1・42）と賛美の声を上げます。これに応えてマリアも、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」（同 1・47）と神を賛美しました。

ヨハネの誕生を喜ぶ父ザカリアも、「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた。」（同 1・68-69）と賛美の声を上げました。

さらに付け加えるなら、マリアとヨセフが幼子イエスを神殿に献げに来たとき、シメオンは「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」（同 2・29-30）と感謝を口にしました。

不可能とも思える中で決定的な神のご計画が実現した様子を見て、人々は皆賛美しました。わたしたちも今、人間を救う神のご計画を、マリアの腕の中に見ているのです。羊飼いが見守る視線の先に、占星術の学者たちが礼拝し、贈り物を献上する先に、小さな小さな全能の神がおられるのです。

わたしたちは力の限りこの出来事を賛美しましょう。わたしの歌、わたしの祈りに喜びを載せて、神を賛美しましょう。すべての人に訪れた救いを今ここで力の限りたたえるなら、礼拝に集まることのない人々にも、喜びは届いていくでしょう。

１つ、不可能を可能にしましょう。みなさんの中に、悲しみに打ちひしがれ、温かい心を準備出来ない人がいるかも知れません。そんな人にも、幼子イエスはおいでになります。悲しみの中でも、幼子が眠る温もりのある部屋を整えてください。温かい心を用意するなら、あなたはすでに不可能を可能にしています。不可能が可能になったなら、そこに神を賛美する力が湧いてくるのです。

どんな困難も神は乗り越えて、ご計画を進めてくださいます。わたしたちに与えられた幼子がそのしるしです。今日幼子をわたしたちの心に迎え入れ、賛美しながら家路につきましょう。神を賛美することを知らない人にも、幼子誕生の喜びを知らせ、賛美の歌を共にする人に導くことができますように。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

主日の福音 13/12/25(No.685)

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

肉となった言（ことば）に耳を傾ける

あらためて主の降誕おめでとうございます。夜半のミサでわたしたちは、神が不可能を可能にして人類の救いのために御子をお遣わしになったことを黙想しました。今日、ヨハネ福音書が語る神の救いのご計画を黙想することにしましょう。

ヨハネ福音書は、神である御言葉の働きについて語ります。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（1・1）「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（1・3）一つの点に注目してみました。それは、「肉となった言（ことば）に耳を傾ける」ということです。

「耳を傾ける。」これまでの司祭生活の中で、わたしには耳に残っている言葉、今でも忘れない言葉がいくつかあります。これまで赴任した教会でいろいろな人と出会い、いろいろなことを言われましたが、中でも「貴重な意見だったなぁ」と振り返る言葉があります。

初めて赴任した教会でのことでした。生意気なことを言っていた時期だったと思います。一度だけ、主任司祭にお叱りを受けたことがありました。「お前なぁ、60 歳にならないと言うべきでない言葉もあるんだぞ」と言われました。ある奉仕のグループに言った無責任な言葉を、これは不適切であると叱られたのでした。

また、初めて主任司祭になった小教区で、正月に男性信徒が司祭館に訪ねてきました。玄関で座り込みましたから、しこたまお酒を飲んでいたのでしょう。その人から「お前はこの教会の信者一人一人の声を聞いてみようと思ったことがあるか」と言われ、わたしは「全員の声を聞くのは難しい。全世帯、家庭訪問して回るわけにはいかないから」と答えたのです。すると「全世帯、一軒一軒訪ねたら、すべての信者の声が聞けるじゃないか」と言い返されたのです。今でもその言葉は、わたしの中で引っかかっています。

言葉は、だれかが耳を澄まして聞いたときに、大きな働きをすることがあります。だれも聞いてくれなければ、言葉は通り過ぎ、消え去っていくでしょう。ところが、だれかが語られる言葉に真剣に耳を傾けるなら、一つの言葉が何十人、何百人を動かし、時には世界を動かし歴史を変えたりするのです。

今日の福音朗読は、おいでになった御子、世の救い主を「言（ことば）」という表し方で示しています。すると、神の言（ことば）がわたしたちに何を期待しているかを知るためには、肉となった言（ことば）に、真剣に耳を傾けることが必要ではないでしょうか。

しかしながら、人間は弱さを持った生き物なので、自分が聞きたくないことについては耳を塞ぐことがあります。その人のために必要なことを言っていても、聞き入れたくないので耳を貸さず、聞こうとしないのです。その人の健康を思って言っている言葉、その人の将来を思って

言っている言葉であっても、それを聞きたくないと思って拒むことがあるのです。

神は御子を、言（ことば）としてお遣わしになりました。そして言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られました。御子はすべての人を造り上げ、すべての人を導く言葉をもっておられます。今は幼子として、わたしたちの間に宿っておられます。わたしたちは真剣に、また謙虚に耳を傾ける必要があるのです。

肉となった言（ことば）、幼子イエスの前に、もう一度近づきましょう。一人ひとりに必要な声を聞き取るために、静かに耳を傾けましょう。自分さえよければとか、独りよがりな生き方をして、さまざまな雑音をため込んでいるかも知れません。

それら雑音を一切追い出して、肉となった言（ことば）の語り掛けに自分を従わせましょう。謙虚に耳を傾ける人に与えられる報いは次の通りです。「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」（1・12）今日一日、肉となった言（ことば）の声にひたることにしましょう。

聖家族(マタイ 2:13-15,19-23)

主日の福音 13/12/29(No.686)

聖家族(マタイ 2:13-15,19-23)

聖家族がたどった「新しい出エジプト」

最近浦桑で買い物をしていた時、鯛ノ浦で暮らすご婦人に「神父さま久しぶり」と声をかけられました。神学生だったときからわたしを知っている人なのですが、わたしを見つけてつい声をかけたくなったそうです。

その人が続けてこんなことを言いました。「お父さん亡くなられてからもう 4 年？5 年かな？神父さんのお父さんが亡くなって思うんだけど、よくまぁお父さんに似たもんだなぁとつくづく思うわけ。そう思ったことありませんか？」わたしも似ているんだろうなぁとは思いますが、そこまで気にしたことはありませんでした。

「お父さんがいた頃は、似ているとは思っても、やはりお父さんはお父さん、神父さんは神父さんだと思ってたわ。でもお父さんが亡くなってみると、まるでお父さんが道を歩いているみたいに神父さん歩いているし、神父さんのしぐさがまるでお父さんがそこにいるように見えるのよ。よくまぁこんなに似たものだと、ほとほと感心してね。」そう言ってその人とはその場を別れました。今となっては思い出すことができない父の面影を、このご婦人との会話で思い出すことができました。

さて聖家族の祝日を迎えました。聖ヨセフに焦点を当てて、今年最後の主日の学びを得ましょう。ヨセフはイエスの幼少期に決定的な役割を果たしたはずですが、あらためて福音書を読み返して、一切ヨセフの言葉が残されていないことに驚きました。本当に、どこにもないのです。

今週の福音朗読から振り返ると、主の天使が夢でヨセフに現れ、「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた」（2・14-15）となっています。「さあ急いで行こう」といった言葉すら、見つけることができません。

再びエジプトからイスラエルの地に行くときも、「ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た」（2・21）となっていますが、ここにもヨセフの言葉は見つかりません。「アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。」（2・22）彼の恐れや不安を伺わせる言葉も見当たりません。

いちばん不思議に思うのは、12 歳になったイエスを伴ってエルサレム神殿に礼拝に行ったあと、両親がイエスを見失い、それから 3 日間かけて神殿に引き返し、イエスを見つけたときです。マリアはその時こう言っています。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」（ルカ 2・48）中田神父の家庭でしたら、父親のカミナリが落ち、平手が飛んでいたでしょう。この場面ですら、ヨセフの言葉を見つけることができないのです。

こうなると、「ヨセフはどんな人柄だったのだろうか」と考え込んでしまいます。お人好しで、一言も口をきけない人だったのでしょうか。けれどもお人好しが、婚約していたマリアをかばい、縁を切ろうと決意

したりできるでしょうか。どんな危険が待ち受けているかも知れない道のりを、マリアとイエスを連れてエジプトまで避難出来るでしょうか。

あるいはまったく違った性格で、父親として絶対的な人物だったのでしょうか。ヨセフが厳しい父親だったことを伺わせる聖書の箇所も見つかりません。それでも、「この親にしてこの子あり」という諺が示すように、弟子を集めるイエスの統率力や、徹底的な奉仕の姿、権力の濫用を決して許さない強さ、人の悲しさに深く寄り添うことのできる感受性など、多くの部分が両親から与えられたもののはずです。ですからきっと、ヨセフがイエスに残してくれた特徴もあると思うのです。

ですから、困難に出くわす家族を最後まで守り抜いたヨセフの人柄を、どうにかして描き出したいと思うのです。そこで気がついたのが、「ヨセフは主の天使の声に、いつも忠実に従っている」ということです。それは、主の天使の言いなりということではなく、神の声に、最高の信頼を置いて生きたということです。

つまり、ヨセフは自分と家族の運命が、完全に神の導きの中にあることを理解し、すべてを、主のご命令に忠実でありたいと願って生きた人だったわけです。ヨセフの言葉が聖書から拾えないのは、ヨセフが一切を、主のみ旨に沿うように生きたしるしだと言えるかも知れません。イエスは、人として、父なる神に一切を委ねて生きるヨセフの姿を、そのまま生き写しにして生きられたのではないでしょうか。

ヨセフが、完全に神の望みに忠実であったとすれば、朗読されたエジプトへの避難とイスラエルの地への出発もまた、神の望みの忠実な再現だったはずです。かつてエジプトを舞台に繰り広げられたご計画がありました。それは出エジプトの物語です。イスラエルの民が神の望みに忠実に留まるなら、民を導いて約束の地に住まわせるというものです。

マタイ福音記者は、聖家族のエジプトへの避難とエジプトからの出発を、かつての出エジプトと重ねていたと思われます。聖家族のエジプトへの旅とエジプトからの旅は、神の望みに完全に忠実であろうとするヨセフを通して、「神が聖家族を導いて、約束の地に住まわせる」という真理を描こうとしているわけです。聖家族は、「新しい出エジプト」をわたしたちに示そうとしているのです。

聖家族の旅が「新しい出エジプト」であるなら、わたしたちも、聖家族に倣って「新しい出エジプト」を体験するよう期待されています。「新しい出エジプト」それは、「今、神の望みに忠実に留まるなら、神はその家族を導いて約束の地に住まわせる」というものです。

あなたが家族を持っているなら、その家族の中で神の望みに忠実であろうと努めましょう。家族を持たない人は、教会という神の家族の中で、神の望みに忠実であり続けましょう。忠実であろうと努力し続けるなら、神はわたしたちを導き、行く手を守り、最後には約束の地である神の国に住まわせてくださいます。聖家族の取り次ぎを願いましょう。